
IS<インフィニット・ストラトス> 流星の騎士

ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトス< 流星の騎士

【Nコード】

N0640S

【作者名】

ソラ

【あらすじ】

女性にしか扱えないIS インフィニット・ストラトスの操縦者を育成するためのIS学園。そこに入学した『世界で唯一ISを使える男』である織斑一夏がIS学園で生活している時、そこに一夏の幼馴染が転校してきた。

1話 プロローグ（前書き）

よろしくお願いします

1話 プロローグ

IS、正式名称<インフィニット・ストラトス> 宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。総機体数は世界で467機。「白騎士事件」と言う事件を切欠に「パワードスーツ」として軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。十年経った現在では世界各国の軍に第2世代機が標準配備され、第3・第4世代機の研究開発が進んでいる。その戦闘能力はそれまでの主力であつた戦闘機や戦車をも凌ぎ、世界そのものを変貌させた。しかし、そのISの唯一の欠点、それは女性にしか扱えない事。これにより緩やかに男尊女卑から男女平等に変わっていた世界は急激に女尊男卑が当たり前となつた。

「シンクロ率、97%…や、やっと……出来た…」

ここはとある会社の研究室。俺、皐月^{さつき} 疾風^{はやて}は眠い頭を何とか動かして目の前の物を完成させた。

「疾風、順調か？」

と言って研究室に入ってきたのは黒いスーツを着て、俺と同じ黒髪を肩甲骨まで伸ばし、真紅の鋭い目に眼鏡を掛けている美青年でここBRAVE社の社長をしている俺の兄、皐月^{さつき} 黒斗^{くると}とウサギの耳の力チューシャをつけ此方も負けない程のスタイルをもつ女性、篠ノ乃 束さんが入ってきた。

「ああ、兄さんそれに束さん。ちょうど良かった。今出来たよ、俺のIS『流星』^{ミィティア}がね」

「おー！！さすがハヤ太君。まさか本当にあの性能の機体を作っちゃうとは。ハヤ太君はほんっとつくづく人間離れしてるね」

「束さん…それけなしているのか褒めているのか分かりませんよ」

ちなみにハヤ太君とは前に某借金まみれの執事のアニメを見てから、そう呼ぶようになった。

正直、勘弁してほしいがこの人に何を言っても意味無いんだよね……

「大丈夫、大丈夫褒めてるってば。うんうん、やっぱりクロくんもだけど、ハヤ太くんも私より天才だね」

「はあゝもう良いです。それで兄さん、千冬さんへの連絡を頼むよ」

「分かった。それでは数日中に転入出来るようにしといてやる。」

「ああ、頼むよ。それじゃ俺は今日一日は寝るよ。さすがに三日徹夜はキツイな」

そっぴゃ、もうここ数日流星^{ミィティア}作るのが楽しいからつい寝るのも忘れていたな……

兄さんは完全に呆れているな。

「三日って…お前その状態でISを作りながら、会社の仕事もしていたのか？」

「ああ、そうだけど……」

「頼むから、体を壊すなよ。お前は俺の大切な家族でここBRAV^{ブレイ}E社の副社長なんだからな」

「へーい。それじゃ、俺は寝る。お休み」

俺はそのまま研究室を出て、隣にある自分の部屋のベッドにそのまま入り、そのまま寝た。

1話 プロローグ（後書き）

感想、アドバイス等お願いします

2話 再会

「へえ、ここがIS学園か。写真で何度か見たが実際に見るとかいな」

ミーティア
流星を完成させた三日後、俺はIS学園の白い制服を着てIS学園の前にいた。

「久しぶりな、疾風」

久しぶりに聞いた声にそちらを向くと黒いスーツを着た女性、織斑千冬さんが立っていた。

「久しぶりですね、千冬さん。すみません、学園の仕事大変でしよ
うに、俺のために抜けてきてもらって」

「いや、今はひと段落ついたからな。ついて来い、歩きながら話そう」

「分かりました」

そう言って、俺は千冬さんと一緒に歩き出した。

「千冬さん、そういえば俺のクラスってどこですか？出来れば色々
と知っている千冬さんのクラスが良いですけど……」

「ああ、クラスについては一夏と同じ私のクラスの1 - 1だ。それ
とこの学園では織斑先生と呼べ」

「分かりました」

しかし、一夏と会うのも久しぶりだな。そう言えばあいつの鈍感さ
は治っているかね。いや、それより悪化している可能性があるな。
篤が可哀想だな……

「それとお前のIS事だが模擬戦とかではリミッターを外すなよ。
黒斗からの情報には目を通したが、お前の身体能力とあの性能で本
気を出されたら、何が起こるか分からんからな」

「分かってますよ。あと流星と俺の情報^{ミディア}はあまり口外しないでくだ
さい。色々厄介事が起こるかもしれないので」

「分かっている。それとこれはお前の部屋の鍵だ。予め空けていた
から一人部屋だが万が一また男が転校して来たらお前の部屋に入る
ようにするからな」

「了解」

その後は千冬さんに簡単に学校の説明を受けて校内に入った。

ふう、このIS学園に入ってやっと二ヶ月経ったな。

最初は女子しかないクラスのプレッシャーとか授業とかで四苦八苦しただけ、筈とも再会したし、最近じゃ鈴も転入してきて再会できてまあ良い事もあったな。これで疾風も来れば良いんだが、さすがにこの学園に来れないよな。あいつ…急にいなくなって今は何やってんだろつな…………

「それでは朝のHRを始める」

そう言って入ってきた千冬姉の言葉で朝のHRが始まった。

「今日は転校生を紹介する。皐月、入って来い」

その瞬間、クラス中がざわめいた。

って、ちよっと前に鈴が2組に転入してきたのにもう転入っておかしいだろう。それに皐月って珍しい名字だし……………疾風と同じ名字だな。

「失礼します」

「なッ……………!？」

俺は教室に入ってきた人を見た瞬間、思わず立ち上がってしまった。
なんせ、そこにいたの……………

「は、疾風……………」

そこにいたのはさっき考えていた幼馴染だった。

おーおー一夏の奴、良い感じに驚いているな。まあ、そりゃあ、そうか。それに窓側で驚いてるのってもしかして簞か？東さんからは聞いていたがまさか同じクラスになるとはな。

「織斑さつさと席に座れ、邪魔だ。それと皐月、挨拶をしろ」

「皐月 疾風だ。まあ…特に言う事が無いので一年間よろしく頼む」

「きゃあああああーっ!」

即座に耳を塞いだがこのクラスうるさいな。ソニックウェーブが起

こつたかと思つたぞ!!

「男子!!まさかの二人目の男子!!」

「しかもうちのクラス!!」

「何あの人!?すごく格好いい!!」

「人間に生まれて良かった!!」

確かにこの学校に俺がいるので珍しいのは分かるが……そこまで騒がしくしなくても良いじゃないのか?

「騒ぐな。今は休み時間ではないぞ」

パンッと手を叩いて、千冬さんの一声でうるさかったクラスが一瞬で静かになった。さすが千冬さん一声で静かにするとは。

「臯月、お前の席は後ろの席だ。さっさと座れ」

「はい」

俺は千冬さんに言われた通りに空いていた席に座って、連絡事項に話を聞いてHRは終わった。

「しかし、久しぶりだな。疾風。」

あの後、すぐに一夏や箒と話したかったが休み時間になつたらすぐに女子の包囲網が俺を包んで一夏や箒と全然話せなかった。そして、なんとか包囲網から脱出して食堂に來ると一夏、箒が居る席を見つけて、なんとか合流できた。

「そうだな。会つのは6年ぶり、か……」

「だが、どうしてお前がこの学園に入れたんだ？まさか、お前もISを操縦できるのか？」

「ああ、色々あつてな。千冬さんの推薦で入れさせてもらったんだ」

「そうか」

「あつ、そうだ。箒、お前に渡すものがあるんだ」

俺は思い出して、ポケットに入れていた手紙を箒に渡した。

「これは？」

「束さんからだ」

「な、なんだと!？」

箒は驚いて、すぐに手紙の内容を見た。まあ、驚くのは無理ないか。ISを発表してすぐに姿を消した姉からの手紙だからな。

「な、なんて書いてあるんだ？」

「……………」

一夏は箒にそう聞いたが箒は何も言わず、手紙を見ていた。

「疾風、あの手紙の内容お前を知ってるのか？」

「ああ、だが教えられないぞ」

俺はそう言いながら、味噌汁を飲む。うん、旨いな。

そのあとは箒は無言で手紙をポケットに入れて、飯を食べていた。

2話 再会（後書き）

感想、アドバイス等お願いします

設定及び、オリキャラ紹介

《主人公》

【名前】

皐月さつき 疾風はやて

【髪色】

漆黒

【瞳の色】

真紅

【容姿】

端正な顔立ちで髪型は首の後ろで束ねている。

【好きな食べ物】

和食（特に蕎麦、天ぷら）、日本茶

【特技、趣味】

機械いじり、システム構成、ハッキング、星見

【利き手】

左利き

【プロフィール】

学力、武術など多方面に際立った能力を持つ天才。一夏、箒とは小さい頃からの幼馴染だが過去にあったことで箒が転校する前に一夏、箒の前から消えた。

真面目で陽気な性格であり、基本相手の態度に関わらず基本的には

友好的に接する。一夏みたく鈍感では無く、なにかと人の感情に敏感で篝の恋の応援をしている。

兄である黒斗が経営しているBRAVE社の副社長をしており、それなりに各国の政財界などに影響を与えることができ、交渉などでほとんどの国の言葉を流暢に話せる。

専用ISは『流星』
ミーティア

【名前】

さつき 皐月 くろと 黒斗

【髪色】

漆黒

【瞳の色】

真紅

【容姿】

顔は美形で鋭い目つきの上に眼鏡を掛けている。髪は肩甲骨ぐらいまで伸ばしている。

【プロフィール】

疾風の実兄で自身と疾風が立ち上げたBRAVE社^{フレイヴ}を数年で量産機ISのシェア世界第1位まで上り詰めたほどの分析やマネージメントの天才。その功績で疾風同様に各国の政財界などに影響を与えることが出来る。

《IS設定》

『ミューティア 流星』

疾風が自分で作ったISで現在開発が進んでいる第4世代を凌駕する性能を持っている。

外見は「ダブルオークアンタ」に似ている

カラーリングはメインカラーは白ベースでサブカラーが金。

疾風が作ったオリジナルのコア「GNコア」が2基搭載しており、2基のGNコアを同調させる事で粒子生産量を2乗化させることが出来る。待機状態は白と金の腕時計。

武装

・GNソード

本機の主兵装。ソードモードとライフルモードの2種類に変形可能。GNソードビット6基を刀身に合体させることで、ソードモードはバスターソード、ライフルモードはバスターライフルへとそれぞれ強化される。不使用時は右腰にマウントされる。

・GNソードビット

GNシールドにマウントされているビット兵器。形状と大きさの異なるA、B、Cの3種のビットを各2基ずつ、計6基装備する。また、それぞれグリップも内蔵しており、手に持って使う事もできる。

・GNシールド

GNコアの1基を内蔵する右肩の横に浮いているアンロック・ユニット非固定浮遊部位型の専用シールド。GNソードビットのキャリアにもなっている。

・GNビームガン

GNシールドの上部に1門内蔵しているビーム砲。元々迎撃用だが、二つのGNコアの恩恵で十分攻撃用に使える。

オリジナルコア

GNコア

疾風が束からISコアの理論を習って、設計したオリジナルコア。常にエネルギーとなるGN粒子を生産し続けるため、過剰な使用をしない限りエネルギー切れが起こることはない。通常のISとは違い、コアと機体のシンクロ率が高くないとオーバーロードをして損壊する危険がある。

GNコアのデータはブレイヴBRAVE社のバンクのトップシークレットに入っていて、見られるのは疾風と黒斗しかない。

現在、GNコアは流星に搭載されている2基とブレイヴBRAVE社で開発途中の1基しか存在しない。

オリジナル企業 ブレイヴ BRAVE社

黒斗、疾風が立ち上げた会社で黒斗のマネージメントと疾風の技術で数年で量産機ISのシェア世界第1位になった大企業。現在は第3世代ISの開発、第4世代ISの研究を主にしている。また束が行方不明になっていた時に隠れていた場所でもある。

『プロキオン
色白』

プレイウ

BRAVE社製の第2世代型IS。性能が安定しており、汎用性が高い機体。騎士甲冑のような形態をしている。機体カラーは白と青。

3話 クラス対抗戦当日

俺が転入して数日経って、クラス代表である一夏を強くしようと放課後には箒とイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと一緒にISの操縦練習をしていた。

そして練習風景を見て一つ分かった事がある。セシリアの反応を見ていると一夏に惚れているな。何度か箒と一緒にからかったりするとおもしろいくらいに反応していたからな。これは確実に一夏をめぐって、未来に修羅場を見るかも知れないな。

そして、今日はクラス対抗戦当日、第一回戦一夏对中国代表候補生の鈴の試合だった。鈴というのは凰鈴音^{ファンリンイン}。一夏のサード幼馴染で紹介してもらって何度か話をする機会があり、話をするようにはなった。ちなみにファーストは俺、セカンドは箒らしい。

そして、今は箒、セシリアと一緒に山田先生、千冬さんがいる場所でリアルタイムモニターを見ていた。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスの声で一夏と鈴が空中で5メートルほどの距離を取り向かい合った。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを上げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

一夏と鈴の会話は開放回線オープンチャンネルで聞こえてきた。

「言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられるのよ」

たしかに代表候補生レベルにもなれば殺さない程度にいたぶることは可能だな。

ちなみに今、鈴は一夏によって踏まれた地雷が爆発して、とても機嫌が悪いようだった。まあ、その前も若干機嫌は悪そうだったがな。

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーツと鳴り響いたブザーが切れると瞬間、一夏と鈴は動いた。

ガギンッ！！

一夏が瞬時に展開した白式の唯一の武装である刀剣の形をした雪片ゆきひ式型が弾かれた。あれは衝撃砲か。

一夏はすぐにセシリアに教わったクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回を使い、鈴を正面に捕らえた。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

鈴が手にしている双天牙月という両端に刃の付いた、というより刃に持ち手が付いているそれを、鈴はバトンのように回し縦、横、斜めと角度を変えながら一夏に斬り込む。

「甘いっ！！」

一夏はすぐに隙を突いて距離を取ろうとしたところで鈴の肩アーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間に一夏は吹き飛ばされていた。

「なんだ、あれは………？」

箒はモニターを見ていて、つぶやいた。それに答えたのはセシリアだった。

「『衝撃砲』ですね。空間に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ちだす」

ブルー・ティアーズと同じ第三世代兵器ですわと続いたが筈はすでに聞かずに一夏が苦戦しているモニターを見ていた。

そして、セシリアは説明を終えると鈴の開放回線オープンチャネルで聞こえてきた。

「よくかわすじゃない。衝撃砲しゅうけいほう《龍砲》は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

その通り。砲弾が目に見えないならまだしも砲身も見えないのは辛いからな。しかもこの衝撃砲、砲身射角の制限もほぼ無いようにで真上、真下に加え真後ろまで撃っている。射角はあくまで直線だが、鈴の能力が高く、無制限機動と全方位への軸反転、基礎のすべてを高いレベルで習得しているな。

それらを無理なく融合しているんだ。一夏にとってかなりの強敵だな。

だが、ここで終わる一夏じゃないだろうな。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

その一夏の言葉に真剣さが伝わってきた。次で何か仕掛けるな。

「な、なによ……そんなこと当たり前じゃない……とっ、とにかく、格の違いつてのを見せてあげるわよ！」

鈴は一夏の気概に押されながら、また双天牙月を一回転させて構えなおした。一夏は鈴の衝撃砲をかわしながら、加速体勢になって『イクニッション・ブースト瞬間加速』を使うつもりだな。確かに使いどころを間違えなきゃ、代表候補生と互角に戦いあうことは可能だな。

「うおおおっ！」

一夏は『イクニッション・ブースト瞬間加速』で一気に鈴に接近して刃が届きそうになった。これで決まったな。

ズドオオオオンッ！！！！

その瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。鈴が放った衝撃砲ではない。威力も範囲も桁違いで違う。

そして、黒煙の中から黒い全身装甲フル・スキンのISがいた。

そして、今の衝撃はそのアンノウンがアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃のようだった。

当然、その場にいた一夏と鈴は驚いて口論になっているがアンノウ

ンはビーム兵器で砲撃をしてきた。

一夏はすぐに気づいて間一髪で鈴を抱えてその場から飛びのいた。

モニターを見ていたセシリア、箒、山田先生は啞然としていたが千冬さんだけがすぐに俺を見て頷いた。

「（なるほど、そう言うことですか。千冬さん。）山田先生。ちょっと席空けてください」

「えっ？は、はい！」

俺の言葉で山田先生は驚いて飛ぶように席を空けた。俺は気にせず、席に座って、慣れているキーボードを叩いた。

（遮断シールドのレベルが4に上げられて、扉が全てロックされているな。あのISのせいか……だが、この程度なら）

ピッ

「ハッキング完了、システム復帰。織斑先生、俺にIS使用許可をください」

「分かった。だが、リミッターを外すなよ」

「了解」

「先生！わたくしにもIS使用許可を！いつでも出撃できますわ！」

「駄目だ」

「なんでですか!？」

「セシリアお前のブルー・ティアーズの装備は1対複数向きだろう。それにお前は連携訓練はしたことあるのか？その時の役割は？ピットはどんな風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを講定してある？連続稼動時間」

「わ、わかりました。わかりましたわ。もう結構ですわ！」

俺の永遠に続けれる指導を聞いて、セシリアはすぐに両手を揺らして『降参』ポーズをした。

「それで良いんだよ。それと織斑先生。3年生の突入隊は入れないでくださいね。入ってきて怪我したとかでうるさく言われるのはいけませんから」

「分かった」

「それじゃ、行ってきます」

俺はいた部屋からピット・ゲートに行った。ゲートは開いていていつでもいけるようになっていた。

「流星^{ミューティア}、目標を駆逐する。」

右手首に付けていた白と金の腕時計が変換して白と金の粒子が体を覆った。その白と金の粒子がはじけて消えると、俺の体にIS「流星^{ミューティア}」を装備した。

「行くぞ、流星^{ミューティア}」

俺がそうつぶやくと各スラスタから放出されるGN粒子が一気に増え、一瞬で最高速になり、ピットから飛び立った。

3話 クラス対抗戦当日（後書き）

感想・ご意見お願いします

4話 襲撃とT

疾風がアリーナに出ると一夏と鈴がアンノウンと戦っていたがかなり苦戦していた

「あんた、誰よ！！急に入ってきて」

「一夏、鈴。お前達は退け。後は俺が引き継ぐ」

「お前……疾風なのか？」

「ああ、そうだ。とにかく退け。お前達のエネルギーは空寸前だろ。ここにいられても邪魔になるだけだ」

「ぐっ……分かった」

一夏は少しためらったが、すぐに鈴を連れてピットに戻った。

そして、疾風が目の前のバイザーを通して、アンノウンを見るとすぐにこの文字が出た。

生命反応、無し

「……無人機か。それならおもいつきりやらせてもらっぞー！」

疾風は瞬間加速で距離を詰めて、腰にマウントされているGNソードを居合のように抜き放ちアンノウンの左腕を跳ね飛ばした。アンノウンはすぐに後退して、右腕のビームキャノンを構えた。

「逃がすかよ」

疾風もすかさず距離を詰め、構えていた右腕も跳ね飛ばして、胴体に一閃を入れるとアンノウンは倒れ、沈黙した。

「ミッションコンプリート」

『まだです皐月君！学園に所属不明機多数接近しています！』

『…皐月、校外でのIS使用を許可する。接近するアンノウンを撃退しろ』

「了解」

疾風がアリーナから飛翔して少し飛んでいくとそこには赤を中心にしたカラーリングで手にはランスを持っている無人機が10機いた。そして疾風が一番注目したのは背部から放出している赤い粒子だった。

「さっきと同じ無人機か…だが、あの粒子…まさかGNコアかよ」

そうつぶやいているとアンノウンたちは持っていたビームライフルを構え、一斉に撃ってきた。疾風はすぐに上に飛んで回避した。

「さて、それじゃ……」

疾風は回避しながら右肩のGNシールドから6基のソードビットを放出してアンノウンたちに飛ばした。アンノウン全機はすぐに回避行動に入ったがソードビットはすぐに追いかけて一瞬で6機を破壊して、GNシールドに戻ってきた。

「あと4機」

疾風がつぶやきながらGNソードを構えて、4機との距離を詰める。4機は射撃を行うがそれを全て躲して、接近した。

距離を詰められた1機はランスで打ち合おうとランスを構え、突撃するが疾風はGNソードでランスともども上半身と下半身を簡単に切り裂いた。

「あと3機」

後ろで爆散しているが疾風は構わず、近くにいた敵機に切り込む。だが、さすがにさっきのを見て学習したのかランスを捨て、ビーム

サーベルを持って打ち合いになった。そして、疾風の背後に回っていた敵機はランスを構えて突撃してきた。

「まあ、一対一にはならないよな！」

疾風はすぐに背後に気が付いて、空いている右手にGNピストルを0・1秒で展開して、打ち合いをしている敵機に蹴りを入れて距離を取り、そこからGNソードをライフルモードに形を変え、前にはGNソード、後ろにはGNピストルを構え、同時にビームを撃ち、2機を破壊した。

最後の機体はランスを構え、ビームを撃ちながら突撃してきた。

「そして……お前でラストだ！」

GNソードをソードモードに戻し、ビームを躲して瞬間加速で一気に接近して突撃してきた敵機に横に一闪を入れ、爆散した。

「……織斑先生、今度こそミッションコンプリートです」

『分かった、早くピットに戻れ』

「了解」

疾風は千冬に言われた通りに戻った。

「ミーティア流星、モードリリース」

ピットに戻って俺の言葉で纏っていた装甲が消え、待機状態の腕時計になった。そうしていると千冬さんが近くに来た。

「戻ったか。それで少し話があるのだがあのアンノウン誰が作ったか予想出来るか？」

「とりあえず心当たりはありますね」

「そうか」

「織斑先生も心当たりはあると思いますが？」

「一応はな……わかった。では、部屋に戻って良い」

「分かりました」

俺は一礼して、自分の部屋に戻った。

（しかし、まさかGNコア搭載機が出てくるとはな……こんどの休みにもBRAVE社に行ってみるか）

一方、とあるビルの一室。そこではある少年がおもしろそうに映像を見ていた。その映像は疾風とアンノウンとの戦闘だった。

「…本当は織斑　一夏の情報が欲しかったけど、これはそれ以上の成果だな。しかし、僕以外にGNコアを作る奴がいたとはね…しかも、僕が作ったGNコアよりスペックが高いのを2基も搭載しているISなんて、凄く興味深いな…」

その少年は映像を見ながら、パソコンのキーボードを凄いスピードで叩く。そして画面に出てきたのは疾風の顔写真とデータだった。

「へえ、BRAVE社の副社長、皐月　疾風、か…なるほどBRAVE社ならGNコアを作るぐらいの資金なんてすぐに入ってくる…けど、ここまで作るなんて相当な天才なんだろうな」

そう言つて、少年は席を立ち、置いてある黒と赤のカラーリングをしたISの近くに歩いた。

「さて、僕もそろそろ動こうかな。この『フラッディー・ファンゲ鮮血の牙』でね」

少年はISに触れて、少し微笑んだ。

4話 襲撃とT（後書き）

俊さん、誤字報告ありがとうございました。これからは気をつけます。

GNソード？フルセイバーは追々出す予定です。
これからも感想・ご意見お願いします。

5話 休日と噂

六月頭 日曜日

俺はBRAVE社の本社に来ていた。兄さんにはすっかり休養を取れと言われたがこれ以上俺の分の仕事まで兄さんに頼んだら倒れると思ったし……

それともう一つ気になることもあったからな……

「さて、俺の分の仕事はこれだな」

「そうだ。しかし休めと言ったのにお前は……」

「いや、兄さんがぶっ倒れたらBRAVE社は誰が経営すんだよ」

「ん？いや、もしもの時はお前が継ぐだろう？」

「……マジ！？」

「ああ、おおマジだ。それに私はこの程度で倒れるような貧弱者ではないぞ」

「そうでした」

俺は笑いながら、書類の処理を始めた。量は兄さんが予めやってくれたおかげで少なかった。マジで兄さんには感謝だな。

俺の仕事が終わるとちょうど兄さんの仕事も終わったらしく久しぶりに一緒に昼食を食べていた。

「……それで今日は例のアンノウンについて来たのか？」

「…耳が早い事で」

「ちょっと前に千冬から連絡があつてな。それでそのアンノウンに搭載されていたのは本当にGNコアだったのか？」

「ああ、けどあの赤い粒子からGNコア^{タウ}だった。けど、それを搭載したのが10機もいたとなるとさすがに気になってね」

「一応、GNコアについてのバンクにハッキングがあつたか調べたかがそんなのはなかったぞ」

「まあ、T程度^{タウ}だったら頭が回る奴なら開発は可能だからな」

「そうだな。だが、T^{タウ}を作る奴なら次はオリジナルを作ろうとするだろうがオリジナルはお前ほどの天才しか造れないしな。と、なる
と……」

「今後、流星^{ミーティア}を狙ってくるか、今ここにある開発途中のGNコアを狙う、だね……まあ、ラボの警備は万全だし、俺にいたっては逆に

返り討ちにしてやるけど」

「そうか。だが、気をつけろよ。相手は……」

「分かっている。相手は……」

「ファントム・タスク
亡国機業」

互いの言葉が合わさると真剣な表情だった兄さんは少し微笑んでコーヒーを飲んだ。俺もカップに残っていたコーヒーを飲み干した。

フレイヴ
BRAVE社から学園に帰ってきて、ミーティア部屋で流星の調整をしているとふとノートパソコンの隣に置いてある卓上型のカレンダーが目が入った。

「そういえば、今月か…学年別個人トーナメント」

学年別個人トーナメント

これは文字通り、学年別でのES対決トーナメント戦。これは一週間かけて行う。一週間もかかる理由は簡単、全員強制参加だからだ。学年で百二十人も居て、これでトーナメントをやるため、規模も相応なものになっているらしい。一年は浅い訓練段階での先天的才能評価、二年はそこから訓練した成長能力評価、そして三年は具体的

な実戦能力評価だ。特に三年は様々なところからスカウトやお偉い方が見に来るらしい。まったく、ご苦労なこった。

ちなみに先月のクラス対抗戦は例の無人機アンノウンによる襲撃でうやむやのまま中止され、そのことに関しては箝口令が出された。特に戦闘に直接かわった一夏と鈴は誓約書まで書かされていた。俺はGNコア^{タウ}Tが関係してどちらかと言うと箝口令を出す側だから特にそういうのは無かったがな。

「さて、一通り調整は終わったことだし……飯でも食いに行くか」

俺はノートパソコンを閉じて、部屋を出て食堂に向けて足を進めた

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え？何の話？」

「だから、あの織斑君と皐月君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別のトーナメントで」

俺が食堂に着くと奥の方の席でスクラムを組んでいる一団がいた。ここって、毎度のことだが女子で埋め尽くされた食堂はやかましい。俺はざる蕎麦をもらって、席を探していると一夏と鈴の居る机を見つけた。

「よっ、一夏、鈴。ここ座って良いか？」

「ああ疾風、いいぜ」

「どうも」

俺が席に着くとさっきのスクラムを組んでいる一団を見ると一夏も気づいていたのかそちらを見た。

「……なあ、さっきからあその会話の中に俺と疾風の名前が出る気がするんだが」

「気のせいよ、どうせトランプでもやってんじゃないの？それが占いかさ」

「にしてはいつもより騒がしいな……」

それにいつもより熱気も増しているし、何かとどよめきが起こっている。

「えええっ！？そ、それマジで！？」

「マジで」

「うそー！きゃー、どうしようー！」

しかし、本当に何かあったのか？いつもより5割り増しくらいで騒がしいな。

「……………まあ、良いか」

俺はざるの上に乗っている残りの蕎麦につゆをつけて食べた。ここの蕎麦なにげに良い麦使っているみたいで香りも良いんだよな。

「ごちそうさま。一夏、鈴、俺は先に戻るな」

「ああ」

「分かったわ」

俺はそう言って、食器を戻して部屋に戻り、シャワーを浴びて、そのままベッドに入った。

5話 休日と噂（後書き）

前回と同じく俊さんまた修正・誤字ありがとうございます。
文才がない自分にはとてもありがたいです。
これからも感想・ご意見おねがいします。

6話 いつもと違う朝

月曜日 朝

教室ではクラス中の女子が賑やかに談笑をしている。手にISSスーツのカタログを持って、意見交換している。

「そっぴえば織斑君のISSスーツってどこのやつなの？見たこと無い形けど？」

「あー特注品だつて。男のスーツが無いから、どこかのラボが作つたらしいよ。えーと、もとはイングリット社のストレームアームモデルって聞いているな」

女子たちの視界に入つた一夏は質問を受けていた。けど、あの一夏がここまで覚えているとはな。

「それじゃ、皐月君は？」

「ん？俺はBRAVE^{ブレイヴ}社製だぞ。まあ、俺は常にパーソナルライズで展開しているからみんなは早々見ないと思うがな」

「え？あのBRAVE^{ブレイヴ}社製なの！？良いなあ」

「あれ？でもパーソナルライズで展開したらエネルギーが消耗する

んじゃない？」

そう、専用IS持ちの特権である「パーソナルライズ」はIS展開時に同時にISスーツも展開されて楽だが、ダイレクトなフォームチャンジはエネルギーを消耗してしまう。が、それは普通のISコア。俺のGNコアはそのエネルギーの消耗を無くしてくれるからこの上なく楽に展開ができる。

「まあ、そこはちょっと特別仕様になっているな」

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、ISはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることが出来ます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

すらすらとスーツの説明をしながら現れたのは山田先生だった。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してあるんです。えへん……って、や、山ぴー？」

学校の開始から2ヶ月、山田先生にはたしか8つくらい愛称がついていたと思うな。慕われている証拠だな。

「あの一教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーさんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーさんって……」

「あれ？マヤマヤのほづが良かった？マヤマヤ」

「そ、それもちよつと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてください！」

珍しく語尾を強めて山田先生が拒絶の意思を表した。

何かトラウマがあるのか、ヤマヤの愛称に。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか？わかりましたね？」

はいとクラス中に返事が来るが、どうせ空返事だろうな。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます!」

スゲエ、さっきまでISスーツのカタログを手にざわざわしていたのに一瞬で静かになるとは。さすがは千冬さんだな。

「今日から本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないように。忘れた者は代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それも無いものは、まあ下着でも構わんだろう」

いや、構うだろう!と、俺以外にも絶対多くの女子が心の中で突っ込んだはずだ。男である俺と一夏がいるのに下着はマズイだろう、色々と。

「では山田先生、HRを」

「は、はいっ。ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します! しかも二名です!」

「「「え……ええええっ!?」」」

転校生の紹介にクラス中がざわめき始めた。まあ、十代女子の情報網に掛からずにいきなり転校生が現れれば驚きもする。しかもふたり。

（てか、転校生二人もいるんだったら分散させるだろう。普通）

俺がそう考えていると教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まった。

なんせ、その転校生の一人が　男子だったからだ。

7話 貴公子と軍人

「シャルル・デュノアです。フランスからきました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の男子はにこやかな顔でそう告げ一礼する。

周りのみんなはあつけにとられている。まあ既に一夏というイレギュラーが日本政府によって大々的に出たからフランス政府が今まで隠してきたとしても、もう隠す必要がなくなっただけだからな。

それにデュノアってフランスのデュノア社の子息だよな。それだったら、ISに触れる機会も多いから一夏みたくうっかりISに触れたら起動しました、みたいな感じだろ。

「お、男……？」

クラスの誰かがそう呟いた。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

人なつっこそうな顔。礼儀正しい振る舞いに中性的な顔立ち。髪の

色は濃い金髪で俺と同じ首の後ろで丁寧に束ねてある。

一見したイメージは『貴公子』が当てはまるな。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃああああーっ！っ！」

あーはい、またもやソニックウェーブが発生。俺の時もそうだったけど、やっぱりうるさいな。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜〜！！」

しかし、元気だなあ、うちのクラス女子陣は。てか、最後の奴、そのネタは古いだろ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬さんがぼやく。マジで鬱陶しくしているな。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜!」

山田先生のまったく威厳のない注意はクラスの女子陣はガン無視しているな。

俺はとりあえずもう一人に目を向ける。

髪は輝くような白に近い銀髪。それを無造作に腰近くまで降ろしている。そして左目の眼帯。医療用のものじゃなく、ガチな黒眼帯。そして、見えている右目は赤色だがその色とは裏腹にその目の温度は限りなく低い。

こちらのイメージはそのまま『軍人』

身長はシャルルと比べて明らかに小さく、女子の中でも若干だが背が低い部類だろう。

「……………」

口を開かずに腕を組んだまま千冬さんに視線を集中させている。

「…挨拶をしるラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいをピシッと直して、素直に返事をする転校生
ウラにクラス一同はまたもあっけに取られポカンとしている
ラ

（千冬さんを教官…ああ、ドイツ軍出か。）

千冬さんは昔とある事情でドイツ軍で一年ぐらい教官をしていた。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も
一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

すぐに敬礼をして返事。本当に了解したのかよ？

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……………」

クラスの連中は他に言葉を待っているのだが、ラウラは名前を言つて口を閉ざしてしまった

「あ、あの以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が出来うる限りの笑顔で問うが帰ってきたのは無慈悲な返事だった。先生苛めるなよ。見る、今にも泣きそうな顔しているぞ。

「！貴様が……」

ラウラは一夏と目が合った瞬間近づいてた。そして

バシンッ！

「……………」

一夏を殴った。それも綺麗な平手打ちで。

いきなり叩かれた一夏は何が起こっている分らないような状態になっていた。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「いきなりなにしゃがる！」

ラウラはそう言うで一夏は思考が回復したのかすぐに言い返した。

「ふん……」

ラウラはその場所から立ち去り空いている席に座ると腕を組んで目を閉じた。

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。解散！！」

解散の合図として千冬さんが手を叩くと固まっていたクラスのメンバーは我に返るように動き出した。

「おい臯月、お前がデュノアの面倒を見てやれ。織斑では頼り無いらな。」

（千冬さん、もう少し自分の弟を信じたほうが良いと思うんですけど……と、そんなことを考えている前に……）

「君達が皐月君と織斑君？はじめまして。僕は」

「話は後だ。行くぞ、シャルル」

俺はすぐにシャルルの手を取り教室を出てアリーナの更衣室に三人で向かう途中で説明をする。

「俺達男子はアリーナ更衣室で着替える。これから毎回これだから早く慣れるようにしたほうがいいぞ」

「う、うん」

ん？なんかシャルルの様子が変だな。

「大丈夫か？」

「え、うん。大丈夫」

「そうか。それじゃ急ぐぞ。マジで面倒になるからな。一夏も遅れるなよ」

「ああ」

俺達は速いペースで階段を下って一階へ。ここで速度を落とすわけにはいかない。なんせ、そうしたら

「ああつ、転校生発見！」

「しかも他の男子二人も一緒！」

そう、他のクラスのHRが終わった。なら、他の教室から転校生の男子を見ようと女子が集まってくる。そして捕まったら最後、質問攻めの拳句、授業に遅れることになり千冬さんからの特別カリキュラムがある。それは俺も一夏もいやだ。

「いたつ、こつちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

たく、ここはいつから武家屋敷になったんだよ。今にもホラ貝が鳴りそうだな、おい。

「織斑君と皐月君の黒髪もいいけど、金髪ってのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああつ！見て見て！皐月君と手！繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

最後の奴、今年だけじゃなくて毎年ちゃんとした物プレゼントしろよ。河原の花は酷すぎるだろう。

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

状況が読めないのか、シャルルは困惑顔で聞いてきた。

「男子が俺達だけだからに決まってるだろ。それにこの学園の女子は男子を見ることが少ないからな。」

「……………」

おい、なんでそこで「意味が分からない」って顔をしているんだ？

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦できる男子なんて今のところ俺達しかいないんだから」

「あつ！　　ああ、うん。そうだね」

一夏の補足でシャルルは返事したがなんで間が空けた？

「まあ、良い。何にしてもこれからよろしく頼む。俺は皐月疾風。ファーストネームで呼んでくれ」

「俺もよろしく。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「うん。よろしく疾風、一夏。僕のことシャルルでいいよ」

「了解、シャルル」

「わかったよ、シャルル」

さて、どうにか包囲網に囲まれる前に校舎から出られたな。

「ここからは喋らずに駆け抜けるぞ。ふたりとも!!」

「うん」

「おう」

「よし、到着！」

いつも通り圧縮空気の抜ける音を響かせてドアがスライドして開いていく。俺たちは無事に更衣室に到着できた。

「うわ！時間ヤバイな！すぐに着替えちまおうぜ」

確かに時計を見ると既に授業開始まであと5分前。一夏は一呼吸でシャツまで脱ぎ捨てた。

「わあっ！？」

「「？」」

ん？なんか、リアクションが女みたいだな……まあ、いい。

「それじゃ、俺は先に行くぜ。」

俺は後ろから聞こえる一夏の声を無視してそのままグラウンドに出た。パーソナルライズ万歳！！

7話 貴公子と軍人（後書き）

連続3回やってみました。

感想・ご意見お願いします

8話 代表候補生×2 VS 教員

「遅い」

バシッ！！

俺は無事第二グラウンドに着いたが、一夏とシャルルは無事にはすまなく、千冬さんのご指導を受けた。あれ、いつ見ても痛そうだな。

「くだらんことを考えている暇があったらとつと列に並べ！」

そう言われて、2人は列の端に並んだ。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

そして、何の因果が一夏の隣には機嫌が悪いセシリアだった。

「スーツを着るだけでどうしてこんなに時間が掛かるのかしら？」

ISスーツは女性のために作られたからワンピース水着やレオター

ドに近く、部分的に動きやすいようにと肌が露出しているが、防御はISのシールドバリアーと絶対防御があるのでスーツ自体にはほとんど防御力がなくてもいい。

だが男が着るISスーツは違う。具体的に言えばスキューバダイビングの水着みたいで露出しているのは頭、手、足だけ。そのせいで女子より着替えるのが遅くなるのは必然だ。

「道が混んでいたんだよ」

「嘘おっしやい。いつも間に合うくせに」

セシリアの言葉に棘があるな。妬いてるのか？

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方と縁が多いようですか？そうでないと二月続けて女性からはたかれたりしませんよね」

「なに？アンタまたなんかやったの？」

さらに何の因果が一夏の後ろにいた鈴が話に入ってきた。そうして話が続くが……おい、お前らその辺で止めないとヤバいぞ。なんせ、今の時間は……

「安心しろ。バカは私の目の前に二人も居る」

千冬さんの授業だからだ。

バシーン！

青い空に出席簿アタックの音がいつもより響いた。

「では、本日から格闘戦及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

一、二組合同なのか返事も気合いが入っている。

「くうっ……なにかというすぐにポンポンと人の頭を……」

「一夏のせい、一夏のせい、一夏のせい……」

ちなみにさっき叩かれた二人は頭を抑えながら涙目でブツブツ言っている。自業自得だ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの

十代女子も居ることだしな。

凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

セシリア完全なとぼつちりだが諦める。千冬さんの言うことは絶対だからな。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

そう言われて、2人は面倒臭そうに前に出る。

「お前ら少しはやる気を出せ。 アイツにいいところを見せられるぞ？」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せる機会よね！専用持ちの！」

おお、さすが千冬さん。一言で2人のやる気をマックスにしたな。まあ、当の本人は何の事かは分かっているけど。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんでも構いませんが」

「ふふん。それはこっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は」

キイイイン

ん？何だこの空気を切り裂く音は？

「あああーっ！ど、どいてくださいーっ！」

俺は上を見ると山田先生が一夏に突っ込んできた。

ドカーン！

そして、そのまま一夏は山田先生の突進を受けて、数メートル吹っ飛ばされた後、そのままゴロゴロと転がった。

あれはさすがの一夏も死んだか？いや、ギリギリで白式を展開したのが見えたから生きてるか。

そう思いながら、俺は一夏のそばに行くとそこには……

「一夏、お前…なにやってんだ？」

そこには一夏が山田先生を押し倒しているような状態になって、右手は思いつきり山田先生の胸を鷲づかみしていた。

こんなの今ISを展開している鈴、セシリアが見たら…………

「ハッ!？」

その瞬間、一夏はなにかを感じたらしく即座に山田先生から離れる。刹那、一秒前に一夏の頭があった場所にビームが貫いた。

「ホホホホ……残念です。外してしましたわ…………」

そして、そのビームを放ったほうを見るとそこには顔は笑っているがその後ろにはどす黒いオーラを纏っているセシリアがいた。

「……………」

そして、鈴は何も言わず 双天牙月 を合わせて、そのまま一夏に向かって何の躊躇いもなく、投げた。

「うおおおっ!？」

一夏は間一髪で避けるが 双天牙月 の形状はブーメランに似ていてそれと同じく投げたら手元に返ってくる。しかも、一夏の今の体勢じゃ避けれない。あ、間違いなく死んだな、合掌。

「はっ！」

ドンッドンッ！

俺が一夏に合掌をしていると短く、二発の銃声音が響く。放たれた弾丸は 双天牙月 の両端を叩き、一夏に当たる軌道を大きく外れた。

すぐに銃声音をしたほうを見るとそこには倒れた体勢のまま上体だけを起こして射撃体勢のままになっている山田先生がいた。

「……………」

俺や一夏や鈴、セシリア、あとこの場にいる全員はあのいつもバタバタしている山田先生とは違う雰囲気で同一人物とは思えなく、驚いていた。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし……………」

雰囲気に戻した山田先生はくると体を回して起き上がると肩部武装コンテナに銃を預ける。

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの、二対一ですか……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

『負ける』と言われたのが癪にさわったのか2人の瞳には闘志をたぎらせた。

「では、はじめ！」

千冬さんの号令と共にまず2人が飛翔、それを確認した山田先生が後を追う。

「手加減しませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね」

「い、行きます！」

山田先生はいつもと同じ言葉とは裏腹に山田先生の目は鋭く冷静なものに変わる。

そして、最初にセシリアと鈴が先制攻撃を仕掛けるが、山田先生はそれを簡単に回避した。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりとした声で説明をはじめた。

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型のも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選らばないことと多様性マルチ役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で参加サードパーティが多いことで知られています」

「ああ、いったんそこまでいい……終わるぞ」

千冬さんは一旦、シャルルの説明を止める。上空での模擬戦は山田先生がセシリアと鈴をうまく誘導して、2人がぶつかったところでグレネードを投擲。爆発が起こって、煙の中から二つの影が地面に落下した。

「くっ、うっ……まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ………！」

「ぎぎぎぎぎっ………！」

おいおい、あの2人どれだけ仲悪いんだよ。ああ、どっちも恋敵だからか。これはしょうがないな。

「ひゅう、さすがは元代表候補生の名前は伊達じゃないってことですか」

「そういうことだ。これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんはみんなの意識を切り替える

「専用機持ちは織斑、皐月、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれろ」

そう言われて、みんなは動き出した。

8話 代表候補生×2VS教員（後書き）

毎回、誤字報告をしてくれる俊さんにはとても感謝しています。ありがとうございます。

感想・ご意見お願いします。

9話 IS実習

千冬さんの言葉で確かに1・2組女子全員は動き出した。

そう、動き出したが……

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「わからないところ教えて〜」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいられて！」

「皐月君いろいろ教えて！」

「私も私も！IS操縦教えて！」

そう言つて一気に俺、一夏、シャルル　まあ、簡単に言えば男に押し寄せてきた。一夏、シャルルは完全にどうしていいのかわからずただ立ちつくすだけだった。

「この馬鹿者どもめ……出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグランド百周させるからな！」

千冬さんの鶴の一声によって群がっていた女子たちはすぐに整列しなおした。てか、IS背負ってグランド百周ってどんな地獄ですか。

「最初からそうしろ馬鹿者どもが……」

ふうつとため息を漏らす千冬さん。お疲れ様です。

そして実習の時間が始まると俺の班になった奴らが集まってきた。

「ええと、いいですかー皆さん。これから訓練機を一班一体取りにきてください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が二機、『^{プロ}色^{キオン}白』が一機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよ」

山田先生はさっきの模擬戦で自信を取り戻したのか堂々としていた。

「さて、どのISが良い？」

「『^{プロ}色^{キオン}白』」

「満場一致だな…分かった。取りに行ってくるから待っていてくれ」

班の人達に背を向けて小走りで山田先生のところに向かった。

（しかし、満場一致で色白が。^{プロキオン}それだけ人気があるのか…なんか、照れくさくなるな）

そう、色白はBRAVE社製の第二世代ISで開発は俺がした。最初は興味本位で第二世代を作ったが今じゃこいつのおかげでBRAVE社は世界シェア1位になってGNコアや第4世代機を作るために資金が入ってきてくれた。

「山田先生、色白ありますか？」^{プロキオン}

「あつ、皇月くん。はい、ありますよ」

「それじゃ、色白を借りていきますよ」^{プロキオン}

俺は流星の腕を部分展開して色白の乗っている専用カートを押して班に戻った。^{ミディア}^{プロキオン}

「さて、とりあえず起動、装着、歩行までするか。順番は出席番号順、だな。一番最初は……」

「はい！出席番号三番、遠藤 瑠璃！よろしくね」

そう言って、お辞儀&握手待ちの手を出してきた。

「ああ、抜け駆け！」

「私も、私も！」

「初めて見たときから決めました！」

すぐに班の女子全員が横一列になって同じように手を並べた。

他の班を見ると一夏やシャルルの班も一夏の同じようになっていた。まあ、俺と唯一違うのは二人はどういう状況になってるのか分らないってとこだな。

「はあ、今は実習の時間だろ…なんで告白タイムになっているんだ？」

「「「おねがいしますっ！」「」「」

俺が頭をかきながらばやいていると……………

スパーン！

「「「いったあああっ！」「」「」

おお、シャルル班女子の見事なハモリ悲鳴だな。まあ、一列だから叩きやすかっただろうな。シャルル班女子はすぐに後ろを向くと一斉に顔が変わった。そこには鬼教官、織斑 千冬さんがいたからだ。

「やる気があってなによりだな。それならば私が直接みてやろう。最初は誰だ」

そう言つて、シャルル班女子は千冬さんに連れて行かれた。

そんなシャルル班女子を見た俺と一夏班女子はすぐに列を解散して、素早く実習を開始してくれた。うん、実に良い判断だ。

その後はキビキビと動いてくれて時間前に全員が起動、装着、歩行が出来た。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

「あー……あんなに重いとは……」

一夏は疲れた顔を愚痴ってきた。訓練機は専用のカートを使って運ぶ。そして、その動力源になるのは「人」になる。俺や一夏の班は無論、男メインで運んでいた。ちなみにシャルルの班はシャルルがやる前に「デュノア君にそんなことさせられない！」と数人の体育会系の女子が訓練機を持っていた。一夏と扱いが天と地も違うな。

「てか、一夏は腕を部分展開して運ばなかったのかよ。そうすれば楽なのに」

「……あ」

まさか本当に思いつかなかったのかよ……

「た、たしかにそうだな……」

「はあ、少しは頭を使えよ、一夏」

「あ、ああ。そうだな……それじゃ疾風、シャルル着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ」

一夏は無理やり話を変えて、シャルルに振るとシャルルは少し困った顔をしていた。

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしてからいくから、先に行って着替えてよ。時間かかるかもしれないから、待ってなく

ていいからね」

「そうなのか？なら調整が終わるまで待ってるけど」

「いいからいいから！僕のためだけに待って貰うのとか悪いし！二人とも先に戻ってて」

「了解。一夏、シャルルがこう言ってるんだから、俺らは先に行くぞ」

俺は見かねて一夏の首根っこを持って更衣室に引きずっていった。

「げほっ、げほっ……疾風、お前俺を殺す気か！？」

「ハハハ、大丈夫だよ。一夏の取り柄は昔から体が頑丈なところなんだからよ」

「いや、それとこれとは違うと思うが……」

「ほれ、文句言ってるならさっさと着替えるよ。昼休み無くなるぞ」

「あっ！そうだった。ヤベエ、急がないと！」

「なに急いでるんだ？」

「ああ、さつき箒から昼飯一緒に食べないかって誘われたんだ。遅れたら、箒に怒られる」

一夏は慌てて着替えている。しかし、あの箒がそんな約束をするとはな

ライバルが増えて大変そうだな。

「それで疾風。お前も一緒に来るか？屋上で食べるんだけど」

「俺は良いよ。シャルルと一緒に食堂で食べた後に学園を案内しようと思っていたからな」

正直そんなところに行ったら箒に悪い、それと箒が不機嫌になる。

「そうか、分かった。それじゃ俺は先に行くから。それじゃ」

そう言っで、一夏はさっさと更衣室を出て行った。俺も更衣室に居てもやることがないので更衣室を出た。

10話 午後の模擬戦

あの後、俺はシャルルと食堂で飯を食って、残った時間で学園内の案内をしていたが三人目の男子争奪戦が発生して、案内をしていたはずだが女子の大軍勢に包囲されていた。が、さすが貴公子、丁寧に丁寧を二乗したようなシャルルの対応でお引取り願った。

女子一同はあまりにもシャルルの貴公子然とした姿にそれ以上にアピールするのが逆に恥ずかしくなったのか、みんな嬉しいような困ったような顔をして引き上げていった。

そして、決めた^{セリフ}になった台詞は

『僕のようなもののために咲き誇る花の一時を奪う事はできません。こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔ってしまっているんですから』

だそうだな。

いや、もうさすがだな。これを平然と言えるのはシャルルしかないな。この言葉を聞いて、手を握られていた三年生の先輩は失神していたし。まあ、そんなこんなで女子が引き上げてもらった。

そして、その途中にセシリアと鈴に会って、一夏を探していたが適当な事を言っと二人はダッシュでそこに向かった。そこでシャルルは二人が一夏にゾッコンだというのが分かったようだ……俺、後で二人から何か言われそうだな。

そうして、昼休みが終わって、午後の授業中。午後は午前と同じようにしていたがたまにセシリアと鈴の視線が当たっているのがよく分かった。

「さて、最後に皐月、お前の操縦のテクニックを見せろ」

そして、全員が集合していると千冬さんがそう言った。まあ、そのくらいなら……

「待ってください！！それならば、わたくしとの模擬戦にしてください」

おっと、セシリアさん何を言っているんだよ。

「私も模擬戦が良いです」

鈴もかよ……そこまで昼のことで俺を殴りたいのかよ。まあ、殴られないけどな。

「織斑先生、俺は構いませんよ」

「…ハア、分かった。だが皐月、お前は使う武器はソードだけだぞ。良いな」

「了解。流星セツトアップ」
ミーティア

俺の言葉ですぐにミーティアを展開すると、二人もISを展開して飛翔したのを見て、俺も追うように飛翔した。

「なんか、ハンデがあるけど、叩きのめすわよ。疾風!!」

「昼休みはよく騙してくれましたわね!!」

「いやゝなんのことですか？俺は知りませゝん」

「ツツゝ！人をおちよくるのもいい加減にしてください！」

セシリアは怒った顔で《スターライトmkIII》で狙撃してきた。鈴も《龍砲》を撃ってきた。

「よつと!!」

俺は二人の先制攻撃を躲して、腰にマウントしているGNソードを抜いて、ライフルモードにして構えた。

「す、すげえ……」

俺は上空で繰り広げている戦闘を見て、思わずそう言っていた。相手はセシリアと鈴の代表候補生タッグ。それなのに疾風はさっきから全ての攻撃を躲しながら、自分の攻撃は確実に当てている。

「当たり前だ。あの程度の動きは皐月には造作も無い事だ。それと織斑、お前は皐月の動きをよく見て、勉強しろ。あいつもお前と同じ近距離戦を得意にするからな」

「う、うん……」

「教師には「はい」だ。馬鹿者め」

「は、はい」

俺はすぐに返事をして疾風の動きを見る。疾風の動きは最低限の動きでセシリアや鈴の攻撃をを躲している。

「…織斑、皐月の動きを見て何か分かったか」

「えっ？え、えっと…最小限の動きで攻撃を躲している？」

「そつだ。近距離戦をする者は常に最小限の動きで攻撃を躲かし、タイミングについて攻撃をしなければならぬ。よく肝に免じとけ」

「は、はい」

俺は返事をして上空での戦闘を見る。てか、疾風の奴、あの2人に
対して笑っているぞ。

改めて、俺のファースト幼馴染は凄いと思うよ。

「疾風、なんて強さなのよ……」

「ここまでお強いとは……」

「どうした、鈴、セシリア。もう限界か？」

「くっ！そんなことはありませんわよ」

「そうよ。絶対に一撃打ち込んであげるんだから！」

「そうかい……なら、やってみろ」

セシリアはビット兵器であるブルー・ティアーズを放った。また躲
そうとするが鈴は龍砲を撃ってきて、回避コースを封じた。

「これで！」

「どうです！」

「（この二人、仲が悪いのか、良いのか分からないな。さて俺もそろそろ反撃を始めるか）GNフィールド」

その瞬間、俺の多方向から迫ってきたビームをGNフィールドで防いだ。二人は何が起こったかは分からないようだが教えるつもりもない。

「それじゃ、ぼちぼち行きますか」

ライフルモードのGNソードをソードモードに変えてセシリアとの距離を詰めた。だが、俺とセシリアの間に双天牙月を持った鈴が割って入ってきた。

「あたしだっているのよ！」

「そうだったな」

鈴はそのまま突撃してきて双天牙月を振り下ろす。

「ところがギッチョン！」

その瞬間、俺は瞬間加速で双天牙月を躲して、鈴の横に移動しながら横に一闪を入れた。

「えっ！？キヤアアア！！」

俺の動きに反応できなかった鈴はもろに喰らって、そのまま撃墜した。だが、セシリアは構わず俺を狙撃してきた。

「おっと」

俺はGNソードをライフルモードにしてビームを相殺した。

「ならば！！」

セシリアはビットを放って、さっきと同じく多方向からビームを撃ってきた。俺はGNソードをライフルモードに形を変え、躲しながらビットを破壊しながらセシリアに接近した。

「くっ…それなら！」

セシリアは腰部から広がるスカート状のアーマーの突起が外れて、動いた。

「ミサイル弾道型か…」

「そうですね、ブルー・ティアーズは六基ありますわよ！」

そう言つて、セシリアは装填されたビット2基を飛ばしてきた。

ギンッ

だが俺はすれ違い様にライフルモードからソードモードに戻したG Nソードで2基のビットを破壊して、そのまま突撃して連続で斬つて一気にセシリアのシールドエネルギーを0にした。

こうして、午後の授業は終わった。

「それで、なんの用だ。疾風？」

午後の授業が終わった後、箒と二人で話すために学園の屋上に来ていた。

「いやゝ恋に悩む筈にちよつと手助けをしようと思つてな。今度の学年別個人トーナメントで優勝したら俺が一夏と付き合えるて言う噂あるだろぅ？それが本当だったら筈は何がなんでも優勝を取りにいくと思つてな」

俺がおもしろそうに言つと筈は頬を赤くした。

「うむ…だが、なんでお前がその噂を知っているんだ？その噂は女子だけしか流れていないはずだろぅ」

「まあ、普通に飯を食いながら聞き耳を立てていたら話が聞こえたんだよ」

「そうか……」

「それでこの噂。俺はそんな約束した覚えはないし、どうせ一夏の唐変木が誰かとそんな約束をしていたのを誰かが聞いて、そのまま尾びれが付いた、てところだよな」

「そ、そうだな…」

「まあ、約束した人はざつと考えて俺や一夏の幼馴染だと思つがな」

「なっ！？な、なんでお前が知っているんだ！？」

「あ、やっぱり筈だったんだ」

「…私をカマかけたのか……」

箒さん…さっきまで頬を赤くしていたのに一瞬で黒いオーラと怖い目つきにならないでください。

「すまん、すまん。それで本題に戻るぞ。実は今日束さんから箒の専用機のためのデータを取るためのISが届くんだよ」

「あ、あの手紙の内容は本当だったのか……」

あの手紙…俺が転入してすぐに束さんから箒に送られた手紙。そこには束さんが箒のために箒専用のISを作っている内容が書いてあったんだ。

「それで今度の学年別個人トーナメントでそのISを使って詳細なデータを取りたいんだとさ」

「そうか…それでそのISはどこにあるんだ？」

「ああ、それは」

『一年一組、皐月 疾風。同じく篠ノ之 箒。至急第二グラウンドの格納庫まで来い』

俺の言葉を遮るように千冬さんの放送が入った。

「おっ、こりゃベストタイミングだな。それじゃ行くぞ、篤」

「ああ……分かった」

俺と篤が屋上から第二グラウンドの格納庫に來るとそこには千冬さんと打鉄がいた。

「篠ノ之、臯月から話は聞いているな」

「は、はい。今度の学年別個人トーナメントでデータ収集用のISを使用して、データを取れと」

「そうだ。そしてこれが」

『織斑先生、電話が入っているので至急、職員室に戻ってください』

千冬さんが説明をしようとする放送が入った。

「織斑先生、あとは俺が説明するんで行っていいですよ」

「……スマン、あとは頼んだぞ。疾風」

千冬さんはそう言って、職員室に向かった。

「さて、それじゃ説明するぞ。この打鉄は箒の専用機のデータをより詳しく取るために箒の動きにトレースしていて普通の打鉄より細かいリンクのズレは無くして専用機並に使えるわけだ。まあ、百聞は一見に如かずだな。取り敢えず装着してみろ」

「あ、ああ」

箒は若干困惑気味で打鉄を装着する。と、すぐに普通の打鉄とは違うのが分かったみたいだ。

「これは……」

「どうだ？いつも授業で使う打鉄とは違うだろう？」

「あ、ああ。かなり使いやすい……これなら……」

「まあ、箒の実力でならかなり戦力アップだろうな」

「……疾風、一つ聞いて良いか？」

「ん？なんだ。ああ、なんで俺がこいつの説明が出来るかは教えないけどな」

「たしかにそれも気になるが……どうしてここまで私を手助けしてくれるのか？」

「ああ、それが……それは昔約束したろ。『箒の初恋を応援する』てな」

これは小学生の時、俺が箒とした約束。あの時は四六時中三人一緒にいたから、箒の仕草や反応を見ているとすぐに一夏に惚れていると思って話してみると見事にビンゴ。そこからはちよくちよく相談を聞いていた。

「なっ！そ、それは昔の約束ではなかったのか！？」

「昔でも約束は約束。だから俺は箒の初恋を応援したいんだよ。幼馴染としてな。まあ、一夏がどこまでしたら気づくかは知らんが」

あの鈍感のことだからキスまでしないと気づかない……けど、箒にそんなことが出来るはず無いか……

「う、うむ。疾風、ありがとぅな……」

「どういたしまして。それじゃ、俺は戻るぜ」

「は、疾風……！」

「ん？」

「私は……私は今度のトーナメント絶対優勝するぞ……！」

「ああ、だが俺もやるからには勝つつもりでやるから当たったら全力で来いよ。箒」

「ああ、無論だ。疾風、お前も全力を出せ」

「ああ、じゃあな。箒」

箒の頬を少し赤くしているが嬉しそうな顔を見て、俺も少し笑って食堂に向かった。

（てか、流星にはリミッターが付いているから全力は出せないじゃん。まあ、技術面で少し本気を出せば良いか）

10話 午後の模擬戦（後書き）

毎度のことですが、俊さんにはいつもありがとうございます。
感想・ご意見お待ちしております。

11話 流星と黒ウサギ相對する

「じゃあ、あらためてよろしくな。シャルル」

「うん。よろしく、疾風」

第二グラウンドから戻った俺は一夏、シャルルと一緒に夕食を食べて、その後部屋に戻っていた。

シャルルはやはり俺の部屋のルームメイトになって、今は食後の休憩という訳で俺の淹れた緑茶を飲んでいた。

「紅茶とはずいぶん違っんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「気に入ってくれたならなによりだ。また飲みたくなったら言ってくれ。淹れるからよ」

「うん、ありがとう、疾風」

柔らかい笑みを浮かべるシャルルに、男と分かっていても一瞬ドキツとしてしまった。こいつ中性的な顔立ちだから笑うとそれこそ女みたいだな……

「ルームメイトだろ。これくらい普通だ」

「ふふっ、ありがとう。それじゃまたおかわり貰って良いかな？」

「ああ、良いぜ」

俺はシャルルから空の湯飲みを受け取って、簡易キッチンで再度淹れてシャルルに渡した。

「ほい、どうぞ。それでシャワーの準備はどうする？俺はどちらでも良いが」

「あ、僕は後でいいよ。疾風が先に使って」

「そうか？別に遠慮しなくても良いぞ。」

「ううん平気だよ。僕ってあんまり汗かかない方だから、すぐにシャワーを浴びなくてもそんなに気にしないし」

「そうか、それじゃ先に使わせてもらっぞ」

「うん。そういえば一夏が毎日ISの練習を放課後にしてるって聞いたんだけど疾風も参加してるの？」

「ああ、一応俺以外に箒、鈴、セシリアもいるが…まあ、あいつらの教え方だと一夏に理解できるはずが無いからシャルルも手伝ってくれ」

「うん、僕は良いよ。僕も専用機持ちだから役に立てると思うし」

「ああ。じゃあ、よろしく」

「うん。任せて」

俺はベッドに入ってそのまま寝た。

あれから五日後の土曜日。

一夏にシャルルも練習に加わっていいかと確認したところ即答で許可が出たので、俺と一緒に参加している。

IS学園の土曜日は午前中は授業があるが午後はほぼ自由時間でアリーナが開放されているため大体の生徒が実習として使っている。今回はセシリア、鈴、箒は後ろで見ってもらって、俺とシャルルで一夏の特訓をしていた。

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは単純に射撃武器の特性を理解していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応分かっているつもりだけど…」

「まあ、たしかに何回かは説明したけど、やはり知識だけじゃ駄目だからな。さっきのシャルルとの戦いでも瞬間加速イクニッション・ブーストを読まれて、間

合いが掴めなかったろ」

「うっ、たしかに……」

「一夏のISは近接格闘オンリーなんだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬間加速は直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「というより、お前はまだ瞬間加速を完璧に使いこなせてない。熟練したIS乗りは直線だけじゃなく自由に軌道を変えられるからね」

「そ、そうなのか？」

「ああ、現に千冬さんが使った瞬間加速はフェイントとかを上手く入れていたからね」

「けど、無理にやって空気抵抗とか圧力の関係で機体に負担がかかると、最悪骨折したりするからね」

「だから、まず一夏は射撃武器のことを理解しろ。シャルル、なにが貸してやってくれ」

「うん。はい、これ」

シャルルは五五口径アサルトライフル《ヴェント》を一夏に渡した。

「え？他のやつ武装って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾アンロックすれば登録してある人全員が使えるんだよ。うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

「お、おう。構えはこれでいいのか？」

「もう少し脇を締める。それと左手はそっちに備える　そうだが、それで良い。本来ならセンサー・リンクで射撃をするが格闘戦100%の白式のことだ、どうせセンサー・リンクはないだろう」

「ああ。さっきから探しているが見つからないな」

「やっぱりな、それじゃとりあえず目視で撃ってみろ」

「お、おう。じゃあ、行くぜ」

一夏はシャルルから借りた銃を的に向けて引き金に力を入れる

バアンッ！！

「うおっ！？」

初めて間近で聞いた火薬の炸裂音に一夏は驚いた。

「どうだ？初めての射撃は？」

「あ、ああ。なんか、アレだな。とりあえず『速い』っていう感想

だな」

「当たり前だ。銃弾はその面積が小さい分速い。だから、軌道予測さえあつていれば簡単に命中する。外れても牽制になるしな」

「な、なるほど…」

「あつ、一夏、そのままマガジン撃つていいよ」

「おう、サンキュー」

そして、一夏が大体的の中心から少し外れたところに当てながらもマガジンを撃ち切るとアリーナ内がざわめいた。俺も視線を移した。

「……………」

そこにはシャルルと同じ時に転校してきたドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「おい」

「……なんだよ」

一夏は気が進まないようだがとりあえず返事をした。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い、私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

そうだろうな。ドイツ軍、千冬さんで思いつくのは一つだけ。

第二回IS世界大会『モンド・グロッソ』千冬さんは決勝まで行き、大会2連覇まであと少しだったが突然辞退した。理由は決勝当日、応援に来ていた一夏が謎の組織に誘拐された。そして、一夏を救ったのが大会を辞退した千冬さんだった。

そして一夏の居場所を突き止めたドイツ軍に借りを返すために千冬さんは一年ぐらいドイツ軍で教官としてドイツに居た。そこでラウラと出会ったんだろう。

俺もその時、兄さんと一緒に千冬さんの応援に行っていて、事情を千冬さんから聞いた。

「貴様がいなければ教官が大会2連覇の偉業を成し遂げただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を　貴様の存在を認めない」

「また今度な」

（あつ、バカか、こいつ！今そんなこと言ったら、火に油を注ぐだけだろう！）

俺はすぐに一夏とラウラの間に入れるように流星ミィティアを起動できるようにしていた。

「ふん。ならば 戦わざるを得ない状況にしてやる！」

言うや否やボーデウィツヒは左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

ガギンッ！

だが、俺がすぐに流星ミィティアを展開して一夏ラウラの間に入り、GNソー
ドで弾丸を切り裂いた。弾丸は二つに別れ、一夏とシャルルには当
たらなかった。

「はあ、こんな密集空間で戦闘を開始するなよ」

「貴様…邪魔をするな」

「悪いがそれは聞けない。それにお前があの事件で一夏にキレるのは逆恨みだ。あの事件で優勝じゃなく一夏を選んだのは千冬さんの
意思だ」

「そんなの関係ない。そいつさえ居なければ教官の経歴に傷が付か

なかったんだ。だから私は織斑　一夏、貴様を許さない」

「……分かったよ。そんなに一夏をぶちのめしたいならまず俺を倒せ。言つとくが……俺は強いぞ」

「フン、貴様には興味が無いがそんなにボロボロにしてほしいのならばそうしてやろう」

「上等……」

俺は持っていたGNソードを構え、ラウラもプラズマ手刀を展開して構えた。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

一触即発の空気の中、突然アリーナのスピーカーから声が響いた。どうやら騒ぎを聞きつけ担当の先生が駆け付けたみたいだ。

「……ふん、今日は引こう」

興が削がれたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除して、アリーナゲートへ去っていった。俺はシャルルと一夏の近くにいった。

「一夏、シャルル、大丈夫か？」

「うん、ありがとう。僕は平気」

「あ、ああ。ありがとう疾風、助かったよ」

「ならいい。さて、もう4時になるな。そろそろ閉館時間だ。もうあがろうぜ」

「えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」

「分かった。先に行ってるぜ。ほれ、行くぞ一夏」

「わ、分かったから首は掴むな！」

また一夏がウダウダ言う前に一夏の首根っこを掴んで、更衣室に引っ張っていった。

11話 流星と黒ウサギ相對する（後書き）

俊さん、いつもありがとうございます。最後の一言にかなり救われます。

感想・ご意見お願いします。

12話 シャルルの秘密

更衣室に戻った俺と一夏は喋りながら身支度をすませていた。

「はあ、しかし風呂に入りたいな」

「あゝそういえば、お前風呂好きだったもんな。昔、道場での稽古終わったらよく箒の家の風呂貸してもらっていたっけ」

「そういえばそうだったな。懐かしいな」

「そうだな……あの頃は良かったな……」

「ん？なにと言ったか？」

「何でもねえよ」

「あのー織斑君、皐月君、デュノア君はいますかー」

俺と一夏が昔の事を話していると更衣室の扉の向こうから声が聞こえた。この声は多分山田先生だろう。

「はい？えーと織斑と皐月なら居ます」

「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりしますー？」

「大丈夫ですよ。着替えは済んでますから」

「そうですかーそれじゃ失礼しますねー」

圧縮空気音の開閉音と共にドアが開いて山田先生が入ってきた。

「デュノア君は一緒じゃないんですか？織斑君達と実習中だつて聞きましたけど」

「まだアリーナに居ます。もうピットまでは来てると思いますけど、なにか用なら呼んできます」

「ああ、いえ、伝えておいてもらえれば十分です。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯別にするといういろと問題が起きそうなので、男子は週二日の使用日を設けることになりました」

「本当ですか！」

一夏が大声で反応する。

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」

さらに山田先生の手を取って言葉を続けている……あいつは無意識

でやっているが山田先生すごく困っている顔だな。

「い、いえ、これも仕事ですから……」

「いやいや、山田先生のおかげです。ありがとうございます」

「そ、そうですか？そう言われると照れちゃいますね。あはは……」

「疾風、一夏何しているの……？」

ん？シャルルが戻ってきたのか。

「先に戻っててって言ったよね。それに一夏は先生の手を握って何をしているの？」

「あ、いや。なんでもない」

一夏はすぐに手を離す。山田先生もシャルルに言われて急に恥ずかしくなったのか、後ろを向いた。

「ああ、すまない。先生からの連絡を聞いていたんだ」

「喜べシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

テンションが上がりっぱなしの一夏が言う。

「そう」

シャルルはそのテンションの高い一夏を横目で見ながらISを解除してタオルで頭を拭き始めた。てか、なんかさっきより機嫌が悪いな……

「ああ、そういえば織斑君と皐月君にはもう一つ用件があるんで職員室まで来ていただいていいですか？」

「分かりました、行くぞ一夏　ああ、シャルル多分遅くなると思うから先にシャワー使って良いぞ」

「うん、分かった」

「じゃあ、行きましょう」

「……………はあっ……………」

ドアを閉め、寮の部屋に自分一人だけになったところでシャルルは大きくはき出すようにため息を漏らした。それまで我慢していたせ

いだろうか、無意識に出たそれは本人が思ったよりも深く、本人が驚くくらいだった。

（何をイライラしているんだか）

閉じたドアに背を預けながらさっきの更衣室でも自分を思い出す。その態度が今になって恥ずかしい。きつと疾風も面食らっていたに違いないと思うと、ますます落ち込みに拍車がかかる。

（……シャワーでもして気分を変えよう）

シャルルはクローゼットから着替えを取り出してシャワールームへ向かった。

「さて、終わった、終わった」

俺の用件は職員室で筈に預けた打鉄についての数枚の書類に名前を書くだけだった。

一夏は白式の正式な登録に関するので結構な枚数があったから俺は先に戻っていた。

「ただいま、シャルル？」

部屋に入るとすぐにシャワールームから響く水音に気づく。

（そっぴゃ、シャルルがボディソープ切れてたって言ってたな…）

俺はシャルルが言っていたことを思いだし、クローゼットからボディソープを取り出し渡そうと思って、シャワールームの間にある洗面所へと入る。

ガチャ　ガチャ

「シャルル。替えの」

「は、は、はや……て……？」

「は………？」

シャワールームから出てきたのは、金髪の女子だった。
どうしてわかったのか。胸があるからだ。

「きああっ！？」

ガチャ！

大きなドアの音で俺は我に返った。

「……ボディーソープ、ここに置いておくから」

「う、うん……」

俺はシャワールームのドア前にボディーソープを置いて出て、いつの間にか自分のベッドに腰掛けていた。

ガチャ

少しして、控えめに脱衣所のドアが開かれた。

「あ、上がったよ……」

「あ、ああ……お茶でも飲むか？」

「う、うん。もらおうかな……」

俺はお茶を淹れて、シャルルに渡す。

シャルルはいつもどおりのスポーツジャージだったが、胸を隠していた特製のコルセットを外しているため女子と認識できる。そして俺達は向き合うように互いのベッドに座り、お茶に口をつけていた。

「あ、あの疾風」

「話したくないなら別に話さなくて良いぞ」

「……ううん、大丈夫」

「そうか……じゃあ、どうして男装してまでここに来たんだ？」

「……実家からそうしろって言われたんだ」

「実家……デユノア社の社長か」

「うん、そう……僕のお父さん。その人からの命令なんだ」

「だとしてもどうしてだ。実の娘に命令なんて？」

「僕はね、疾風。愛人の子供なんだ」

俺は思わず絶句してしまった。

「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんがなくなったときにね、父の部下がやってきたんだ。それで色々と検査する過程でIS適正が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデユノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルはおそらくこんなこと話したくない話だろう。でも、話してくれるシャルルを俺は見つめて黙って聞く。

「父にあつたのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸によばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

あはは、と乾いた愛想笑いを続けるシャルル。俺は徐々に怒りが沸々と湧き上がってくるのが分かり、無意識に拳を強く握り締めていた。

「……そして、そこからデュノア社の経営危機、か」

「うん。それで」

「もういい。事情は把握した……その経営危機を解決するための広告塔として、そして俺と一夏、俺たちのＩＳデータを得るために近づきやすいように男子としてここに入ってきた。そうだろ」

俺はこれ以上シャルルに話させないために遮った。

「うん、その通り……」

「……シャルルは良いのか。そんな屑の操り人形になって…」

「良いとは思ってないよ。でも、もう疾風にばれちゃったし、きつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「……………」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソについていてゴメン」

シャルルは深々と頭を下げた。

「……シャルル、お前はこれからどうしたいんだ？」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もこの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は強制送還されて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「そうじゃない！俺はお前の意思を聞きたいんだ！」

「……意思なんて僕には無いよ」

そう言って顔を上げたシャルルの微笑みは、痛々しいものでそれと同時に俺はこいつを守りたいと思った。

「え／＼は、疾風!？」

俺はその想いのまま座っているシャルルを抱きしめていた。

「ここにいろ……」

「え？」

「特記事項第21、本学園における生徒その在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。つまり、この学園にいれば、すくなくとも3年の間はデュノア社やフランスもお前には手を出せない。だから、その間に何か良い手を考えればいいだろ？」

「でも、3年間で何も考ええなかったら…僕はどうすればいいかな？」

「その時は俺がお前を守る。俺がお前の居場所になってやるよ。それでデュノアやフランスが何言ってきたとしても俺の力で絶対に屈服させる」

シャルルを抱きしめていた腕を放しながら即答する。

「でも、そんなことをしたら疾風が……」

「俺は大丈夫だ。それにもしもの時はデュノア社をうちの会社の傘下にして屑を権力的に潰してやる」

「え、会社って？」

「ああ、^{ブレイヴ} BRAVE社って知っているよな」

「うん。数年で量産機ISのシェア世界第1位になったあの大企業だよな？」

「ああ、それで俺はその副社長をしているんだ」

「えっと…それって…」

やっぱり、急の話で話が飲み込めないよな。

「ああ、こっちのほう分かり易いか…」

俺は自分の私物から仕事でいつも使う名刺を一枚取り出す。

「Bonjour, une jeune dame. Je suis un vent fort de azalee des vice-presidents de compagnie COURAGEUSE. Ensuite, connaisance.」 訳 こんにちは、お嬢さん。私はBRAVE社の副社長

の皐月疾風です。以後、お見知りおきを」

シャルルに名刺を渡しながら仕事モードになってフランス語で話す。

「……え…ええええ！」

「しっ、静かに」

シャルルが名刺を受け取って、数秒すると大声を出しそうになったが俺はすぐにシャルルの口を塞いで口元に人差し指を立てるとシャルルはすぐに縦に首を何度も振ったので手を離れた。

「ひ、ひどいよ、疾風……」

「すまん、すまん。だが、今のその状態で誰かに来られたら困るだろう」

「う、うん。ねえ、疾風……」

「なんだ？」

「ありがとう」

そう言ってシャルルはやつと微笑んでくれた。その表情には屈託もなく、とても優しい十五歳の女の子そのものだった。

「ま、まあ、俺は単にやりたいことをやっただけだから……」

自分でも顔が火照るのが分かって、照れくさくなって視線を逸らした。

「それでもありがと（くうっ）……うっ」

シャルルのお腹が可愛く鳴って頬を真っ赤にした。

「ふふ……まあ、たしかにそろそろ飯の時間だな。飯貰ってくる」

「う、うん……」

俺は少し笑いながら部屋を出た。

12話 シャルルの秘密（後書き）

俊さんいつもいつも本当にありがとうございます。

余談ですけど久しぶりにコードギアスを見ていて、ランスロットを見たら、ISの第4代型みたいだなあ〜と思っていました。

感想・ご意見お願いします。

13話 星空の下で

俺が食堂に向かって歩いてしていると目の前に一夏が見えた。しかも、右腕に箒、左腕にはセシリアが腕を組んで歩いている。

こんなの全国の男子が見たら、泣きながら殺しにかかるんじゃないか？

「よっ、両手に花だな。一夏」

「よ、よお〜疾風……」

おいおい、歩きづらいつて思っている顔しているな

「あら、疾風さん。こんばんわ」

セシリアはすごい嬉しそうな顔をしているな。それで箒は……

「……………よお、疾風」

ハハハ、やっぱり嬉しいような恥ずかしいような顔になっているな。

「今から飯か？」

「ああ、さつき書類書きが終わって部屋に戻ろうとしたら、セシリアに飯誘われて、その後に簞に会ったらこうなっただよ……」

なるほど……さしずめセシリアが勝ち誇った顔をして、それを見た簞がジェラシーを感じて、腕を組んだ、と言う感じか。

「しかし、よかったな一夏。お前に思いを寄せる人がいっぱい居てな」

「ん、どういうことだ？」

「……一夏、質問だが今、思っている事はなんだ？」

「え？うん、歩きづらいかな」

その瞬間、ぎりっ！と一夏は両方から腕をつねられた。まさか、本当に顔に出ていることだったとは……

「この状況で他に言う事無いのか……」

「自らの幸福に自覚しないものは犬にも劣りますよ」

うん、セシリアの言うとおりだな。

「一夏、お前はあれだ。一度頭を強打して思考回路を直したほうが良いと思う」

「それどういことだよ！」

だって、そうだろう。俺だって、こんなことされたらすぐに気づくぞ。

「まあ、もう良い。これ以上俺がいるとお邪魔になりそうだからな、先に行くぞ」

「??? ああ」

だから、その状態でここまで言っているのになんでお前は分からんという顔をするんだよ。

本当にこいつの鈍感はある種最強だな。

「はあ…もう良いよ。お二人さん、楽しんで」

「はい！」

「う、うむ／＼」

俺は一夏たちより歩を早くして、食堂に向かった。

俺が食堂で簡単に飯を食べた後、シャルルの分の料理を貰って、部屋に戻った。

「ただいま」

「あ、お帰り疾風」

「もらってきたのは焼き魚定食だけどいいよな？」

「うん、ありがとう。いただくよ」

につこり笑って俺からトレイを受け取って、テーブルに置いたところで表情が固まった。

「どうかしたか？」

「え、えーと……」

「…ああ、もしかして箸、か？」

「う、うん。練習はしているんだけどね」

「すまん、そういうの考えてなかった。フォークとかもらってくる」

「えっ？い、いいよ。完全に使えないわけじゃないから」

「遠慮するな」

「で、でも……」

「はあ、シャルル。お前はもう少し他人に甘えろ。遠慮ばかりしていると人生損するぞ」

「う、うん」

「それに俺はどんなことがあってもシャルルの味方だ。だから俺を頼れ」

「う、うん……じゃ、じゃあ、あの……」

「なんだ？」

「え、えっと、ね。その……は、疾風が食べさせて」

シャルルの予想斜め上を行った言葉を聞いて、俺は一瞬惚けてしまった。そこにシャルルがアゴを引いた上目遣いで言葉を重ねてきた。

「あ、甘えてもいいって言ったから…だめ？」

「あ、ああ、分かった」

とにかく、今の俺にNOの選択肢はない。これはやっとシャルルが言い出した『お願い』なんだ。

（しかし、ここで上目遣いは反則だろ…）

シャルルはまるで、捨てられた子犬が段ボール箱の中で雨の降りしきる中助けを求めているような眼差しをしていた。

俺はシャルルから箸を受け取り、鰯の身をつまんだ。

「じゃ、じゃあ…あーん」

「あ、あーん」

「う、美味いか？」

「う、うん。おいしいよ」

「そ、そうか…次は何にする？」

「えっと、次はご飯がいいな……」

「あ、ああ」

そしてまた箸で女子一口ほどの量をつまむと、受け皿の手を添えてシャルルの口にそつと運ぶ。

「あ、あーん」

「ん……」

ぱくつと料理を食べるシャルルの仕草に対して、妙にドキドキし落ち着かない。

「つ、次は和え物がいいな」

「あ、ああ」

結局全てを食べさせる事になり、途中からはお互い恥ずかしくて言葉数が少なくなっていく、食事が終わると話もそこに2人ともベッドに入った。

「……眠れん」

ベッドに入って時間が経ち、真夜中になった。が、さっきのこともあって気持ちが高ぶっていて、眠れなかった。

「はあ、だめだ…」

俺はベッドから出て、シャルルを起こさないように静かにベランダに出て、空を見る。

空は雲一つ無い青天で星空が綺麗に見えた。

「今日が本当に色々な事があったな……」

俺は今日一日を思い出していると背後で動く気配を感じた。

「疾風…」

「シャルル…悪い、起こしちゃったな」

「う、ううん。僕も眠れなかったから」

「そ、そうか」

シャルルも俺の隣に来て、星空を見た。

「……綺麗だね」

「そうだな。元々6月の星空は梅雨のせいで曇りや雨で見れないことが多いけど、その代わり4つの惑星が綺麗に見えるんだ」

「そうなんだ。疾風って星に詳しいんだね」

「まあな。それでBRAVE社製のISは全部星に関する名前を付けているからな」

現にミーティアは流星、プロキオンはこいぬ座のアルファ星、そして次にロールアウトする機体も星にする予定だしな。

「あつ、そういえばそうだね」

「そういうことだ。さて、そろそろ部屋に戻るか」

「うん」

俺とシャルルは部屋に戻ったが体が寒くなっていて、このままベッドに入ってもさつきより眠れなくなっていた。

「シャルル、お茶淹れるけど、お前も飲むか？」

「うん。それじゃ貰おうかな」

「了解」

俺は簡易キッチンで電気ケトルでお湯を沸かして、急須へ注ぐ。そこから少しして茶葉がちょうど良くくらいに広がったあたりにシャルルの湯飲みに注いでシャルルに渡した。

「はい、どうぞ」

「ありがとう…。あれ？前とは色が違うね」

「ああ、これはほうじ茶。茶葉を焙煎したものなんだ。こいつは独特の香ばしさがあって、口当たりがあっさりしているんだ」

「へえ、そうなんだ。うん、美味しい」

「寝る前に飲むならこっちが良いと思ってな。シャルルは緑茶とほうじ茶のどっちが好みだ？」

「うん、どっちも美味しいけど、僕はこのほうじ茶だね」

「そうか。それじゃ、ほうじ茶メインにするな」

「うん。ありがとうね」

その後は他愛も無い話をして、ベッドに入るとグッスリ眠れた。

13話 星空の下で（後書き）

俊さん、いつもありがとうございます。

感想・ご意見お願いします。

14話 疾風VSラウラ

シャルルの秘密を聞いて、二日経ち、月曜日 朝。

シャルル（男装）と途中で合流した一夏と一緒に教室に向かっていくと廊下にまで聞こえてくる声が聞こえた。どうやら、声の元はうちのクラスだった。

「本当だつてば！この噂で学園中持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントの優勝者には織斑君か皐月君と交際」

「俺らがどうかしたのか？」

「きゃああつ！？」

普通に話しかけた一夏に返ってきたのは取り乱した悲鳴だった…まあ、あの噂のことでも話していたのだろうな。

「で、何の話だったんだ？俺と疾風の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん？そうだったけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

鈴とセシリアは話を逸らそうとする。てか、ごまかすならもう少し

うまくやれよ。

「じゃ、じゃあ、あたし自分のクラスに戻るから!」

「そ、そうですわね! わたくしも自分の席につきませんと」

二人はそのままよそよそしい様子でその場を離れていく。

その流れに乗ってなのか、何人が集まっていた他の女子達も同じように自分のクラス、席へと戻っていった。

「……なんなんだ?」

「さあ」

バシンッ! スッ!

「ちっ、上手く避けたか…二人ともHRだ。さっさと席につけ」

俺はすぐに背後の千冬さんの気配を感じて、回避。一夏は気が付かず、千冬さんの出席簿をくらった。

てか、教師が『ちっ』はマズイですよ、千冬さん。

「さつさと席に着け」

「はい」

そして、授業も終わり、今は放課後。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと」

「第3アリーナだ」

「わあっ！？」

「お前ら、驚きすぎだろ」

廊下で俺と一夏とシャルルが並んで歩いていたが、そこに第3の聲がいきなり飛び込んできて一夏たちは声を揃って声を上げた。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことですっきりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているわけではないが……」

折り目正しくぺこりと頭を下げるシャルルに、さすがの箒も氣勢を削がれたのだろう。

「箒もあいつの調整か？」

「ああ、今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦もできるだろう」

「あいつ？」

一夏は不思議そうにそう聞いてきた。

「まあ、箒の秘密兵器だな」

「そうだな」

「へえ、そんなのがあるんだ」

俺たちは話しながらアリーナに向かっていると、近づくにつれなに

やら慌ただしかった。どうやら騒ぎは目的地である第3アリーナで起こっていた。

「なんだ？」

「何かあったのかな？こっちで先に様子を見ていく？」

「そうだな」

俺たちはとりあえずアリーナ内の様子を見るために観客席に向かった。

「誰かが模擬戦してるみたいだね。それにしても様子が……」

ドゴオンッ！

「……！？」

突然の爆発に驚いて視線を向けると、その煙を切り裂くように二つの影が飛び出した。

「鈴！セシリア！」

「相手は……ラウラ・ボーデヴィツヒか」

そこにはたしかにセシリアと鈴がラウラと対するようにいた。が、セシリアと鈴のISはかなりのダメージを受けている。機体のところどころが損傷し、ISアーマの一部は完全に失われている。一方、ラウラのほうは無傷というわけではないが二人と比較したらかなり軽微なものだった。

「何をしているんだ？　　お、おい！」

しかしバリアーによって一夏の声は二人に届かなかった。

「くらえっ！！」

鈴は《龍砲》を放つ。だが、ラウラは回避をしようとしない。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

しかし、ラウラに衝撃砲の攻撃はいくら待っても届くことは無かった。

「くっ！まかさこつまで相性が悪いだなんて……」

ラウラは右手を突き出しバリアーのようなものを展開して衝撃砲を無力化し、すぐさま攻撃に転じる。

（あれはAICか…なるほど、たしかに衝撃砲じゃ相性が悪すぎる）
アクティブ・インシヤル・キャンセラー

そして、すぐさま肩に搭載された刃が左右一対で射出され、鈴のICSに迫り、鈴の右足を捕えた。

「そうそう何度もさせるものですかっ！」

鈴の援護のため射撃を行うセシリア。同時にビットを射出し、ラウラと向かわせる。

「ふん……。理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第3世代型兵器とは笑わせる」

セシリアの射撃とビットによる視界外攻撃。その両方をかわしながら、今度は左右同時に突き出し、交差させた腕の先ではビットがAICによって、動きが止められた。

「動きが止まりましたわね」

「貴様もな」

セシリアの射撃は、ラウラの大型カノンで相殺される。

すぐさま連続射撃の状態に移行しようとするセシリアを、ラウラは先ほど捕まえた鈴をぶつけて阻害した。

「きゃああっ！」

ぶつかり、空中で一瞬姿勢を崩した二人へとラウラが『イグニッションブースト瞬間加速』で2人との間合いを詰めた。

「くっ！」

鈴は再度、衝撃砲を展開し、その砲弾エネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

その言葉通り、衝撃砲はその砲弾を放つ寸前にラウラの実弾砲撃によって爆散した。

「もらった」

「！」

肩のアーマーを吹き飛ばされて大きく体勢を崩した鈴にラウラのプラズマ手刀を懐へと突き刺す。

「させませんわ！」

間一髪のところで鈴とラウラの間に割り入ったセシリアは《スターライトmkⅠⅠⅠ》を盾に使って、必殺の一撃を逸らす。同時にウエスト・アーマーに装着された弾頭型ビットをラウラへ向けて射出させた。

ドガアアッ！

おいおい、至近距離でミサイル攻撃ってどんな自殺行為だよ…

爆発は鈴とセシリアを巻き込み、2人は床へとたたきつけられる。

「無茶するわね、アンタ…」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージを」

セシリアの言葉が途中で止まる。

「……………」

爆煙が晴れ、そこには何事も無かったように佇んでいたのはラウラだった。

（しかし、こうなったらヤバイぞ。あの二人……）

俺は万が一の時のために流星をいつでも展開できるようにした。

「終わりか？ならば 私の番だ」

言うと同時に『瞬間加速』で地上へと移動、鈴を蹴り飛ばし、セシリアには近距離からの砲撃を当てる。

そこから模擬戦じゃなく、一方的な暴虐が始まった。

その腕に、脚に、体に、ラウラの拳がたたき込まれる。シールドエネルギ―はあつという間に減り、機体維持警告域を超え、操縦者生命危険域へと到達する。

そして、普段と変わらないラウラの無表情が確かな愉悦に口元を歪めたのが見えた。

「（あの表情：マズイ！） 一夏！『零落白夜』でシールドを斬り

裂け！」

「ああ！おおおおっ！」

一夏は俺が言う前に既に白式を展開、同時に《雪片式型》を構築して全エネルギーを集約させ『零落白夜』を発動して、アリーナのシルドを切り裂きシルドの間を突破した。

「シャルル！」

「うん！」

俺とシャルルもすぐに自分のISを展開して、一夏が作ったシルドの間からアリーナに入った。

一夏はすでにラウラに斬り込んだがやはりAICに捕まって、体が止まっていた。

「な、なんだ！？くそっ、体がつ……！」

そして、零落白夜のエネルギー刃が次第に小さく消えていく。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の1つでしかない　消えろ」

「やらせるか！」

俺は『瞬間加速』^{イグニッションブースト}で接近しながら、鈴とセシリアを捕まえているワイヤーブレードを展開したGNソードビットで切り裂き、持っていたGNソードでラウラに斬撃を食らわそうとしたが、ラウラはすぐさま『瞬時加速』^{イグニッションブースト}でその場から離れた。

「一夏とシャルルは2人を！」

「分かった！」

「うん！」

一夏とシャルルはラウラが離れた鈴とセシリアの元へと飛び込み、抱きかかえた。

「逃がさん」

ラウラは大型カノンの照準を一夏たちに向けて撃つ。

「だから、やらせねえよ！」

俺はすぐにGNソードをライフルモードにして、一夏たちに迫る弾丸をビームで貫いて、爆散させた。

そして、俺は一夏たちを背にしてラウラの前に立った。

「何故だ…」

「何？」

「千冬さんからの教導の中にボロボロの相手を痛めつけろってのがあったのか!？」

「そんなのあるはずがないだろう」

「なら、なんであいつらをあそこまでやった…」

「フン、あいつらが自身の力を過信していたからだ。上には上がいることを分からせるためにしたまでのこと」

「……………ああ、なるほど…良かったぜ。千冬さんがこんな馬鹿らしいことを教えて無くてな……………」

俺は少し笑って、持っているGNソードをラウラに向ける。

「…どうやら、お前は『力』と『強さ』の意味が分からない凡愚らしいな…」

「なに！」

「良いぜ…来いよド三流、格の違いってやつを見せてやる」

「良いだろう…ならば、最初にお前をさっきの奴らと同じにしてやる！」

そう言つて、俺はGNソードを構え、ラウラもプラズマ手刀を構える。

そして、同時に斬りかかろうとした瞬間、俺たちの間に誰かが割り入ってきた。

ガギンッ！

金属同士が激しくぶつかり合う音が響き、ラウラは誰かに加速を中断させられた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬さん！？」

その人の姿は普段と同じスーツ姿で、IS用近接ブレードを持ち、俺とラウラの間割り入った。

てか、生身でISの武器を振り回すなんて…さすがといつかなんと

いうか……

「模擬戦をやるのは構わん。　　が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

ラウラは素直に頷いて、ISの装着状態を解除した。

「皐月、織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな？」

「はい」

「あ、ああ」

「教師には『はい』と答える。何回言わせるつもりだ」

「は、はい」

「僕もそれで構いません」

その言葉を聞いて、千冬さんは改めてアリーナ内すべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止とする。解散！」

まるで銃声の様に千冬さんが手を叩く音がアリーナに響き渡った。

14話 疾風VSラウラ（後書き）

文才力がない自分にとっては俊さんには感謝しています。

感想・ご意見お願いします。

15話 シャルルの想い

あの後、ボロボロになった鈴とセシリアは保健室に運ばれ、俺とシャルルは二人のために自販機で飲み物を買っていた。

「よし、紅茶とウーロン茶ならあいつらでも飲めるよな」

「うん。自分の国の飲み物なら大丈夫だと思うよ」

「だよな」

そうして、保健室に戻って、入った瞬間、

「バカってなによバカって！バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

鈴とセシリアの怒り混じりの声が聞こえてきた。

「…はあ、怪我人ならもう少し静かにしろよ」

「はは…でも、好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「だな」

これが一夏の耳に入れば、少しは自覚するかね。

「ん？」

……どうやら、シャルルの言葉は一夏の耳には入らなかったようだ。そして、鈴とセシリアはしっかり耳に入ったらしく、顔を赤くしていた。

「ななな何言っているのか、全っ然っわかんないわね！こここここれだから欧州人^{ヨーロッパ}って困るわね！」

「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

セシリアと鈴は全力で否定してるな……一夏はこれを見ても自覚しないなんてある種凄いな。

「はあ、お前らもう少し自分に正直になっただほうが良いぞ」

まあ、これは鈴とセシリアもだけど、箒に一番言えるな。

「私はいつも正直よ!」

「そうですね!」

「はあ、そうですか。とりあえずウーロン茶と紅茶。これ飲んで落ち着け」

「ふ、ふんっ!」

「不本意ですがいただきましたましようっ!」

二人は俺から飲み物をひったくるようにして取り、一気に飲んだ。

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら」

ドドドドドドドドッ……!

「な、なんだ?何の音だ?」

地鳴りのような音はどうやら廊下から響いている。しかも、徐々にここに近づいてきているな。

ドカーン!!

その瞬間、保健室のドアが吹き飛んだ。おいおい、鉄の塊が吹き飛ぶところなんて初めて見たぞ。

そしてその吹き飛んだ鉄の塊が俺の隣にいたシャルルに

「シャルル！」

「え？キャツ！」

あまりの光景に啞然としていたシャルルの手を引いてこちらに引き寄せた。

そしてドアのなくなった保健室の入り口からは文字通り雪崩れ込んできたのは数十名の一年生（リボンの色で分かった）女子だった。

「あ、あの疾風？そろそろ離してもらっていい？」

「ん？あ、ああ悪い」

先ほどシャルルを引き寄せた時にそのまま抱きしめるような形になっていたため、シャルルは恥ずかしいようで顔を赤くしていた。

だが、離れた時に残念そうな顔になったような気がするが……うん、気のせい……だよな？

そんなこんなをしていると結構広い保健室はあつという間に人で埋

め尽くされ、俺たち男子を包囲してそれぞれが手を伸ばしてきた…
…人の間から手、手、手、手…これなんてホラーだ？

「お、おい！これなんなんだよ！」

「ど、どうしたの、みんな…ちょ、ちょっと落ち着いて」

「」「これ！」「」

バツと女子軍団から差し出されてきた紙を一夏が受け取る。

「な、なんだそれ？」

「え」と『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする』

『』

「もう、そこまででいいから！とにかく！」

「私と組もう、皐月君！」

「私と組んで、織斑君！」

「私と組んでよ、デュノア君！」

そして、再び起こるホラー状態……現実でリアルこんな見る日が来るなんて思わなかったな。

けど、本当は男2人に女1人なんだよな。

「え、えつと……」

ふと、シャルルの方を見てみると困り果てた顔でこっちを見ていた。それも仕方がないか。トーナメントに向けての練習の間はそのペアになったやつと一緒に居ることが多くなる。つまりふとしたことでシャルルの正体がばれる可能性がある。それはなんとしても回避しないと。

「悪い。俺はシャルルと組むから無理だ。それと一夏も箒と組むから無理な」

そう言つてシャルルの方に目を向けると、目を一瞬見開いたあとに安堵したような表情になった。

「お、おい！疾風！」

その瞬間、急に人だかりの後ろから名前が呼ばれる。そして、無理やり一番前に出てきたのはやはり箒だった。

「お前！勝手なことを」

「いいだろう。せつかくチャンス作ってやったのに棒にふる気かよ？」

俺は箒にしか聞こえないぐらいの声で言うと箒は顔を赤くして何も言わなくなった。

「それに一夏も即席ペアより幼馴染の箒のほうがやりやすいだろう」

「そうだな…分かった。箒、俺と組んでくれないか？」

「……ああ、分かった」

よし、これで少しは進展してくれよ。

「さて、これで話は終わりだ。ここには怪我人もいるんだ。ほら、解散、解散」

俺は千冬さんみたく手を叩くと一人、また一人と保健室から出て行き、残ったのは俺、シャルル、一夏、箒、そしてベッドの上にいる鈴とセシリアだった。

「さて、これで平和的に」

「どこが平和的なのよ!」

刹那、鈴が枕を投げてきたが俺はすぐにそれを受け止めた。

「一体、なんでそうなるのよ!」

「そうですね!いくらなんでもそれは引き下がれませんわ」

そう言って、鈴とセシリアは声を荒げる。

「はあ、お前らはトーナメントにエントリーすら出来ないと思うぞ」

「なんでよ!」

「まず二つ目、お前らのその怪我」

どう見ても重傷だろ、その怪我は。

「こ、これくらい大丈夫ですわ!」

「なら二つ目……お前らのIS、ダメージレベルが良くてC、悪くてそれ以上を超えている。あれじゃ、エントリーの許可が降りるは

「ずがない」

「「!」」

これは開発者の見解だ。あの破損具合を見て、破損割合が6割は超えてる。そんな状態で学園側がエントリーを許可するはずがない。それを分らない代表候補生じゃないだろう。

二人は苦虫を噛み潰したような表情をしていた。まあ、それほど一夏とくつつきたかったんだろうな。

「それじゃ俺とシャルルは戻るぞ。しっかり安静にしろよ」

「じゃ、じゃあ、お大事に」

俺とシャルルはそう言って、ドアのない保健室から出た。

「あ、あのね、疾風」

「ん？」

夕食後、部屋に連れ立って戻るなり、シャルルが口を開いた。

「あの、遅くなっちゃったけど……助けてくれてありがとう」

「ん？俺が何かしたか？」

「ほら保健室で。ドア飛んできた時に助けてくれたし、トーナメントのペアを言い出してくれたの、すごく嬉しかった」

「ああ、アレか。気にするな。事情を知ってるのは今のところ俺だけだしな、サポートするのは当然だろ？それにドアのことに關しては俺もマズイと思って、シャルルの手を引いていたからな」

「でも、ありがとうね。僕、誰かのために自分から名乗り出られるなんて、すごく素敵なことだと思う。僕はすごく嬉しかったよ」

「そうか……ところで、俺しかないときに無理に男子口調にしないでいいぞ」

「う、うん。僕 私もそう思うんだけど、ここに来る前に『正体がバレないように』って、徹底的に男子の仕草や言葉遣いを覚えさせられたから、すぐには直らないかも」

なるほど、すぐにボロが出ないようにってことか。デュノアも一応、馬鹿ではないか……

「で、でも、その……やっぱり女の子っぽくない、かな？」

「ん？自分のことを『僕』って言うことか？」

「そ、そう。女の子っぽくないんだったら、疾風と2人きりの時だけでも普通に話せるようにがんばるけど……」

「無理にしくなくてもいいぞ。それに俺はどんな喋り方でもシャルルは可愛いと思うし」

あ、つい本音が……まあ、別にシャルルだったら気を悪くしないか。

「か、可愛い……？僕が？ほ、本当に？ウソついてない？」

「ああ、信じる。それにシャルルはもう少し自分に自信を持て」

「……うん、じゃあ、別にいいかな」

「ああ。そういや、お互い制服のまんまだな。俺は外に出てるから着替えるよ」

「あ、いいよ別に。僕は気にしないし、疾風に悪いよ」

「いや、俺が気にするんだよ……それにちょっと電話もしたいんだ」

「う、うん。分かった。それじゃ、早く着替えるよ」

「別にゆっくりで良いぞ。俺もかかると思っからな」

「う、うん」

俺はそうして部屋を出て、携帯を取り出して、少し操作して耳に当てる。少しコール音が続いてから、ガチャッと聞こえた。

『やあやあ、どうしたんだ、疾風君。まさか君から電話がくるとは思わなかったよ』

「……どうも、鳥海さん」

この人は情報屋の鳥海とりうみ 恭也きょうや。正直、俺はこの人は嫌いだ。だが、今はそうは言ってられない。

「今回も情報を買ってください」

『了解。それでなんの情報欲しいの？フランス政府？デュノア社？』

「……どうしてその二つだと思うんですか？」

『勘だよ、勘。俺の勘はよく当たるのは知っているだろ？それでどつちのが欲しいの？』

「……とりあえず、デュノア社の裏でやっていることの情報をください」

『フムフム……なるほど、さしずめ籠に閉じ込められたお姫様クイーンを助け

る、といったところか?」

「どういことですか?」

『ハハハ、解っているくせに。IS学園にいるデュノア社の社長の愛人の子供をデュノア社から助けるんだらう?』

「!?!?.....それも“勘”ですか」

内心驚いたがあくまでポーカーフェイスで話を続ける。

『ハハハ、さあ、それはどうかな?』

.....やっぱりこの人は好きになれないな。なんか、全てを見透かされるような感じがする。

「.....とにかくお願いします。報酬はいつもどおりの方法で」

『了解。それじゃ、またのご利用お待ちしてまゝす(ブツッ)』

「.....はあ、とにかくこれで保険は出来たな.....さて、そろそろシヤルルの着替えも終わつたろう」

そう、これは保険。俺の読みどおりデュノア社が学年別トーナメントが終わった後に動いた時のためのだ。

俺は携帯を閉じてポケットに入れて部屋に入る。

俺がドアを閉めると同時にどたつという音が聞こえて、反射的にそちらに顔を向けるが、すぐにドアのほうを向いた。

「いたた……あつ、疾風……」

どうやら、シャルルも俺に気がついたらしい。

「よ、よお……」

「……もしかして……見た？」

「み、見てない……」

「本当の本当に？」

「ほ、本当だ」

「パンツの色は？」

「ピンク……あ！？」

うつかり、口が滑ってしまった。

「疾風のえつち」

「わ、悪い……」

「ま、まあ、いいけど……許してあげる」

その後、シャルルの着替えが完了すると今度は逆にシャルルがに後ろを向いてもらって、俺はさっさと着替えを終えて、そのままベッドに入ると睡魔がすぐに押し寄せてきて、そのまま意識を闇に落した。

一方シャルルの方はなかなか眠れないでいた。

「疾風ってば、ちゃ、ちゃんとやってくれば、僕は別に……」

と、そこまで言うてからハッと我に返った。

（もう寝よう。うん。それがいい！）

シャルルは頭を振ってさっきの思考を追いつと消していなかった。

た照明を消すために一度ベッドから出て照明を消す。暗くなった室内ではその明暗差にすぐには目が慣れない。

シャルルは疾風のところに向かい、疾風が寝ていることを確認する。

（なにやってるんだろう……僕）

そう思いながらも、シャルルは寝ている疾風の顔を覗き込む。その距離は5センチとない。シャルルの胸の鼓動がだんだんと早くなる

シャルルは数日前のことを思い出していた

『ここにいろ』

『俺がお前を守る。俺がお前の居場所になってやるよ』

初めて、そんなことを言われた。

母を亡くしてからずっと、居場所がなかった自分。血の繋がりだけの父親には氷の壁に閉ざされたような息苦しさしか感じられず、ただただ無為に日々を過ごしていた。

いつしか自分が必要とされることさえ求めなくなつて、温度のない灰色の生活が繰り返されていることにもやがて慣れてしまっていた。

そして、父からの命令で日本に行くことが決まったときも、別段何

も感じなかった。

それなのに

（どうして疾風はこんなに僕の心を揺り動かすんだろっね）

出会ってしまった。

いつもさり気なく、優しく笑ってくれる目の前の少年に。

「……疾風は優しいよ」

それからしばらくシャルルは疾風を見つめて、ひどく優しい表情を浮かべる。

そしてまるで母親が我が子にするかのように、さっとそのキスを額に落とした。

「おやすみ、疾風……」

冷めやらぬ体の火照りを抱きながら、シャルルは長い長い夜を過ごしたのだった。

15話 シャルルの想い（後書き）

いつも俊さんにはお世話になっています。ありがとうございます。

感想・ご意見お願いします。

16話 禁じられたシステム（前書き）

今回は一夏回になります

16話 禁じられたシステム

六月も最終週に入り、学園は学年別トーナメント一色にと変わった。

「しかし、すごいなこりゃ……」

一夏は着替えをしながらモニターを見て呟いていた。そこには各国政府関係者、研究員、企業エージェント、などが観戦しにきていた。たしか兄さんも来ているって……あつ、いた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来てるからね。一年には今のところ関係ないけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

「まったくだ」

「それより、一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になってるみたいだね」

「まあな」

「俺は別に誰と当たっても構わないがな。けど、トーナメント表の発表遅いな……」

今回の変則ペア対戦になって従来まで使っていたシステムが正しく機能しなかったらしく本来なら前日に出来るはずの対戦表が発表も今朝から手作り抽選くじで作ってやっていた。

「けど、一年の部、Aブロッカー回戦一組目なんて運がいいぜ」

「え？どうして？」

「どうせ、一夏のことだ。待ち時間に色々と考えずにすむからとか思っているんだろう」

「ああ、そうだぜ。出たこと勝負、思い切りの良さで行きたいだろう」

ちなみに俺とシャルルはBブロッカー回戦一組目。ようするに一夏たちと戦えるのは決勝になる。

「そうかもね。僕だったら最初から手の内を晒すことになるからちよっとマイナスに考えるかもね…あ、対戦相手が決まったね」

モニターが対戦表に切り替えた。そこに表示される文字に俺、一夏、シャルルは食い入るように見た。

「「……え？」」

「おいおい…」

そこには表示されていたのは一夏と箒対ラウラと名前も知らない生徒だった。なんか、その名前の知らない生徒が可哀想だな。

俺とシャルルは更衣室のモニターで一夏と箒対ラウラの試合が始まるのを待っていた。

「さて、そろそろ始まるな」

「そうだね。けど、ボーデヴィツヒさんは一年の中で最強クラスだと思うけど、一夏大丈夫かな…」

「まあ、今の一夏じゃ勝てないだろうな……」

「えっ！それじゃ!？」

「けど、今回はパートナーがいる。それもパートナーは箒だ。あれなら勝率もかなり高くなる…」

そう言いながら、モニターを見ていると試合開始までのカウトダウンは始まり、^{スタート}開始した。

「叩きのめす」

二人の言葉が重なりと一夏は『イグニッション・ブースト瞬間加速』を使って、一気に距離を詰めた。

「おおっ！」

「ふん……」

だが、ラウラは余裕そうに右手を突き出し、A I Cの構えをした。

「くっ……」

一夏はそのまま突っ込んでラウラのA I Cの網に捕まれ、身動き一つ取れなくなった。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

ラウラはそう言って、肩の大型レールカノンが一夏に向ける。だが、一夏の顔は涼しいものだった。

「やらせるか！」

その瞬間、箒が一夏の横から現れ、ラウラに突撃した。

「ちっ……」

ラウラはA I Cを解除して箒の斬撃を躲した。

さらにたたみかけてくる箒の攻撃はラウラが急後退をして間合いを取った。

「逃がすか！」

だが、箒は即座に日本刀型のブレードを構え、ラウラに突撃する。

「ぐっ、この機体：本当に量産機ISなのか！？」

ラウラは予想していた打鉄と箒の操縦している打鉄の性能の差にすぐに気づいて驚いていた。

「すごい…あの打鉄の動き、まるで専用機みたい」

俺の隣にいたシャルルも打鉄の性能に驚いていた。

「まあ、あの打鉄は筭のデータを詳しく取るために細かいリンクのズレを無くして専用機並に使えるようにしているからな」

「えっ！？それって疾風がやったの！？」

「いや、あれには俺は手を出していないさ、あれは束さんが妹のためをやったんだよ」

「篠ノ之博士が……」

シャルルは驚きながら、モニターに視線を戻す。俺もモニターに視線を戻すとどうやら一夏はラウラのパートナーを倒し、筭の隣に立っていた。

「サンキュー筭。あいつの足止めしてくれて」

「かまわん。それにこれも作戦だからな」

「そつだな。それじゃ、行くぜ筭！」

「ああ！」

「くっ！舐めるな！」

ラウラは二人に向けて大型レールカノンを放つ。一夏は左、箒は右に回避するがラウラはすぐにワイヤーブレードを一斉に射出して、一夏へと突き進んでいく。一夏はワイヤーブレードをアーマーにかすりながらもくぐり抜けて、自身の射程に入った。

「無駄だ。貴様の攻撃は読めている」

「普通に斬りかければ、な。それなら！」

一夏はそれまで足元に向けていた切っ先を起こし、体の前に向ける。突きの体勢だ。

だが、ラウラに突っ込んだ一夏の体はラウラのAICによって体全体を固定された。

「腕にこだわる必要は無い。ようはお前を止められれば」

「……ああ、なんだ。忘れていたのか？それとも知らないのか？俺たちは二人組なんだぜ？」

「！？」

慌ててラウラは視線を動かすが、時すでに遅し。距離を詰めていた
箒はラウラの大型レールカノンを横に一閃する。

「ぐっ！」

どうやら、一夏と箒はA I Cの致命的な欠点。使用時には多量の集中
中力が必要であり、複数相手には弱いところを狙ったみたいだな。

「行くぞ！箒！」

「ああ、一夏！決めるぞ！」

一夏と箒は自分の得物を構え直して、互いに振りかぶる。ラウラの
表情は文字通り必死の形相になった。

「……！」

「はああああ！」

一夏と箒の声が重る。そして、2人の剣先はXを描く様にラウラの
体を斬り裂いた。

その一撃によってラウラには紫電が走り、IS強制解除の兆候を見せ始めた。

「決まったな……」

俺が呟いた瞬間、異変が起きた。

「あああああつ！……！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、一夏と箒の体が吹き飛ばされた。

そして、モニターに映っていたのはラウラのISシュヴァルツェア・レーゲンの装甲だったものがぐにやりと溶けドロドロとしたものになり、ラウラを包み込んでいくものだった。

通常、ISは『スタートアップ・フッティング初期操縦者適応』と『フォーム・シフト形態移行』でしか形状の変化は起こらない。パッケージを装備することで多少の変化はあるが、本来は基礎の変化は無い。

そして黒い、深く濁った、暗い闇がラウラを飲み込んだ。あの感じ、一度見たことがある。あれは……

「まさか…VTシステムか」

「え！？それって、確か正式名称ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムだったはずだけど、あれってアラスカ条約でどこの国家、団体、企業においても全てが禁止されてるはずだよ？」

「ああ。おおかたドイツ軍がラウラのISに入れられたんだろう……」

そして、モニターに視線を戻すと変形は終了し、黒い全身装甲フルスキンのよ
うなものになっていた。ボディラインはラウラのそれをそのまま表面化したものであり、最低限レベルの装甲が腕と足に装備されている。頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ目の箇所には赤いアイ
ライン・センサーが怪しく光っている。

そして、その手に握られているのは千冬さんがブリュンヒルデとな
った際に使用し、現在は一夏に受け継がれた《雪片式型》オリジナルの原型の
雪片 だった。

「……やっぱり、か。モンド・グロッソ部門受賞者でラウラが最も敬
愛している人……」

「え！？それって……」

「そう、今一夏と箒の前にいるのは現役時代の……ブリュンヒルデだ
った時の千冬さんだ。それにあんなのが出たら、一夏が」

『おい、皇月』

その瞬間、見ていたモニターが変わり、千冬さんの顔が映った。

「なんですか」

『お前の眼から見て……あれをどう思う』

「ラウラがシュヴァルツェア・レーゲンに搭載してあったVTシステムを発動。持っているブレードから見て千冬さん、あなたのデータをトレースしていますね」

『私も同意見だ……どこの馬鹿者が……』

「とにかく、早く観客席の隔壁を閉めて生徒と来賓の避難を」

『ああ、分かっている』

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返し』

スピーカーからのアナウンスの声が響き、観客席の隔壁が閉鎖、フィールドと隔離される。来賓や生徒たちは既に避難は始まっているだろう。

「……織斑先生、俺もアリーナに出て良いですか？」

『なに?』

「俺の見立てどおり、あなたのデータをトレースしているなら、教師部隊では止めきれないと思います」

『お前なら止めれるというのか』

「…まあ、技術面では負けていますけど、機体性能だったらリミッターを解除すれば止めれるという自信はあります。それに一夏が冷静さを失って、暴走しているかもしれない。それも止めて来ますよ」

「……わかった。許可をしよう」

「ありがとうございます」

俺がそう言つと千冬さんの顔がモニターから消えた。

「は、疾風。僕も行つて良い?」

「…前に出ないなら良い」

「分かった」

「それじゃ、急ぐぞ」

「うん!」

俺とシャルルは急いで更衣室からアリーナに向かった。

俺とシャルルが自分のISを展開してアリーナに出るとすでに教師部隊は黒いISを包囲していた。そして、一夏は今にも食って掛かっていきそうな勢いだが箒が押さえていた。

「一夏！箒！」

「疾風！？お前どうして？」

「あれを止めにきた。千冬さんのデータをトレースしているのなら、教師部隊でも厳しいからな」

「待ってくれ、疾風！…あれは俺にやらせてくれ」

「……本気なのか」

「ああ」

「だが、今の白式にはエネルギーが無いではないか！」

なるほど、おおかた暴走した状態で斬り込んで行ったが逆に返り討

ちになつたみたいだな。

「まあ、無いなら持つてくれば良い話だよな。な、シャルル」

「うん」

「どういうことだ？」

「僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せるんだ」

「そうか！なら」

「だが！一つ条件がある」

「じよ、条件？」

「ああ……絶対に負けるな」

「……ああ、分かっている。ここまで啖呵切つて飛び出すんだ。負けたら、男じゃねえよ」

「そうか。なら、負けたらどうする。シャルル？」

「そうだね……それじゃ、負けたら明日から一夏は女子制服で通つてね」

「ハハハ、シャルルそれ良いな。んじゃ、そういうことだ一夏。負けたら、本気で女子制服で通つてもらつぜ」

「うつ……！いい、いいぜ？なにせ負けないからな！」

軽いジョークを交えた会話で一夏の頭は適度にクールになったみたいだな。

「じゃあ、始めるよ……リヴァイヴのコア・バイパスを開放。エネルギーを流出を許可」

展開していたリヴァイヴから伸びたケーブルを待機状態であるガントレットの形になっている白式に繋がれ、そこからエネルギーが流れていた。

「……完了。リヴァイヴの全部のエネルギーを全部渡したから、これで白式を展開出来るよ」

「ありがとな、シャルル　来い、白式！」

一夏の声と共に光の粒子が展開して、再度白式が展開される。

「い、一夏っ！」

それまで傍観していた筈が弾かれたように口を開いた。その目はまっすぐ一夏を見ていて、真剣そのものだった。

「死ぬな……絶対に死ぬな！」

「何を心配してんだよ、バカ」

「ばっ、バカとはなんだ！私はお前が」

「信じる」

「え？」

「俺を信じるよ、箒。心配も祈りも不必要だ。ただ、信じて待ってくれ。必ず勝って帰ってくる」

一夏は箒と勝利の約束をして目の前の敵を見る。そして《零落白夜》を発動。その形状は今までと違い、まさしく日本刀の形をしたエネルギー刃になった。

「いくぜ、偽者野郎」

一夏は刀を腰に構え、居合いの構えになって黒いISに向かう。

「……………」

黒いISは鋭い袈裟切りを抜き放つがその刃を一夏は弾く。

そして、すぐさま上段に構え、縦に相手を断ち斬る。

「ぎ、ぎ……ガ……」

その一撃によって黒い機体に紫電が走り、それが真つ二つに割れて中から出たラウラと一夏の目があった。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁しといてやるよ」

気を失い、倒れるラウラを抱きかかえながら一夏はそつつぶやいてた。

16話 禁じられたシステム（後書き）

毎度のように俊さんありがとうございます

感想・ご意見お願いします。

17話 休息

『トーネメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データの指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各個人端末で確認の上

』

ピ、と誰かが学食のテレビを消す。俺は天井を食べながらそれを見ていた。

「ふむ。シャルルの予想通りになったな」

「そうだね。あつ、疾風七味取ってくれない？」

「おう、了解」

ちなみに俺たちはさつきまで教師陣に徹底的に事情聴取を受け、やっと開放された時には時刻は食堂終了ギリギリ。慌てて戻り、食堂に来ると騒ぎの話を聞きたい女子がかなりいた。

そして、その半分、いやそれ以上の女子はかなり落胆していた。

「…優勝…チャンス…消え…」

「交際……無効……」

「……うああああんっ！」

そして、バタバタと女子数十名は泣きながら走り去っていた。けど、食堂で走るなよ。埃が井に入るだろうが。

「どうしたんだろうね」

「さあ？」

「あ、俺知ってるぞ」

「え、本当に」

「疾風、教えてくれ」

ま、もう話しても良いだろうな。それにもう無効の話だし。

「ああ、女子だけの噂で学年別トーナメントで優勝すれば一夏か俺と付き合えるっていうことだったらしいんだ。まあ、こうなったら、それも無効だろうけどな」

「えーそ、そんな噂があつたの!？」

「あ、ああ本当だ。てか、どうしたシャルル急に大声出して」

「えーあ、うん…なんでもないよ」

「そうか……ん？」

「……………」

ふと、視線を感じて、そちらを見てみると女子が去った後に呆然と立っていたのは箒だった。

一夏も箒に気づいて箒の近くに移動した。

「そつえば箒。先月の約束だが」

「な、なんだ」

「付き合ってもいいぞ」

「……………なに？」

「……は？今、なんて言った？あ、あの一夏がついに箒の気持ちに気づいただと！？」

「だから、付き合ってもいいって……………おわっ！？」

箒も驚き、固まっていたがすぐにバネしかけの人形みたく、動いて、身長差のある一夏を締め上げた。

「ほ、ほ、本当、か？本当に、本当に、本当だな！？」

「お、おう」

「な、なぜだ？理由を聞こうではないか」

箒は一夏を離し、腕組をしてコホンコホンと咳払いする。頬は赤く
なっている。よほど、嬉しいのだろうな。

「そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合っさ」

「そ、そうか！」

いやー、やっと箒の初恋が実ったな。良かった、良かった。

「買い物くらい」

……………は？買い物？

「……………だろうと……」

箒の表情はこわばる。うん……箒ここは本気で怒って良いぞ。てか、怒れ。

「お、おっ?」

「そんなことだろうと思ったわ!」

ずがつ!!!

箒の全力であるだろう正拳突きが一夏の腹に突き刺さる。

「ふん!」

どごおっ!!

そして、一夏の鳩尾に蹴りを入れた箒はさっさと去っていった。

「ぐ、ぐ、ぐっ……」

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思いつきがあるよね」

「シャルル、これが一夏クオリティーだぞ」

「なんだよ……それ」

「さあね」

「自分で考える、この鈍感」

それからきつちり15分後には一夏が回復した。

「そつえばちょっと聞きたいんだが」

席に着いた一夏が話しかけてきた。

「なんだ？」

「ISで会話って出来るのか？えーと、プライベート・チャンネルとは違う、なんか二人だけの空間、みたいなところでの会話なんだが」

「二人だけの空間：相互意識干渉クロッシング・アクセスのことだろうな。操縦者同士の波長が合うと稀に起こるってやつだ」

「おお、たぶんそれだ。しかし、波長……波長ねえ。なんかよく分からんって感じだな」

「ISにはよく分からない現象や機能がかなりの数あるよ。作った篠ノ之博士は全機能を公表してない上に現在も失踪中だし、前に何かのインタビューで自己進化するように設定した部分があるから、本人も全部を把握するのは無理だって言ってた気がするよ」

たしかにそのとおりだ。実のところ俺もまだGNコアの全部は把握しきってないしな。

「一夏、二人だけの空間で会話って、ラウラとか？」

「ああ、そうだが……」

「そうか…さて、そろそろ食堂も閉じるな…戻るぞシャルル」

「うん」

「あ、皐月君に織斑君にデュノア君。ここにいましたか」

俺たちは食器を片付けに行こうと立ち上がると山田先生が近くに来た。

「山田先生、どうしたんですか？」

「なんとですね！ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！そうなんですか！？てつきり来月からになるとばかり」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があつたので、もと生徒は使えない日なんです。でも点検自体は終わったので、男子の三人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

「ありがとうございます、山田先生！」

一夏はテンションが高くなり、山田先生の手を握り締める。なんか前もこんなことがあったような……

「おい、一夏さっさと手を離してあげろ。先生、困っているぞ」

「へ？あ、すみません！」

一夏はすぐに手を離す。山田先生も少し顔を赤くした。

「と、ともかくですね。三人は早速お風呂にどうぞ。大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣場の前で待っていますからね」

「はい！じゃあ早速、風呂に行きます」

そう言っ、一夏は一足先に部屋に戻った。

「……シャルル、どうする？」

「う、うん。困った……ね」

「しょうがない……最初で最後の手段を使うか」

「え？何か考えがあるの？」

「まあ、な」

とりあえず、俺とシャルルは一夏の部屋に向かうと準備を終えた一夏がいた。

「疾風、シャルル、早く行こうぜ！」

「ああ、そうだな。それと……悪い（ばそっ）」

最後の言葉は聞こえなかっただろうが、一夏の首に手刀を入れて、気絶させた。

そして、一夏の部屋に入れて、部屋を出た。

「……さ、着替えを取りにいこうぜ」

「疾風ってたまにヒドイよね」

「仕方ないだろ。それにシャルルもここ最近ドタバタして疲れが溜まっているだろ？ここでしっかり浸かって、疲れを取らないと」

「う、うん。じ、じゃあ、部屋に行って着替え取ってこようか」

「ああ、早くしよう」

部屋に戻って着替えを取って大浴場に行くと山田先生が居た。

「あれ？織斑君はどうしたんですか」

「ああ……一夏なら急に具合が悪くなったようなので今は部屋で休んでいます」

「そうですか。分かりました。それじゃあ、どうぞ。一番風呂ですよ！」

幾分テンション高めの山田先生に見送られ、脱衣場のドアが閉まる。

「さて…それじゃあ、シャルル。風呂入って来い」

「疾風はどうするの？」

「部屋に戻った後にシャワーでも浴びるよ」

「で、でもそれじゃあ疾風に悪いよ」

「それじゃあ、一夏を何のために黙らせたか分からないぞ」

「……………じゃあ、その…」

「なんだ？」

「い、一緒に入らない？ 見なければ良いし…ダメ？」

「な、なに言っただ！」

「い、いいよね？ こっち見なきゃ僕は気にしないし」

シャルルはそう言っで、上目遣いで見てきた。駄目だ…この目になると断るに断れなくなるな。

「わ、分かった、分かったから。それじゃ、俺が先に行くから後から入って来い」

「う、うん」

俺はシャルルの死角に行き、服を脱いで浴場の中に入る

そして大浴場に入るとそこはかなり広いし色々な種類の風呂があり、充実した設備をしていた。ここに一夏がいたら、テンションのパラメーターが振り切っているだろうな……

（なんか、本気で一夏に悪い事をしたな……）

俺はそう思いながら、簡単にシャワーを浴び、湯船に浸かった。そして

カラカラカラ……

脱衣所のドアが開く音が聞こえた。

ぴたぴたぴた

濡れたタイルの上を歩く音が聞こえる。すなわち

「お、お邪魔します……」

シャルルが入ってきた。俺はつい、声のした方向を向いてしまう。

そこには薄手のスポーツタオルを体に当てて立っているシャルルが居た。当てているとは言っても薄いため向こう側の肌の色が見えていて、さらに逆光のせいでボディラインがはっきりと見えてしまう。

「あ、あんまり見ないで。疾風のえっち……」

「あ、ああ……すまん……」

すぐにシャルルに背を向ける。すると、ちゃぷんという浴槽の中に入る音がする。その音で唯でさえ高鳴っていた鼓動がさらに早く、高くなった。

てか、なんでこんなに近くに來たんだ！？いくらなんでもこんな近くに來ると今から後ろを向いて言っわけにもいけないし…………

今の心境は正直に言っていると嬉しい。が…………困る。すごく困る。主に理性のほうで…………

「じゃ、じゃあ…………俺はもう出る」

「ま、待って！」

急に大声で呼び止められて、俺は出るに出れなくなってしまった。

「そ、その話があるんだ。大事なことから、疾風には聞いて欲しいんだ…………」

「…………わ、分かった」

シャルルが大事な話があるのなら、聞かないわけにもいけないな。

「その…………前に言っていたこと、なんだけど」

「前つてのは、ここに残る話か？」

「う、うん。そ、そう。それ。僕ね、ここにいようと思う。僕はまだここだっけと思える居場所を見つけれないし、それに…………」

シャルルの続きを待つが、沈黙は続いた。

ぴちゃん。

「きゃあっ!？」

「どうした!？」

「水滴が落ちてきて……びっくりしただけ」

「そうか……」

「……」

「……」

そしてまた沈黙が続く。時折天井から落ちる雫が妙に大きく反響する。

ちやぷ……

湯船の中を動く水音が聞こえて、反射的に顔を向けてしまいそうになる。

「こ、こっち見ちゃダメ!あっち向いてて!」

「わ、悪い」

ぴとっ……と、俺の背中にシャルルの手が触れてきた。

「しゃ、シャル」

言葉を言い切る前に、シャルルの手は俺を抱きしめた。背中にはシャルルが密着している感覚があり、限界まで心臓が跳ね上がった。

「疾風が、ここにいろつてそう言ってくれたから。そんな疾風が居るから僕はここに居たいと思えたんだ」

「そうか……なら良かったよ。自分の意思でここに居たいって決めたんだからな」

「うん。それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ？」

「僕のあり方。それは疾風が教えてくれたんだよ？」

「そうか……なあ、シャル」

「違う」

「え？」

「……シャルロット」

「シャルロット？それが本当の……」

「うん。僕の名前。僕のお母さんがつけてくれた本当の名前だよ。それでね、これからは二人きりの時で良いから、そう呼んでくれないかな？」

「ああ、分かった…シャルロット」

「ん」

嬉しそうにシャルロットは返事をした。その声を聞いただけでいつもの屈託の無い笑顔がすぐに想像できて、少し口元が緩んだのが分かった。

そして、この時間は俺の中でとても長く感じ、とても幸福な時間にも思えた。

17話 休息（後書き）

いつも俊さんありがとうございます。

更識姉妹ですが作者はハーレムは見るのは好きですけど、書くのは無理なのでシャルがメインヒロインで行きます。

感想・ご意見お願いします。

18話 告白

「……さて、と」

大浴場から出て、俺は部屋には戻らず、屋上で星を見ながら風呂の中での事をずっと考えていた。

（シャルロットがあそこまで迫ってくるって事は……俺に好意を持っているのか？そうしたら、俺は　　）

俺が色々と考えているとポケットに入れていた携帯が鳴った。携帯を取り出して開けるとそこには兄さんの名前が出ていた。

「兄さん？どうしたんだ？」

とりあえず通話ボタンを押して、携帯を耳に当てる。

『今日はお疲れだったな。疾風』

「ああ、兄さん。どうしたの？」

『いや、なに。良い報せと…仕事の報せがあつてな。どっちから聞

く?』

「……良い報せから頼むよ」

『了解した。お前が開発を進めていたGNソードフルセイバーがあともう少しでロールアウトしそうだ』

「本当か!」

『持つて行こうと思うんだが、構わないか?』

「頼むよ……それで仕事の報せは?」

『ああ。さっき、デュノア社から技術支援の要請がきた』

「……やっぱり、か」

『読んでいたのか?』

「まあね」

『なるほど。だから、鳥海からデュノア社についての資料が来たというわけか……』

「兄さんはその資料を見たの?」

『ああ。内容はデータで送ったから確認してくれ』

「わかった」

これで条件はクリアしたな。あとはデュノア社はチェックメイトをかけるだけだな。

『疾風……お前、何かあったのか？』

「ど、どうして？」

『惚けるな。今まで他の企業なんて無関心だったお前が急にデュノア社を調べるなんてどう考えてもおかしいだろう』

……やっぱり、兄さんには隠し通せないか。

それから俺はデュノア社やシャルロットのこと、そして計画している事を兄さんに話した。

「……というわけなんだ」

『なるほど……要するにお前はそのシャルロットちゃんが好きになったんだな』

「な、な、なに言ってるんだよ。兄さん！」

『なら、嫌いなのか？』

「んなこと断じて有り得ない！」

『なら、どっちなんだ？』

「うつ…そ、それは……」

『…ハア、お前は人の気持ちには敏感なのに自分の気持ちには鈍感だな』

はい……そう言われるとたしかにそうです。

『なら、もしもそのシャルロットちゃんがお前以外、そうだな…一夏とデートしていたら、どうする？』

「流星^{ミューティア}のフルパワーを使っても一夏を炭にする」

『……まあ、やりすぎだが、それがお前の本心だ』

「あ……」

その瞬間、自分の中でつつかえていたのが消えてスッキリしたのが分かった。

『やっと自覚したか。まあ、頑張れよ疾風。それじゃ、技術支援の話し合いをする日時が決まったら、また連絡する』

「あ、ああ…兄さん、ありがとうな」

『ああ。おやすみ』

俺は携帯を閉じて、ポケットに入れて、座っていたベンチに横になって星空を見た。

「俺がシャルロットのことが好き、か…いつからなんだろうな？」

とりあえずここ数日のことを思い出す。

最初はシャルルとして出遭って、気が合って、一緒にいることが多かった。そして、シャルロットを知り、俺はシャルロットのことをとても大切に思い、守っていきたくて…あれ？もしかしてあの時からか？でも、そう考えれば全てのつじつまが合う。

そうか…俺はシャルロットのことが好きなんだな。

「ハハハ…人の感情って簡単に動くものなんだな……」

俺がそう呟いてるとガチャツと屋上の扉が開いた音がした。俺は体を起こして見るとそこにはいたのは男装用のコルセットをつけていないジャージ姿のシャルロットだった。

「シャ、シャルロット！お前その姿！？」

「うん。でも、安心して。誰にも見られなかったから……星を見ていたの？」

「あ、ああ…星を見ていると色々と考えがまとまるんだ」

「そうなんだ。隣、座ってもいい？」

「あ、ああ」

俺が返事をするにシャルロットは俺の隣に座った。

けど、ヤバイ……今まで意識していなかったが、今はかなり無意識にも意識をして心臓がバクバクいつている。

「……星って綺麗だね。疾風が言っていたことが分かるよ」

「そ、そうだろ」

「……ねえ、疾風」

「な、なんだ？」

「さっき呟いていた事って……ホント？」

その瞬間、俺の中で何かが止まった気がした。

さっき呟いていたこと？……………それって…

「……………もしかして、聞いていたのか？」

「……………ごめんなさい。立ち聞きするつもりはなかったんだけど…
疾風が電話していたから……………」

「謝るな……………それじゃ、シャルロットは俺の気持ちを知っていると
いう訳か……………」

「……………うん」

そうか……………よし。俺も男だ。腹を括ってやる。

「シャルロット」

「はい」

「……………俺と付き合ってくれ、シャルロット。俺は…俺はお前のことが
好きだ。だから……………これからも今みたいにずっと俺の隣に居てほ
しい」

俺は覚悟を決めてシャルロットに告白をした。心臓の鼓動がさっき
より速くなっているのが分かる。

「うん…ぼ、僕も…疾風が…好きだよ」

少し間を空けて、シャルロットは目から涙が溢れながら、返事をしてくれた。

「な、なんで泣いているんだよ」

「だって…だって…疾風がそう言ってくれるなんて…思ってたなかったんだもん…」

「俺は一夏みたいに鈍感じゃないぞ」

「グスッ、そうだね」

シャルロットは頬を赤くしながら、笑ってくれた。その表情を見て、今まで速かった心臓の鼓動は落ち着いてきた。

そして、俺はシャルロットの手を取った。

「この手は…絶対に離さないからな」

「うん。僕も疾風を絶対に離さないよ」

そして、俺たちは互いの手を掴みながら、唇を重ねた。

この時を永久に忘れないために。

屋上での告白から翌朝。朝のHRにはシャルロットの姿がなかった。

『先に行つて』と言つので食堂で別れたが結局シャルロットは教室に來なかつた。他にはラウラもないがそれは昨日のことのせいだろうな。

「み、みなさん、おはようございます……」

そして、ふらふらの様子で教室に入ってくる山田先生。なんか、朝から疲れているな。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、既に紹介は済んでいるといいますが、ええと……」

転校生という言葉に反応してクラス中がざわめき立つ。というか時期もだけどこのクラスに転校生を集中させているのか？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

てっ！？この声って

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

そう言ってスカート姿のシャルロットがお辞儀をする。うん、可愛い。俺から言えるのはそれしかない。異論は認めない。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はああ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります……」

ああ、だから朝からふらふらなのか……けど、別に俺は変えても良いですよ、山田先生。

「え？デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、皐月君、同室だから知らないってことは」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

クラス中が一瞬で喧騒に包まれ、それはあっという間に溢れ返って行った。

バシーン！！

その瞬間、教室のドアが蹴破られたような勢いで開く。

「一夏あっ！！！」

そこに居るのは怒りが頂点に達している鈴。

多分、風呂に一緒に入ったとも思ってるんだろうな。てか、鈴って地獄耳なんだな。

「死ね！！！」

ISアーマー展開、それと同時に衝撃砲がフルパワーで開放。けど、鈴は一夏を亡き者にしようと考えているのか？思いつきり、死ねって言ってるし。

ズドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ」

怒りのあまり肩で息をしている鈴。

「……………」

だが、一夏に直撃する瞬間、一夏と鈴の間に大型レールカノンの無い『シュヴァルツエア・レーゲン』を纏ったラウラが割って入って衝撃砲をA I Cで防いでいた。

「助かったぜ、サンキュ。……ていうかお前のI Sもう直ったのか？ すごいな」

「コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」
「へー。そうなん　　むぐっ!？」

その瞬間、ラウラは急に一夏の胸倉をつかんで引き寄せ、キスをした。

「!?!?!?!?!?!」

一夏は何が起こったか分からなくて、頭が混乱しているようだ。まあ、いきなりキスされたらそうなるな。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「よ、嫁？婿じゃなくてか？」

一夏は頭が真っ白になりすぎたのか冷静に突っ込みをする。てか、誰だ？ラウラにオタク文化教えたのは。

「あ、あつ、あ……アンタねえつつ……！」

そして、再び怒りが頂点に達した鈴は衝撃砲が展開、開かれる。

「待て！俺は悪くない！どちらかというと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！全部！絶対！アンタが悪い……！」

うわ、スゲエ理不尽。

一夏はすぐに生命の危機を感じて、教室の後ろドアから脱出しようする。が……

ビシュンッ！

一夏の鼻先をレーザーがかすめる。一夏はおそろおそろそちらに顔を向けた。

「あら、一夏さん？どこかにおでかけですか？わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ……」

撃ったのはセシリア。その手には《スターライトMk?》。それから遅れてIS本体が展開される。

一夏は出口からの脱出を諦めて窓から脱出しようとする。しかし……

ダンッ！

一夏の目の前に箒が真剣である日本刀を突き立てられた。

「……一夏、貴様どういふつもりか説明してもらおうか」

「待て待て待て！説明を求めたいのは俺の方で　おわあっ！？」

箒はもはや聞く耳持たん！とばかりに一夏に本気で斬りかかる……お前ら、一夏が好きなのか殺したくて仕方がないのか本気で分からなくなってきたぞ。

そして、一夏はそれらをかわしつつ宛ての無い逃亡をスタートした。

「は、疾風！助けてくれ！」

「え？面白いから、無理」

「くそおおおおお！！！！！」

ドガアアアアンツ！！！！

その日のホームルームは轟音と爆音、そして絶え間ない衝撃でクラスが文字通り揺れていた。

18話 告白（後書き）

俊さん、いつもいつもありがとうございます。

感想・ご意見お願いします。

19話 怒りと驚き

あれから数日経ち、土曜日の午後。

疾風は学園ではなくフレイヴBRAVE社、十階社長室にいた。服はいつもの制服ではなく、黒いビジネススーツを着て、窓から見える町並みを見ていた。

（必ず…必ず、シャルロットを解放してやる。そして、シャルットを駒扱いしたデュノア社を　　）

「副社長、デュノア社の社長がおこしになりました」

「分かった。通してくれ」

「分かりました」

モニターに出た秘書が消えると社長室のドアが開き、入ってきたのはグレーのスーツを着て、30歳前半の男だった。

「すみません。社長はご多忙で要件は私が聞きます」

「分かりました。最初に我がデュノア社の技術支援のお話を聞いていただきありがとうございます」

「勘違いはしないでください。私達はあなたのお話を聞いて、支援をするかを判断します」

「は、はい……」

そこにはいる疾風はいつもの気さくな雰囲気ではなく、文字通り近寄りがたい雰囲気だった。そして、その雰囲気にデュノア社の社長は押されていた。

「それではそちらにお掛けください」

「は、はい」

疾風に促されて、デュノア社の社長はすぐにイスに座わり、疾風も向かい合うようにイスに座った。

「それではなぜ我らBRAVE社に技術支援の要請を？我ら以外にも宛はあると思いますけど」

「はい。ご存知の通りだと思いますが現在私達、デュノア社は経営危機に陥っています。原因は第三世代を形にしようとしています時間が不足してしまして、形にすらなっていないです。そのせいで欧州連合のイグニッション・プランからも除名されました。そしてフランス政府からは次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カットされ、IS開発許可も剥奪されてしまいです。ですから、現

在シェア一位のBRAVE社に支援要請をしました」
ブレイヴ

「なるほど……たしかに話を聞く限り、理には適っていますね」

「ならば、私達の要請を」

「ですが」

社長は嬉しそうに疾風を見たが疾風は目を瞑ったまま話を遮った。

「な、なにか問題でも？」

「……シャルロット・デュノアをご存知ですよね」

「！？な、なぜその名前を！？」

疾風がシャルロットの名前を出すと嬉しそうな表情だった社長の顔は徐々に変わっていった。

「私はシャルロットと恋人関係で付き合っています。そして、あなたとシャルロットの関係も聞きました」

「そ、そうですか……ならば、ガールフレンドの家の危機を救っていただけませんか？」

その瞬間、疾風は目を開けた。疾風の雰囲気には新たに殺気が混じっていた。

「……ふざけるな…ガールフレンドの家の危機？今までシャルロットの事を駒みたいに使っていたのにまだ駒としてあいつを使う気が！」

疾風は徐々に言葉に怒りが含まれていた。社長は疾風の殺気に当たられ、その表情には恐怖が見えた。

「それにあんたはさっき言っていないことがある。あんたがBRA^{ブレ}VE社に技術支援をしたのは…俺がいるからだろ」

「な、なんのことですか？」

「あんたはIS学園での学年別トーナメントの視察の時、俺とシャルロットがペアを組んでいたのを見て、簡単に技術支援が出来ると踏んで要請をした。そうでしょう」

「ぐっ、そ、それは……」

「そして……こっちはあんたは人の上に立つ人間ではないのも分かっている」

「それはどういうことでしょうか？」

「あんたのことを色々調べさせてもらった。あんたは会社で作った

武器をマフィアに横領。機密に運営資金の不正利用。そしてその資金は自身のポケットマネーにしている。これが人の上に立つ人間のやることですか」

「なっ！？なんでそれを！？」

デュノア社の社長は驚いて、イスから立ち上がった。

「情報屋から買ったんだ。さあ、どうする？このことをフランス政府に言えばデュノア社はもちろん、あんたは牢獄行きになる」

「ぐっ…私を脅す気なのか」

「いや、これは交渉だ」

「交渉？」

「そちらのテストパイロット、シャルロット・デュノアとその専用機『ラファール・リヴァイヴ・カスタムEE』を我が社のテストパイロットにする。そして、もう二度とシャルロットに近づかないことだ。そう誓えば、俺はフランス政府には何も言わない」

「……は、あはははは…なんだ、そんなことか。あんな物で良いんですか。それなら好きに構わないさ」

デュノア社の社長は急に狂ったように笑い出した。それを見ていた疾風は拳が強く握り締めていた。

「あんたは……」

「ん？なんだでしょうか？」

「あんたはそれでも父親か！」

バキッ！

疾風はもはや怒りのまま強く握り締めていた拳でデュノア社の社長を殴った。デュノア社の社長はそのまま後ろによろめき、倒れた。

「シャルロットは…あんたの娘は唯一の肉親であるあんたのために意思を捨てて、故郷を出た。それなのに……あんたはシャルロットを最後の最後まで駒として使う気か！？」

疾風はもはや怒りのまま倒れているデュノア社の社長の胸倉を掴んでいた。

「娘？あいつのせいで色々厄介なことがあったのだ。その見返りで私のために働くのは当たり前だろ？」

「貴様ああ！」

「待つて！疾風！」

その瞬間、社長室に声が響いた。疾風の拳はデュノア社の社長の鼻先で止まって、疾風は声をしたほうを見るとそこにはシャルロットと黒斗がいた。

「シャルロット……兄さん……」

「副社長、やりすぎだ。手を離せ」

疾風は黒斗に言われて、渋々胸倉から手を離れた。

「ミスターデュノア。要件は別室で聞かせていただきました。たしかに今のデュノア社は経営危機になっているのは理解しました。しかし、先ほどの情報が告発されたら、支援をしている我らにも被害が来ます。ですから、今回の技術支援は無いということで。それと先ほどの副社長の約束を破った場合、情報は例外なく告発させてもります」

「ぐっ……分かりました。それでは私はこれで」

デュノア社の社長は殴られた頬を押さえながら立ち上がり、そのままドアに向かった。

「あ、あの！」

社長室から出ようとしたデュノア社の社長をシャルロットは呼び止めた。

「い、今までありがとうございました。これからお元気で」

シャルロットはそう言って、お辞儀をする。だが、デュノア社の社長はそのまま出て行った。

話し合いが終わった後、俺とシャルロットは気分を落ち着かせるために会社のプラネタリウムで投影された星を見ていた。

「疾風。ありがとうね」

「ん？なにだが？」

「あの時、あの人を殴ってくれて」

「まあ、好きな人をあそこまで言われたら、いくら俺でもきれるかな」

「そ、そっか…でも、本当にありがとうね」

シャルロットは頬を少し赤くしながら、星を見ていた。

「あゝそういえば、シャルロットの名前知ってるの俺だけじゃなくなっただな」

「そうだね。それはちよつと残念だったかな」

「そうか。なら、新しい呼び方を考えるか」

「う、うん！お願い」

俺はシャルロットの返答を聞いて、また投影されている星を見て、考えているとすぐに頭の中で考えがまとまった。

「“シャル”なんてどうだ？」

「シャル　うん！すごく良いと思う」

「そうか。気に入ってくれたなら嬉しいよ。それじゃ、これからもよろしくなシャル。その……恋人としてな」

「う、うん……」

シャルは頷きながら、頬を赤くなっていた。多分、俺も赤くなって

いるな。

「それでなシャル。明日暇か？」

「うん。予定は何も入っていないよ」

「なら、明日レゾナンスに行かないか？臨海学校のために買わないといけない物あるし」

「えっ、それって…デートってこと？」

「まあ、形式的に言えばそうだな。で、大丈夫か？」

「うん…うん、うん。全然大丈夫だよ！」

「そうか。なら、良かった。さて、シャルはそろそろ学園に戻ったほうが良いな」

俺は流星の待機状態である金と白の腕時計を見ると針はすでに20時を回っていた。

「えっ！？疾風は？」

「会社で事後処理を終えてから戻るよ。大丈夫、千冬さんには言っておいたから」

「そっか。分かった」

「悪いな、一緒に帰れなくて。車はすぐに手配するから」

「うん。ありがとう」

俺とシャルはプラネタリウムを出て、シャルを見送った。

そして、事後処理を手早く終わらせて俺の本当の目的の場所に向かった。

「ふう、ここに戻ってくるのは久しぶりだな」

ここは俺の研究室。^{ミーティア}流星が生まれたところだ。そして、今はシャルの専用機『ラファール・リヴァイヴ・カスタムEE』が鎮座していた。

「さて、出来ればこいつにGNコアを入れたいが…難しいだろうな」

GNコアは普通のコアと違って、機体とGNコアにはシンクロ率がある。シンクロ率が低いと起動してもオーバーロードを起こして損壊する危険がある。だからGNコア搭載機は一からGNコアに合わせながら、作らなきゃいけない。だから、^{ミーティア}流星を作るのには時間がかかった。

「まあ、何事もやってみなきゃ分からない。確認をしてみるか」

俺はとりあえずシンクロ率を計るためにキーボードを叩いた。そして、モニターに出た結果に俺は驚いた。なんせ、そこには

「シンクロ率、97%……マジかよ」

モニターには流星と^{ミューテア}同じくらいのシンクロ率が出ていた。

19話 怒りと驚き（後書き）

俊さん、毎度毎度ありがとうございます。

感想・ご意見お願いします。

20話 初デート

デュノア社との話し合いの次の日。俺とシャルはIS学園を出て、レゾナンスに来ていた。

「けど、晴れてよかったな」

「そうだね」

今日の天気は雲一つ無い快晴。しかも、天気予報では今日一日、快晴らしい。

ちなみにシャルは夏に合っている半袖のホワイト・ブラウス。その下はライトグレーのタンクトップを着ていて、ふんわりとしたティアドロースカートはその短さもあって、彼女の健康的な脚線美を十二分に引き立てている。うん、可愛い。俺から言えるのはそれしかない。なんか、前もこんなこと思ったような……

「そっいえば、シャル」

「なに？」

「今、会社のほうで預かっているリヴァイヴのことなんだけどよ……ちよつと奇跡が起こったみたいでな、前に言った俺の作ったコアを搭載できることになったんだ」

「えっ！？疾風の作ったコアって流星に搭載されているコアだよミィティアね」

「ああ、普通はコアに合わせて機体を作んなきゃいけないから、時間がかかるけど、今回はコアを変えてハイパーセンサーの強化や新装備を拡張領域に搭載するだけだからすぐに渡せると思うぜ」

「そうなんだ。でも、そんなに無理に早くしなくても良いよ」

「けど、俺の専属開発スタッフは全員仕事好きというか…IS開発が好きだからな……」

現にリヴァイヴとGNコアのシンクロ率のことを言ったらテンションがグン上がりして、昨日の夜も俺が帰った後もやってみただけかな。全員、終わったら倒れなきゃいいんだけど……

「そうなんだ。なんか、凄い人達なんだね」

「そうだな。さて、それじゃ行くか」

「うん。えっと、疾風……」

「なんだ？」

「手、繋いでも良い？」

「おう。良いぜ。ほら」

俺が手を差し出すとシャルはその手を握ってくれた。けど、シャル
ってやっぱり華奢だし、シャルの体温でドキドキするな。

「どうしたの？疾風」

「え、ああ…シャルの手って柔らかいなと思ってな」

「え、あ、うん…」

シャルは少し俯いて顔を赤くしていた。俺も赤くなっているだろう
な。

「さて、行こうぜ」

「うん」

そして、俺たちは手を繋いで歩き始めた。

「ここが水着売り場だな」

「うん。そうだね」

俺たちは駅前のショッピングモール、その二階にある水着売り場にいた。

「ところでシャルも水着を買うか？」

「う、うん……あの、疾風はさ、その……僕の水着姿、見たい？」

「あ、ああ。見たい、な」

シャルの質問で俺の顔は一気に熱くなるのが分かって、思わず顔を背けていた。

「そ、それじゃ、男性と女性は売り場が違うから選び終わったら、ここに戻ってくるか」

「うん」

そうしてシャルと別れた俺は男物の水着売り場に来て見ていた。なんだか奇抜な色が妙に多かった気がするが、目に入ったシンプルな黒を基調にして横に白のラインが入った水着を手にとった。

（まあ、こんなのが妥当だろうな。時間もあるけど、そこは待っていれば良いし）

そう思いながら、簡単に会計を済ませて、さつきシャルと別れた場所に帰ると意外なことにそこにはすでにシャルがいた。

「あれ？シャル、もう買い物終わったのか？」

「ううん…その、疾風を選んで欲しかったんだ」

「そうか。了解したよ」

二人で女性用の水着売り場に行く。だが、そこはさつき俺がいた男性水着コーナーとは違って、種類が豊富で正直、男である俺にとってはかなり居づらかった。

（うーん、これは色々とキツイがシャルの頼みだ。我慢すればこのくらい　　）

「そのあなた」

「あ？」

と、いきなり名前も知らない相手から話しかけられる。なんか、見るからに面倒くさそうな人だな。

「あなた、その水着、片付けておいて」

「……………」

ああ、そう言うことが…… ISが普及した十年で女尊男卑の風潮はすぐに浸透した。そして、どの国でも女性優遇制度が設けられ、男は歩いていても見ず知らずの相手に面倒ごとを押し付けられるようになった。だがな、俺は

「バカバカしい。自分で見たのなら自分で片付けろよ。そんなくらしも分からないようならあんたは相当な凡愚だな」

そついうのは大嫌いだ。知り合いとかならともかく、見ず知らずの人にいきなり命令されて従うのなど単に顔色うかがって奴隷みたいに動いているようなものだ。

「ふうん、そついうこと言うの。自分の立場を分かっていないみたいね」

そつ言つて、その人は警備員を呼ぼうとしていた。この時代、『いきなり殴られた』とでも言えば、即有罪で刑務所行き決定。まったく、ここまで来ると平等もクソもないな。まあ、平等なんて単に偽善者の言葉だな。

「あの、このくらいでもう良いでしょう？彼は僕　私の連れです
から」

そこにタイミングを見計らってシャルが口を挟んでくれた。

「あなたの男なの？ 躑くらいしつかりしなさいよ」

はあ、男Ⅱ犬の構造かよ。まったくおめでたい凡愚だな。

ちなみにここまで横柄な女はごく一部で多くの女性はちゃんと社会的立場を認めている。良い例で学園でよく話しかけてくる人たちだな。

「まったく、これだから男は……」

そんなことを言いながらその人は立ち去っていった。

「はあ、なにが躑だ。馬鹿らしい」

「ごめんね、疾風。嫌な気分にして」

「いや、シャルのせいじゃないから。それより庇ってくれてありがとうな」

「そんなの当然だよ……恋人があんなに言われていたらね」

「そ、そうか……ありがとうな。それでシャルはなにか良いのがあったか？」

「うん。一応これなんだけど……」

そう言つて、シャルが見せてくれたのは夏をイメージしたイエローのビキニタイプだった。

「うん、シャルはビキニタイプよりな……あつ、こんなのが良いんじゃないか？」

ふと俺は展示されていた水着を指差した。色はさつきと同じイエローだったけど、セパレートとワンピースの中間のようで、正面は胸の谷間を強調するようになっていて、後ろは上下に分かれているそれを背中でクロスさせて繋げるものだった。シャルはすぐにそれを取つて、見ていた。

「まあ、これは俺からの意見だからシャルがどうしたいかは決めてくれ」

「うん。でも、僕もさっきのよりこっちのほうが良いからこっちにするよ」

「そうか。それじゃ、会計に行くか」

そして、会計のために移動しようとしたらそこには見知った顔があった。

「あれ？千冬s……織斑先生どうしてここに？」

「ん？疾風か。今は職務中ではないからな、先生扱いしなくていい」

「じゃあ、改めて千冬さん。どうしてここに？」

「山田君と一緒に今週のための買い物に来たんだ」

「はい、そうなんですよ」

「あ、山田先生。こんにちは」

商品の物陰から山田先生が出てきて、シャルはすぐに気づいて軽く頭を下げて挨拶した。

「はい、こんにちは。お二人もお買い物ですか？」

「はい。俺たちも今週のための買い物です」

「それで、疾風…なぜお前がこっちの売り場に居る？」

「い！？えつと…それは……」

俺は思わず隣にいたシャルを見ると少し頬を赤くした。千冬さんはその様子を見て、納得したみたいだった。

「ふむ、そういうことか…別にそういう関係になるなどは言わないが、節度は持って接しろよ」

「はい。それと、千冬さん達もこのことは内密にお願いします。学園に知れ渡ったらどんなことになるか……」

そんなことを考えただけでも、ゾツとする……

「はい、分かっていますよ。ね、織斑先生」

「ああ。元々、言い振らすようなことはしないから安心しろ」

「ありがとうございます」

ガチャッ

俺が千冬さんに礼をすると山田先生の近くの試着室のドアが開いた。そこには水着姿のラウラと……一夏がいた。

「……………なにしているんだ？」

「まったくだ。馬鹿者」

20話 初デート（後書き）

感想・ご意見お願いします。

21話 星と永遠の愛

「はあ、お二人も水着を買いにですか。でも、試着室に二人で入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「仰るとおりです」

「申し訳ありません」

ペコリと頭を下げる一夏とラウラ。

「ところで千冬ね 織斑先生と山田先生はどうしてここに？」

あ、一夏の奴、話を逸らして逃げたな。

「私達も水着を買いに来たんですよ。それと、今は職務中ではないので無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」

まあ、そう言われて簡単に呼べないよな。学園じゃ言った瞬間、殺人出席簿で頭を叩かれるからな。しかも、服も服で多少カジュアルとはいえサマースーツを着ているから、余計に呼びづらいな。

さて……そろそろこっちをじっと見ている視線の主を呼ぶとします

か。

「それでいい加減出てきたらどうだ？ 鈴、セシリア」

そう俺が呼びかけると柱の陰からその二人が出てきた。

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

「え、ええ。 タイミングを計っていたのですわ」

「やっぱりそうだったか。 なにこそそそしているのかと思って、ずつと気になってたんだよな」

ほお、一夏も勘付いていたのか。 女子の気持ちには鈍感なくせに妙なところに敏感なんだよな。

「女子には男子に知られたくない買い物があんの！」

「そ、そうですね！ まったく、一夏さんのデリカシーの無さにはいつもながらあきれてしまいますわね」

二人から一夏に向けて非難の嵐。 だから、もう少し素直になれよ。 それじゃ、この鈍感には通じないぞ。

「さっさと買い物を買わせて退散するでしょう」

そうため息混じりに言ったのは千冬さんの手には水着があった……
ああ、そういうことか。

「それじゃ、シャル。俺たちはさっさと会計をして他の買い物に行こうぜ」

「え？……あ、うん。分かった」

シャルはすぐに理解してくれて、返事をしてくれた。そして山田先生にアイコンタクトをすると山田先生はすぐにひらめいたような顔で頷いてくれた。

「あ、あー。私ちよつと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので鳳さんとオルコットさん、ついてきてください。それにボーデヴィツヒさんも」

「さて、俺たちも行くぞ。シャル」

「うん」

俺とシャルは千冬さん達と別れて、さっさと水着の会計を済まして、水着コーナーを出た。

「さて、水着も買ったことだし、シャルは何か買い物したい物はあるか？」

「うーん…僕は特にないかな」

「なら、ちょっと俺の買い物に付き合ってくれないか？」

「うん、良いよ」

そして、俺とシャルが向かったのはレゾナンスの中にあるアクセサリーショップだった。

「ここって？」

「レゾナンスのアクセサリーショップ。俺がよく来る場所だ」

「そうなんだ。なんか、高そうなところだね」

「そうでもないぞ」

「いらっしやいませ」

俺とシャルが話していると一人の店員が前に立っていた。

「以前、連絡を入れた皐月ですけど、押さえてもらっていた物を取りにきました」

「皐月様ですね。はい、すでに。只今、お持ちいたしますので少々、お待ちください」

店員はそう言って、少し頭を下げ、すぐに頼んで物を取って来てくれた。

「こちらになります」

そう言って、店員から渡されたのは綺麗に包装された箱だった。

「ありがとうございます。またのお越しを」

いつも通りクレジットカードで会計を済ませて、それを受け取って店を出た。そして、時計を見ると時間は12時を回っていて、俺達は近くにあったオープンテラスのカフェに入った。

「さて、はい、シャル。俺からの初めてのプレゼントだ」

俺はそう言って、さっき受け取った箱をシャルを渡した。

「え？こ、これって……僕のためのだったの？」

「ああ、シャルに似合うと思ってな。受け取ってくれるか？」

「うん！ありがとうね。疾風」

そう言つて、シャルは満面の笑みになった。うん、可愛いし、心落ち着くな。やっぱり、シャルは笑顔じゃないと。

「疾風…開けてもいい？」

「ああ。どうぞ」

シャルは嬉しそうに包装の紙を綺麗に取って、箱を開けた。

「……………綺麗」

シャルの手にあるのは銀のチェーン状のブレスレットで所々に星の形をした白い宝石が付いているブレスレット。ブレスレットスターだ。

「どうだ？気に入ってもらったか？」

「うん！とっても気に入ったよ！もう着けて良い？」

「ああ。構わないぜ」

シャルは早速そのブレスレットスターを着けてくれた。シャルの細い白腕にブレスレットスターは映えてとても似合っていた。

「どう、かな？」

「ああ、似合っているぞ」

「へへ…疾風、ありがとうね」

シャルは俺に嬉しそうな顔を向けた。その顔を見ているだけで気恥ずかしくなったがそれ以上に嬉しくなるな。

「ねえ、疾風。これの星の形をしているのって何かの宝石？」

「ああ、ムーンストーンだ」

「ムーンストーン？何か意味があるの？」

「鋭いな……ムーンストーンの意味…永遠に続く愛、だ」

「え…永遠に続く愛……本当？」

「ああ」

俺が返事をするときシャルはまた頬を赤くしていたけど、腕に着けたブレスレットスターを少し触りながら少し微笑んでいた。

21話 星と永遠の愛（後書き）

俊さん、いつもいつもありがとうございます。

次回からは臨海学校。オリジナルの敵を出します。あと、GNフルセイバーやシャルの新たな専用機も

感想・ご意見お願いします。

22話 臨海学校 海での時間

「海っ！見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる。

臨海学校初日、昨日の快晴が続いてくれて天気は快晴。海面は穏やかで、心地良さそうな潮風にゆっくり揺らいでいた。

俺は歌を聴いていたヘッドホンを首に掛けて、バスの窓から海を眺めていた。

「おー！やっぱり海を見るとテンション上がるよなあ」

「そうだな」

通路を挟んだ隣に座っていた一夏の言葉に軽く相槌を打っていた。俺も海を見るのは本当に久しぶりで内心テンションが上がっている。

「ああ、そういえばシャル…って駄目だな」

「えへへへ」

シャルは昨日プレゼントしたブレスレットスターを終始触りながらニコニコしていて話なんて出来ない状態だった。

（まあ、そんなに嬉しく思ってくれているならあげて良かったなっ
て思っな……さて、ちょっと眠くなってきたな……少し寝るか）

そして、俺は目を閉じて、そのまま意識を闇に落した。

「……疾風……で。疾風、起きて」

「ん……なんだ。そろそろ着くのか？」

「うん……それと……」

俺の意識が徐々にハッキリしてくると俺はシャルの肩に寄りかかっていた寝ていたみたいで周りの女子のうらやましそうな目線がいくつか感じた。

まあ、気にしないが自重はしないとな。関係がばれるとどうなるかの検討なんて簡単につくからな。

そして、少し経って俺たちを乗せたバスは旅館に到着してバスを降

りて、整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいします」」」

千冬さんの言葉が終わると同時に全員が挨拶をする。この旅館は毎年使われているようで、着物姿の女将さんがお辞儀を返してきた。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね」

外見から想像できる年齢は三十代くらい。しっかりとした大人の雰囲気を感じているな。

「あら、こちらが噂の？」

俺とその近くに在一夏を見て女将さんが千冬さんに尋ねた。

「ええ、まあ。今年は男子が居るせいで浴場分けが難しくなってますって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、二人ともいい男の子じゃありません」

か。二人ともしっかりしてそんな感じを受けますよ」

「始めまして、皐月疾風です。これから三日間よろしく願います」

俺は軽く一礼して挨拶をした。

「ご丁寧にも。清洲景子です」

「はぁ……しっかりしてるのはそっただけです。ほら、お前も挨拶しろ、馬鹿者」

と、千冬さんが上から一夏の頭を押さえつける。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「うふふ、こちらこそよろしく願いますね」

俺の時もした丁寧なお辞儀をする清洲さん。

「不出来の弟で迷惑をおかけします」

「あらあら。織斑先生ったら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」

まあ……一夏は否定出来ないだろうな。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになってますから、そちらをご利用ください。場所がわからなければ従業員に聞いてください」

女子一同は、はいと返事をするすぐさま旅館の中へと向かう。

「ね、ね、ねー。さっくん、おりむ」

ん？俺のことをこんな呼び方をするのはただ一人。

「のほほんさん、どうした？」

振り向くとそこには遅い移動速度でこっちに来るのほほんさん。

本名は布仏 本音らしいが一夏はのほほんさんと呼んでいたから俺もそう呼ぶことにした。

「さっくんとおりむーの部屋ってどこ？ 一覧に書いてなかった。遊びに行くから教えて」

「いや、俺は知らないが……一夏は？」

「そういえば俺もだ。廊下にも寝るんじゃないの？」

「わー、それはいいね。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって」

「いや、それはマズイだろう」

俺は呆れながらのほほんさんにツッコむ。たしかに今は夏だがさすがにそれはマズイだろう。

「織斑、皐月。お前たちの部屋はこっちだ。ついてこい」

俺と千冬さんの呼ばれた。さすがに千冬さんを待たせるわけにはいかないの、俺と一夏はのほほんさんに「またあとで」と言って、別れた。

「えーっと、織斑先生。俺たちの部屋ってどこになるんですか？」

「黙ってついてこい」

と、一夏は言語封殺されていた。ちなみに旅館の中はかなり広く、歴史のある装飾と最新設備が合体してとても綺麗だ。

「ここだ」

「え？ここって……」

そして、止まった目に入ったのはドアには張られていた紙に『教員室』と書かれていた。

「最初は個室という話だったのだがな、それだと就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってな」

はあ、とため息をついて千冬さんが続ける。

「結果、織斑は私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう」

「そりゃまあ、そうだけど……」

たしかに誰もおいそれと鬼の巣に入りたいとは思わないからな。

「それで、織斑先生。俺はどうなるんですか？」

さっきは一夏のことしか言っていなかったし、これで本当に床で寝

かされるのは嫌だな…………

「臯月、お前の部屋はあそこだ」

そう言って、千冬さんが指したのは隣の部屋だった。

「さすがにこの部屋に三人は窮屈になる。だが、隣なら問題なからうということだ…………うるさかったら容赦なく指導しに行くからな」

「分かりました」

「一応、大浴場も使えるが男のお前たちは時間制だ。本来ならば男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前たち二人のために、他が窮屈な思いをすることはおかしいだろう。よって、一部の時間だけ使用可能だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「はい」

「了解」

「さて、今日は一日自由時間だ。荷物も置いたら、好きにしろ」

「はい。じゃあ、楽しませてもらいますよ」

俺は千冬さんから鍵を受け取って、隣の部屋に入って、持っていた荷物を置いて部屋の窓から空を見上げた。

「……雲も少ないから、今日は良い感じに夏の星が見られるな……夜はシャルを誘って、星見でもするかな……ん？」

そう呟いているとポケットに入っていた携帯が震えた。

「兄さんからか……シャルロットちゃんの新しい専用機の最終調整が今終わった。GNフルセイバーと共に明日持つて行く、か……まったく、無茶したな、あいつら……」

俺は苦笑いしながら、とりあえず俺専属の開発スタッフ達に数日は休ませるようにしておくように兄さんに返信した。

「……さて、そろそろ海に行くか」

俺は簡単にまとめた手荷物を持って、部屋を出た。

「しかし、海なんて久しぶりだな」

俺は久しぶりの海を見ているとふいに一夏とシャル。そして……白いバスタオルに身を包んだミイラ（？）が目に入った。

「よっ、シャル。と、一夏」

「あ、疾風。遅かったね」

「ああ、ちょっと仕事のメールがあつてな…それで隣のミイラは誰だ？」

「ラウラだよ」

「……はあ？」

俺は驚いているとシャルが耳元に近づいてきた。

「実は、ラウラが一夏のために凄い水着を着ただけど…恥ずかしがつて」

なるほど。それで頭の上までバスタオルを巻いたのか。しかし、これがファーストコンタクトでいきなり一夏の頬を殴った奴には見えないな。

「ほら、出てきなつてば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

随分と弱い声だな。いつものラウラとは大違いだな。

「けどよ、ラウラ。そうしていると一夏が別の誰かと遊びに行くぞ」

「た、たしかにそうだが……」

「そうだよ。早くしないと誰かに一夏を取られちゃうよ」

「……ええい、分かった！脱げば良いのだろう、脱げば！」

もはや、ヤケクソ気味にラウラは身を包んでいたバスタオルを取る。

そこには黒の水着、しかもレースがふんだんにあしらわれていて、その水着はレースをふんだんにあしらって水着での面積が少なく、一瞬大人の下着かと思ってしまった。そして髪型もいつもと違って、セクシー・ランジェリー鈴みたいに対のアップテールにしていた。

「わ、笑いたければ笑うが良い……！」

「おかしなところなんてないよね、疾風、一夏？」

「お、おう。ちょっと驚いたけど、似合っていると思うぞ」

「ああ。俺も一夏と同意見だ」

「一夏と俺の言葉が予想外だったのかラウラは驚いて、たじろいだ後にカーッと赤くなった。」

「しゃ、社交辞令などいらん……」

「いや、世辞じゃねえぞ。だろ、一夏？」

「ああ、そうだぜ。俺は可愛いと思っぜ」

「一夏がそう言うとなラウラはさらに赤くなっていった。」

「おっりむらくーん！」

「さっきの約束！ビーチバレーしようよ！」

「わー、おりむーと対戦だ。ばきゅんばきゅーん」

「ほら、一夏。ご指名だぞ」

「疾風はどうだ？一緒にやらないか？」

「俺は後から参加させてもらっよ」

「そうか。シャルロットはどうだ？」

「僕もあとから参加させてもらっよ」

「分かった」

そして、俺は一夏達と別れて、今いたところから少し離れたところにある岩場までシャルと一緒に歩いていた。

「しかし、ここの海は綺麗だな……」

「そうだね。ねえ、疾風……」

「なんだ？」

「遅くなっちゃったけど……あの人のこと、ありがとうね」

「ああ。でも、本当に良かったのか？」

「うん。それに僕の家はお母さんと住んでいた家だけだし、僕は……疾風の隣を離れたくないからね」

「そうか」

「それでね。疾風……これ、似合ってるかな？」

「ああ、似合ってるぜ。可愛いぜ」

「へへ……そうか」

シャルは少し照れながら、髪をいじっていた。その手首には昨日プレゼントしたブレスレットスターが光っていた。

「ん？それ、つけてきたのか。防護コートとか大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ。これは疾風からもらった大事な物だからね」

「そうか。そう言ってくれると嬉しいよ。それでな、シャル。今日の夜って空いてるか？」

「ふえ！？は、は、疾風！それって……」

「誤解するなよ。まだ、そういうのはしないから」

「そ、そうだよね……」

それはさすがにアウトだろ。色々と。

「今日は星が綺麗に見られるからもし良かったら、二人で星見でもしないかって誘いだったが、どうだ？」

「僕は全然大丈夫だよ」

「そうか。なら、良かった」

「ねえ、疾風。さっきの“まだ”ってその時がきたらってことだよ

ね？」

「……………まあ、その時がきたらな」

「フフ、そっか」

「まあ、代わりといっちゃなんだが……」

「え？ムゲツ……！」

瞬間、俺はシャルにキスをした。シャルは突然のことで目を大きく開けて、驚いていた。

そして、唇を離すとシャルの顔は一気に真っ赤になった。

「ま、今はこれで勘弁してくれ」

「うゝ疾風、いきなりすぎるよ」

「良いだろ。さゝて、久しぶりに思いつきり羽を伸ばすか。行くぞ、シャル」

「ま、待ってよ！」

そうして、俺達は久しぶりの海で思いつきり遊んだ。

22話 臨海学校 海での時間（後書き）

俊さん、毎度のようにご指摘ありがとうございます。

感想・ご意見お願いします。

23話 臨海学校 星と二日目

海での時間はあっという間に過ぎて、現在七時半。大広間三つを繋げた大宴会場で、俺達は夕食を食べていた。

「しかし、昼も夜も刺身。しかもカワハギと本わさとは……随分と金がかかってるな」

「疾風、本わさって……？」

俺が呟いていると右隣に座っているシャルは首を傾げていた。

「俺も詳しくは知らないけど、なんでも本物の山葵を摩り下ろした物を本わさって言うらしい」

「えっ？じゃあ、学食の刺身定食でついているのって……」

「あれは練りわさ。色々な山葵を着色したり、合成しているらしい」

「そうなんだ。はむ」

……つて、おい……今、シャルがわさびの山をそのまま食べたように見えたが……

「つ~~~~~!!」

案の定、シャルは鼻を押さえて悶絶していた。まったく……

「大丈夫か？」

「ら、らいひょうふ……」

シャルは鼻声で返事をしながら、にこりと笑みを浮かべようとしたが、その笑顔は涙目に崩れて、いまいち決まっていなかった。

「まったく。ほら、お茶」

「あ、ありがとう……ふ、ふ……風味があつて……おいひい……よ？」

シャルは俺から湯飲みから受け取って、すぐに飲んだ。

「たく、どこまでも優等生だな」

俺は少し笑いながら、シャルの頭を撫でていた。

その後は一夏とセシリアがなにやらうるさくてしていたが千冬さん

が来て、その場が静まるのを見ながら、夕食を食べていた。

「さて、と。ここなら良い感じに見えるな」

「そうだね」

夕食を食べ終わり、俺とシャルは旅館の外にいた。そして、夜空には一面の星が広がっていた。うん、これは絶好の星見日和だな。

「凄い……前に見た時より星がいっぱいある」

「ああ。夏は夏の第三三角形や天の川が見れるから、この時期が俺は好きなんだ」

俺は座りながら、指で夏の第三三角形であるデネブ、アルタイル、ベガを繋ぐようにしていた。

「うん。僕もこれを見れば疾風が好きな理由分かる気がするよ」

「そうか」

「そういえば疾風はどうして星が好きになったの？」

「ああ。昔、父さんや兄さんと一緒によく天体観測をしていたからだな」

「そうなんだ。黒斗さんもだけど優しいお父さんなんだね」

「……まあ、父さんはもういないけどな」

「え！？……ゴメン」

「謝るなって……」

俺はそう言ってシャルの頭を撫でていた。なんか、シャルって撫でやすいんだよな。

「あ、そう言えば昼間に兄さんからメールがあつてな。シャルの新しい専用機だけど今日の昼間に最終チェックが済んだから明日には届くって」

「明日って……いくらなんでも早すぎない！？」

「ああ。けど、性能とかは心配無いと思う。そこは俺が保障する」

「そっか。疾風は開発スタッフの人達を信頼しているんだね」

「ああ。あいつらはIS開発に妥協をしない。それにあいつらはIS開発が好きだから仕事が早いんだ」

現にあいつらが居なかったら流星も完成しなかったし、GNフルセイバーに至っては完全にあいつらに任せただけだな。

「なるほど。ねえ、疾風。もつと星のことを教えてくれない？」

「ああ。構わないぜ。けど、今日はほどほどにな」

「うん。ありがとうね」

そうして、俺は時間ギリギリまでシャルに星の説明をしていた。

合宿二日目。今日は一日この合宿の目的であるISのデータ取りを行う。特に専用機持ちは送られてくる大量の装備が待っているから大変だ。ちなみにまだGNフルセイバーとシャルの新専用機は届いていない。

「ようやく全員集まったか　　おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬さんと呼ばれて、身をすくませたのは意外や意外ラウラだった。

「そうだな、ISのコアネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ISのコアは」

罰として出された問題に、ラウラはすらすらと答えた。

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言われて安堵するラウラ。まあ、ドイツ時代に嫌というほど冬さんの恐ろしさを知ったのだろうな。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験をするように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はい、と一同が返事をする。改めて見るとこの人数はかなり迫力がある。そしてその全員が一斉に作業に取り掛かった。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

思い出したように打鉄用装備の運搬をしていた箒を呼びとめた千冬さん。

「お前には今日から専用」

「ちーちゃ~~~~~ん!!!!」

ずどどど……!と砂煙を上げながら人影がこっちに走ってくる。しかも、無茶苦茶、速い。多分、ISっぽい何かをつけているからだろうと思うが……間違いなくその人影は……

「……束」

ですよ。ここは今、立ち入り禁止だけど、稀代の天才、篠ノ之束さんがそれをガン無視して乱入してきた。

「やあやあ!会いたかったよ、ちーちゃん!さあ、ハグハグしよう!愛を確かめぐへっ」

千冬さんは自分に飛び掛ってきた束姉の顔面を片手でつかみ、そのままアイアンクロー。千冬さん、相変わらず容赦ないな。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦の無いアイアンクローだねっ」

そのアイアンクローからいとも簡単に抜け出すあなたもどうかと思うが。そしてくるっと向きを変えて箒を向く。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。合つのは何年ぶりかなあ。大きくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ

「殴りますよ」

箒はなぜ持っているのかは知らないが、その手に持っていた日本刀の鞘で束さんを殴った。うん、痛そうだ。

「な、殴ってから言ったあ……し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！箒ちゃんひどい！」

頭を押さえながら涙目になって訴える束さん。けど、すぐに復活した束さんは今度は俺のほうを向く。

「やつほ。調子はどう？ハヤ太くん」

「いたって普通ですよ。俺も流星も」
ミーティア

「それは見て分かるよ 私が聞いているのは…流星のGNコアだよ」
ミーティア

「GNコア？大丈夫だと思いますよ」

そんな風に俺達が束さんと話しているのを周りは完全にばかんとしながら見ていた。

「え、えつと、この合宿では関係者以外」

「んん？奇妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者として一番はこの私を置いて他にいないよ？」

「えつ、あつ、はい。そうですね……」

はい、山田先生、轟沈。山田先生諦めてください。この人は基本好きにさせておくしかない。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒達が困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

束さんのテキストすぎる挨拶。束さんは興味を持っている人（俺、兄さん、千冬さん、篤、一夏、おまけで両親らしい）以外はどうでもいいらしい。

そして突然のことからようやく我に返り、目の前の人物を誰なのか把握した女子たちが騒ぎ出す。

「はあ……もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視して続ける」

「こいつはひどいなあ、らぶりい束さんと呼んでも良いよ？」

「うるさい、黙れ」

と千冬さんと束さんのやりとりを見ていると急に後ろに気配を感じてすぐに振り向くとそこには……

「に、兄さん……」

そこには黒いサマースーツを着た我が兄がいた。てか、どうしてここに！？

「よ、疾風、シャルロットちゃん」

「黒斗さん!？」

シャルも大声を上げて驚くと千冬さん、一夏、箒も兄さんに視線を移した。

「黒斗……」

「会うのは久しぶりだな、千冬。それに一夏と箒も久しぶり。大きくなっとな」

「お、お久しぶりです。黒斗さん」

「ど、どうも」

一夏と箒は驚きながら返事をする。女子達のほうはさっきより騒がしくなっていた。なんでだ？

「あの入って……もしかして、皐月黒斗様!？」

「あのBRAVE社の社長!？」
フレイヴ

「雑誌とかで見たけど、凄くカッコいい!」

なるほど。そういえば、世界シユア第1位になってからBRAVE
フレイヴ

社の社長である兄さんはよくちよく取材とか受けていたな。

「それで兄さんがどうしてここに？」

「ああ、GNフルセイバーとシャルロットちゃんの新しい専用機を持ってきたんだ」

「だとしても、なんで社長自ら来たんだよ。会社の仕事は？」

「安心しろ。今日は私は休みだ」

「そ、そうなんだ……」

「黒斗……貴様、ここは今立ち入り禁止だぞ」

千冬さんは近づいてきて、トーン低めにしてそう言い放つ。

「ああ、だが予め学園のほうに連絡しておいたぞ」

おお、さすが兄さん。こういうことには手際が良いな。

「そうか。なら、お前は束を監視している。お前が保護者だろ」

「無茶言つな。束の保護者は昔から千冬の役目だろ」

「フン、私は嫌だ」

「ひどいな、ちーちゃん」

そんな旧知の間柄である三人のやりとりで割り込んだのは山田先生だった。

「え、えつと、あの、こういう場合はどうしたら……」

「ああ、こいつらはさつきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「さて、疾風、シャルロットちゃん。俺達も行こうか。GNフルセイバーとシャルロットちゃんの専用機は別のところに置いてあるからちよつとついてきてくれ。千冬、疾風とシャルロットちゃんをちよつと借りていくぞ」

「ああ。分かった」

「それじゃ、行くか」

「あ、ああ」

「は、はい」

「つまり、俺とシャルは兄さんの後をついていった。」

23話 臨海学校 星と二日目（後書き）

俊さん、いつもいつもありがとうございます！

次回、ついにシャルの新たな専用機と新たな敵が現れます。

感想・ご意見お願いします。

24話 新たな力と作戦会議

俺とシャルは兄さんの後をついて行くとそこにはBRAVE社のマ
ークブレイヴが描かれたコンテナともうひとつ

「これがシャルロットちゃんの新しい専用機『シリウス・リヴァイ
ヴ』だ」

そこにはオレンジ色の装甲に新たに藍色の武装を身を包んでいる『
シリウス・リヴァイヴ』が鎮座していた。

「これが僕の新しい専用機……」

「ああ。それじゃ、早速フィッティングとパーソナルライズをやる
か。俺もサポートするからよ」

「うん。疾風、お願い」

「了解」

シャルはすぐに『シリウス・リヴァイヴ』を身を包んでフィッティ
ングとパーソナルライズを開始した。俺もサポートするためにコン
ソールを開いて空間投影のディスプレイを叩いた。

「拡張領域に新たにGNコア専用の武装…右肩とウイング部分に自動支援装備が搭載…凄い、ハイパ―センサーの精度なんか前とは別格になっている……」

「どうだ？『シリウス・リヴァイヴ』の感想は？」

「うん…もう一言で凄いと言えないよ……」

「そうか。最初は前の機体の反射速度やスピードに驚くと思うけど徐々に慣れていくぞ」

「うん。分かった」

そして、それから数分が経ち、『シリウス・リヴァイヴ』のフィッティングとパーソナルライズが終わった。

「よし、これで完了だな」

「うん。それじゃ、ちょっと試運転してみるよ」

「ああ。その間に俺も自分の奴をいじっているから」

「うん。じゃあ、行ってくるね」

そう言ってシャルは砂を舞い上げ、一気に飛翔した。

「さてと、シャルのことだからすぐに慣れるだろうな…さて、俺もやるか」

そう呟いて、流星^{ミィティア}を展開して、コンテナに入っていたGNフルセイバーを搭載するためにコンソールを開いて空間投影のディスプレイを叩いていた。

「……なんだ？スラスターや粒子圧縮の数値…前に見たときより、明らかに上がってる…それにGNコアと流星^{ミィティア}のシンクロ率も……」

ディスプレイに出ていたシンクロ率は98・5%。前に計測した時は97%だったから若干だがシンクロ率が上がっていた。

（これは一体…GNコアが流星^{ミィティア}と馴染んだのか？けど、本体に搭載されているGNコアだけでここまでの数値が出るのは有り得ないはず……だとしたら……）

「疾風。手が止まっているぞ」

「え！？に、兄さん。あ、ああ。ほんとだ」

兄さんの言葉で俺はいつの間にか手を止めて考えことに集中していたのに気づいた。

「どうした？急に考え込んで」

「実は…前に測定した時より流星の数値が明らかに上がっているだ」
ミーティア

「そうか。まあ、この世界に有り得ないことなんて何一つないからな」

俺は兄さんが言った俺たちにとって懐かしい台詞に少し驚いた。

「それ…父さんの……」

「ああ、そうだな。それより見る。シャルロットちゃん、もう機体に慣れてきているぞ」

兄さんに言われて、上空を見るとそこにはまだおぼつかないけど十分に乗りこなしているシャルの姿があった。

「……さすがシャルだな。こんな短時間であそこまで乗りこなしているとは」

「そうだな」

兄さんも少し笑ってシャルの飛んでいる光景を見ていた。

「さてと俺もさっさと調整してGNフルセイバーを搭載するか」

俺は少し体を伸ばして再度、デイスプレイを叩き始めた。スラストーや粒子圧縮のデータを新たに流星に^{ミィディア}入れ直して、その後GNフルセイバーをインストールを開始した。

（ちょっと予想外なことが起こったけど、まあ、これであとはGNフルセイバーにデータを入れ直して、フルセイバーの各種武装もデータを変更して　　）

『臯月、デュノア聞こえるか』

その瞬間、オープンチャンネルで千冬さんの声が聞こえた。

「織斑先生、なにかあったんですか？」

『ああ、お前たち二人はすぐに旅館に戻って来い。そこで詳しい話をする。いいな』

「はい」

「分かりました」

シャルのほうにオープンチャンネルで聞こえていたみたいでシャルも返事をした。

「兄さん、俺たち一旦旅館に戻るから」

「ああ。分かった」

そうして、俺とシャルは自身のISを待機状態にして旅館に戻った。

「では、現状を説明する」

俺たちが旅館に戻ると旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風間の間に専用機持ち、そして筭が集まっていた。大方、俺達が離れた後に束さんがあの筭専用のISをあげたのだろうな。

「二時間前、ハワイ沖での試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用IS『シルバリオゴスベル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの報告が入った」

シルバリオゴスベル
銀の福音……たしか、情報だと広域殲滅型のISだったな。しかも、

性能も高い。本当に厄介なのが暴走したな。

「……………」

そして、周りを見ると代表候補生の四人は、顔つきを陰しくして状況の把握に努めている。だが、当然のように一夏と篤は軽く混乱している感じだった。

「その後、衛星の追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することになった」

投影されるディスプレイに、ここ周辺の地図と福音の通過予測ルートが表示された。

千冬さんは淡々と言葉を続ける。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

なるほど、しかしかなり無茶な話だな。いくら代表候補生の四人いてもあの武装と性能に勝てるかは分からない。まあ、俺と今のシャルが加わるなら話は別になるがな。

「それでは作戦会議を始める。意見のあるものは拳手するように」

「はい」

まず手を上げたのはセシリア。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました」

そしてセシリアの要求通り、『銀の福音』のスペックデータがモニターに開示される。

代表候補の四人と教師陣はそれを基に相談を始めた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型。……私のISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動を両立させた機体ね。厄介だね。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向ここのほうが有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。今のリヴァイヴならかわ

せると思っけど」

「だが、この最高速度だと接触は一回だけになりそうだな」

「そう、皐月の言うとおりだ。この機体は現在も超音速飛行を続けている」

俺が偵察に行っても良いが…今の流星^{ミューティア}じゃこの速度には追いつけそうに無いな。

「やっぱり一度きりのチャンス……ということは、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

ここで山田先生も話に入ってきた。

そしてその言葉に俺も含めて全員が一夏を見る。

「え……?」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISで無ければいけない

な。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！ お、俺が行くのか！？」

「「「「当然」」」」

俺を含めた五人の声が重なる。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟が無いなら、無理強いはいしない」

織斑先生にそう言われた一夏の目にはすぐに覚悟の灯った目になった。

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちよつどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついてます」

「僕のシリウス・リヴァイヴでも十分な速度は出ます。疾風は？」

「いや、流星は調整中で今の速度だと福音に勝てない」

「そっか」

「ふむ……。まあ、どちらかが」

「待った待った。その作戦はちよつと待ったなんだよ！」

千冬さんの言葉を遮る、底抜けに明るい声。

発信源は天井。他の人と同じように見上げると、東さんの頭が天井から逆さに生えていた。

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？はっ、はいっ。あの、篠ノ乃博士、とりあえず降りてきてください……」

「とうっ」

くるつと空中で一回転、そして着地。まったく、本当に出鱈目だな人だな……

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「……出て行け」

頭を押さえる千冬さん。山田先生はすぐに言われた通り束さんを室外に出そうとしたが間単にかわされた。

「聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！パッケージなんか無くても超高速機動ができるんだよ！」

そう束さんが言うと、千冬さんを囲むように小型ディスプレイが展開された。

「紅椿の展開装甲を展開して、ほいほいほいっと。ホラ！これでスピードはばっちり！」

そのあと、すぐにメインディスプレイにも紅椿のスペックデータが表示される。それにしても自然とハッキングしちゃったよ、この人。

「説明しましょーそうしましょー。展開装甲というのはだね、この天才束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー」

その言葉にその場にいる俺以外の全員は驚いていた。

24話 新たな力と作戦会議（後書き）

俊さん、いつもありがとうございます。

感想・ご意見お待ちしております。

25話 出撃とアンノウン

「はい、ここで心優しい東さんの解説開始。いつくんのためにね。へへん、嬉しいかい？まず、第一世代。これは『ISの完成』を目標としたものだね。次の『後付け武装による装備の多様化』これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』空間圧作用兵器にBT兵器、あとはAICとか色々だね。…で、第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という現在絶賛机上の空論中のもの。さて、いつくん理解できました？先生はハヤ太くんみたいな優秀な子が大好きです」

「は、はあ……。え、いや、えーと……。？」

東さんの説明によって、一夏は完全に混乱したようだ。

「簡単に言つと、どんな時でもパッケージの換装しなくてもあらゆる状況に対応出来るという事だ。理解したか」

「あ、ああ。なんとか……」

けど、説明して思ったが正直ここまでやりすぎた機体だとその帰属を巡って各国の争いの火種にもなりかねない存在になるな……

「まあ、具体的には白式の《雪片式型》に使用されてまーす。ために私が突っ込んだ」

「「「え?」「」」」

「つまり、分類されるなら白式も四世代型と言うわけだ」

「そう!それでうまくいったからなんと、紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしてありまーす。システム最大稼動時のスペックデータはさらに倍ブツシュだ」

「ちよつ、ちよつと、ちよつと待ってください。え?全身? 全身が、雪片式型と同じ?それって…」

「うん、無茶苦茶強いね。ハヤ太くんの流星^{ミューティア}を除くと最強だね」

東さんの言葉に俺と千冬さん以外全員が完全にポカンとしていた。

「さらに紅椿の展開装甲はより進化したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機^{リアルタイム・マルチロール・アクトレス}ってやつだね。にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい」

もはや、誰も何も言わず、その場はシーンと沈黙していた。

「はにや？あれ？何でもみんなお通夜みたいな顔してるの？誰か死んだ？変なの」

「いや、東さん違うから」

俺が突っ込んでいると最初に口を開いたのは千冬さんだった

「東。言っただけだぞやりすぎるなと」

「そうだったけ？えへへ、つい熱中しちゃったんだよ」

東さんはやっと、この状況を理解したようだ

「でも、まだ紅椿は完全体じゃないし、そんな顔しないでよ、いっくん。いっくんが暗いと東さんはイタズラしたくなっちゃうよん」

「今の話は紅椿がスペックをフルに引き出せた時の話だ。けど、今回の作戦遂行ぐらいなら十分おつりが来る」

「だねえ〜でも、海で暴走って聞くとアレ思い出しちゃうね。十年前の『白騎士事件』」

白騎士事件

十年前。東さんがIS発表から一カ月後に起きた事件。日本を射

程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが一斉にハッキングされて、二三四一発のミサイルが発射された事件だ。そして、そこに現れたのは束さんが最初に作ったIS『白騎士』だった。

「ぶった斬ったんだもんね。ミサイル約半分の一二二一発を。あれはかっこよかったな」

『白騎士』は当時では試作段階になっていた武装をしてミサイルを撃墜していった。

そして、それを見た各国は『白騎士』を捕獲もしくは撃破しようと大量の最新鋭の戦闘機や戦艦などを送り込んだがすぐに軍事兵器の大半を撃破した。それも破壊ではなく無力化をしていった。

この事件以降、ISの関心が高まることとなった。けど、このハッキングを行ったのは束さんで世界にISの価値を示すために行ったマッチポンプに過ぎなかったんだよな。

「そうして私のらぶりいISはあつという間に広がっていったんだよね。でも隙あらば誘拐、暗殺っていう状況はなかなかエキゾチックだったよ。ウフフフ」

そして……兄さんが束さんをたまたま見つけてBRAVE社で身を隠してあげたんだよな。
フレイヴ

「それにしても、白騎士って誰だったんだろうね」

「知らん」

「私の予想でバスト八八センチの」

「ごすつ。鋭い音がした。千冬さんの出席簿アタック、もとい情報端末アタック。」

「あれって、外装は鉄だから普通の人だったら死ぬんじゃないか？」

「ひ、ひどい、ちーちゃん。東さんの頭は左右に割れたよ!？」

「そうか、よかったな。これからは左右で交代に考え事ができるぞ」

「おお！そつかあ！ちーちゃん、頭いい!！」

「いや、二つに割れたら考える前に死にますから」

「あ、そつかゝ残念」

「ホント…この人と話してると気が抜けるな……」

「そろそろ話を戻すぞ？東、紅椿の設定にどのくらいかかる？」

「お、織斑先生!？」

「セシリアが声を上げた。現在専用機持ちの中で高機動パッケージ」

を持っているのは彼女だけだったため、作戦に参加できると思っていたからな。それに仮に作戦とは言え、一夏と二人きりになるチャンスでも思っただのか？

「オルコット。そのパッケージは量子変換^{インストール}してあるのか？」

「あ、それは……」

「紅椿は七分あればOKだよ！」

「それでは決定だ。それにデュノアはまだ機体に慣れていないだろう」

「は、はい。まだ、最高加速までは出来ないと思います」

たしかにな。さっきの試運転だと引き出せたのは性能の半分ぐらいだろうしな。

「本作戦の主目標『銀の福音^{シルバリオ・ゴスベル}』への攻撃は織斑・篠ノ乃の両名に行ってもらおう」

パンツと千冬さんが手を叩いたのを合図に教師陣はそれぞれ設備の設置などに取り掛かり始め、専用機持ちはそのサポートに入った。この辺りの手際はさすがと言って良いな。

「
皇月」

と、俺も作業に入ろうとすると千冬さんに呼び止められた。

「なんですか？織斑先生」

「お前は自分の機体の調整を行え。作戦中のイレギュラーにはお前に当たってもらう」

「分かりました」

俺はすぐに千冬さんの指示どおりに流星^{ミーティア}の調整を始めた。

午前十一時半。

疾風は他の専用機持ちの面子同様にブリーフィングをしていた大広間にいた。ディスプレイにISアーマーを装備した一夏と箒が映っていた。そして、一夏は紅椿を装備した箒の背に乗る形になった。

「織斑、篠ノ乃、聞こえるか？」

インカムを使つての千冬の問いに二人はうなずいて答えた。

「今回の作戦の要は一撃必殺だ。ワンアフローチ・ワンダウン短時間での決着を心がける」

『了解』

『織斑先生。私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？』

「そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験が皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない」

『わかりました。できる範囲で支援します』

言葉遣いはいつも通りでも、どこか浮ついた声色の箒。

（箒の奴、専用機を貰って、かなり浮ついているな…なにかミスをしなければ良いが……）

疾風がそう思っていると千冬は少し間を空けてから、話し出した。

「
織斑」

『は、はい』

「これはプライベート・チャネルだ。声は出さなくて良い。……ど

うも篠ノ乃は浮かれているな。あんな状態では何かし損じるやもしれん。いざというときはサポートしてやれ」

『わかりました。意識しておきます』

「頼むぞ」

そして、千冬はプライベート・チャンネルから、オープン・チャンネルに戻した。

「では　はじめ！」

千冬の言葉と同時に、紅椿は急加速で飛び出した。今度は、驚愕の聲が上がった。

「なんてスピードよ！イケニッション・ブースト瞬時加速の非じゃないわよ！」

「なんというスピード……」

「あれが、第四世代機の力ですの！？」

ディスプレイに表示される二人を写した映像の中で二人はどんどん遠ざかり、ものの数秒でそのカメラでは点として写るほど遠のいた。

「……ねえ、疾風」

「なんだ、シャル？」

「今のリヴァイヴもあのくらいのスピードは出るの？」

「ああ。完全に使いこなせれば、普通に出るぜ。それに裏技を使えば、多分、ISの中で追いつける機体はないと思うぜ」

「裏技？」

「また今度しつかり教えてやる」

疾風は優しくシャルに言って、すぐに視線を千冬に向けた。

「織斑先生、俺は流星の最終調整をします」
ミィティア

「何？まだ、調整が終わっていないのか？」

千冬は少し驚きながら、疾風を見る。

「はい。さっきの時間で格武装の調整を終わりましたが、スラスト
ーとかの調整が済んでいないで」

「分かった。それでは」

千冬の言葉を遮ったのはいつもと違う鋭い真耶の声だった。

「織斑先生！ここから約二十キロの海域にアンノウンの反応が！」

「なに！？」

「数は一。所属は不明！海域を封鎖をしていた先生は一瞬でやられたみたいです」

その報告に大広間の中にいる全員の間にも更なる緊張が走った。IS学園の教員が一瞬でやられた。それがどういふことなのかこの場にいる全員が知っていたからだ。

「……織斑先生、アンノウンの対処には俺が行きます」

「疾風！」

疾風の言葉にシャルは驚き、声を荒げる。

「……お前の機体はまだ完全ではないのだろうが許可できん」

「ですけど、イレギュラーの対処には俺がやると織斑先生自身が言っていたではありませんか。それにこの場にいる専用機持ちでその

アンノウンと戦えるの俺だけです」

疾風の真剣な表情を見た千冬は少し目を閉じ、考えて目を開けた。

「分かった。その代わり、命令だ……必ず、帰って来い」

「了解！」

疾風はそう言って、大広間から走っていった。シャルはその背を心配そうに見ていた。

「……疾風……」

「デュノア、心配するな。あいつは必ず、命令を守る。必ずだ」

「……はい」

千冬にそう言って、シャルの肩に手を置いたがシャルの中にある心配は消えなかった。

25話 出撃とアソノウン（後書き）

感想・ご意見お願いします！

26話 流星、海に墮ちる

旅館を出た後、俺は流星^{ミーティア}を展開して、アンノウンの予測ルートに飛翔していた。

「さてと……教官を瞬殺した相手。本気でやらないとマズイかな」

『そうしてもらわないと困るよ。皐月疾風くん』

その瞬間、オープンチャンネルによって声が聞こえてきた。声は若い男の声。そして、すぐにハイパーセンサーで見えたのは赤と黒の装甲をしたIS。背部の赤い羽のようなウイングスラスターからは銀色の粒子が放出した。

「お前か……教官を倒したアンノウンは？」

「ああ、たしかにさっきの邪魔をした奴なら、すぐに倒したよ」

「やっぱりか。それにそのGN粒子は……」

「そう。僕はシゼル・オルフェウス。君と同じGNコアを使った研究者だよ」

同じ、か。たしかに粒子の色は違うけど、あれはまぎれもなくG
N粒子…まさか、俺と同じ考えを持っている奴がいるとはな。

「じゃ、前にIS学園に無人機を寄越したのはお前か？」

「そうだよ。本当は織斑一夏のデータを取るただけだったけど、
代わりに君のデータを取れたよ。BRAVE社の副社長、皐月疾風
くん」

「ふうん。で、お前の今の目的はなんだ？福音か？一夏か？どちら
にせよ、あいつらが目的ならお前をここで」

「いや、僕の目的は違うよ……僕の目的は君との戦闘だよ」

「戦闘、だと？」

「こいつ、なに言っているんだ。俺と兄さんの考え通りに亡国機業
のメンバーじゃないのか。」

「お前は…亡国機業のメンバーじゃないのかよ？」

「そうだよ。今は亡国機業の一人さ。けど、僕の動きは誰も止めら
れない。だからこそ、僕は君との戦闘を望むんだよ」

「だが、俺はお前の戦闘の意味はない」

「へえ、君は戦闘の意思は無いのか……なら…」

その瞬間、手にビーム砲を展開をした。そして、狙いを定めたのは俺ではなく

「君に戦う気になってもらっただけさ！」

標準は 俺の後ろにある旅館だった。

「なっ！」

その瞬間、耳をかんざくような巨大な音が響いて、巨大なエネルギーの閃光が旅館に向かった。

「くそ！間に合え！」

すぐにGNシールドからソードビットを放ち、旅館に当たる前にソードビットで展開したGNフィールドで防ぎきった。

「デメエ……」

「少しは、やる気になったかい？」

「ああ、なったさ。テメエの願いどおり、戦う気になってやったよ！」

「それは良かった。なら、始めよう」

シゼルはビーム砲を収納して、即座に両刃の長剣を展開して、構えた。
クロス
オープン

なるほど、展開の速さならシャル並だな。

「ああ」

俺も腰にマウントしてあるGNソードを抜く。

「すみません、千冬さん。勝手にリミッターを外します……流星リミッターリリース」
ミューティア

その言葉と共にGNコアから大量のGNコアが放出された。

「さあ、行くよ。君のGNコアを力を見せてごらん！」

その瞬間、互いに近づき、互いの獲物がぶつかり合った。

「……ねえ、その肩の大剣は使わないの？本気を出さなきゃ、困るんだけど」

「さあな！」

さらに力を込めて、相手の剣を弾いて、距離を取りながらモニターを開く。モニターには未だに最終調整が済んでいないGNフルセイバーの詳細なデータが書かれていた。

（まだ、GNフルセイバーの調整はすんでいないか。流星^{ミーティア}、GNフルセイバーの調整を任せるぞ）

そう思いながら、GNソードをライフルモードに変えてシゼルに向けて、撃つ。だが、やはりこの程度じゃ、簡単にかわされるか。

「この程度で僕を倒すつもりなのかい？さっきのビット兵器も使いなよ」

「ちっ！なら、見せてやるよ」

一斉にGNソードビットを放ち、シゼルに向けて飛ばした。だが、シゼルは余裕でかわしていった。

「ふうん。僕の似ているね」

その言葉とともにウイングからビット兵器を放ち、他方向から一斉にビームを撃った。

「ぐっ！」

すぐにかわそうとした瞬間、直線に進んできたビームの全てが俺のかわすルートに曲がった。

「これは……！」

驚きながらも、ギリギリでGNシールドとGNフィールドで防ぎきった。しかし、ビームが曲がる。たしか、あれは……

「その技術は……イギリスのBT兵器の技術か!？」

「へえ、初見でそこまで分かるとはね。さすがだね」

なるほど、大方イギリス政府にハッキングして盗んだのか。だとした、他の国の技術も入っていると考えたほうが良いな。

（まずはBT兵器の技術以外に何があるのか、ためしてみるか）

そう思いながら、再度GNソードビットを放つ。今度はさっきとは違って、多方向から飛ばしたことにより、何基かはかわせず、直撃コースだった。が、シゼルは余裕そうに右手を突き出した瞬間、GNソードビットの動きが止まった。

「その構え…ドイツのAICか！」

そう言いながら、ビームを撃つ。シゼルはAICを解除してビームをかわした。AICによって、動きを封じられていたGNソードビットはすぐにGNシールドに戻った。

「……ねえ、疾風くん。君の機体とコアのシンクロ率って何パーセント？」

「何？」

「だから、シンクロ率だよ。見たところ、まだ臨界点を超えていないみたいだね」

「それがどうした！」

GNソードのライフルモードで標準を定めて、撃つ。だが、シゼルは簡単にかわすとまるで興味が無くなったような表情になっていた。

「……はあ、駄目だね。臨界点を超えたGNコアを搭載したISがぶつかったら、どうなるか……それだけが興味があったのに君が臨界点を超えていなかったら意味無いんだよ」

「そうか。なら、どうするんだ。俺としてはこのまま帰ってもらったほうが助かるんだが……」

「……うん。このまま帰っても良いけど……なんか腹が立ってきたな……」

「なに!？」

「僕と同じGNコアを搭載したISを操っているのが、腹が立つんだよ」

「なら、どうするんだ?」

「……こうするんだよ」

その瞬間、シゼルの周囲に銀色のGN粒子が展開してそれが晴れたときシゼルの姿が消えた。

「なっ……!？」

俺は驚き、すぐにハイパーセンサーで360度を見たがシゼルの

姿が見えない。

「これは…どういうことだ!？」

『僕のIS『ブラッディ・ファンゲ 鮮血の牙』の単一仕様能力『ワンオフ・アビリティー 銀色の領域』。もう君に僕を見つけることは出来ない』

警告!後方にて空気圧縮を確認

その警告が現れた瞬間、後ろから空気を圧縮した一撃が俺の背中に直撃した。

「ぐっ…!」

少し吹き飛ばされたがすぐに体勢を整えて、攻撃を撃たれた場所を見たがそこには誰もいない。

「これは…!？」

『さあ、君の鮮血を見せてよ!』

その瞬間、今度はなにも無かった場所からビームが襲い掛かってきた。すぐにかわそうとしたが今度のビームは直角に曲がり、俺を

襲ってきた。

「がっ……！」

一瞬、意識が飛びそうになったがなんとか堪えて、体勢を整える
と今度は前方、後方、横から斬撃を喰らった。『絶対防御』が発動
していて、シールドエネルギーはみるみると無くなっていった。

「はぁ……はぁ……」

斬撃が止むと俺も流星もボロボロになっていた。頼りのGNフル
セイバーの調整は終わっていない。これは……かなりやばいな……

『さあ、これで終わりだよ』

その言葉と共にまたシゼルの姿が現れる。手には先ほど旅館に攻
撃をしたビーム砲を俺自身に向けていた。

警告、警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、エネ
ルギー装填

「さっきのは威力を押さえていたけど、今度はどうなるかな？」

「くっ……！」

その瞬間、さっきよりでかい音が響いて、巨大な閃光が放たれた。俺はすぐにGNフィールドを広範囲に展開した。が、GNフィールドは簡単に抜かれて、閃光は俺の体を包んだ。エネルギーシールドで相殺し切れない分の熱波が全身の肌が焼きついていく。そして、自分の体が海に落ちていくのが分かった。

26話 流星、海に堕ちる（後書き）

感想・ご意見お願いします

27話 互いの決意

「……………」

旅館の一室。壁の時計はすでに四時前に指していた。

シャルロットを含む代表候補生は現状待機を命じられ、自分の部屋にいた。

「…………シャルロット。大丈夫か」

「……………」

シャルロットのルームメイトであるラウラは心配そうにそう聞くがシャルロットはじつとうなだれているまま、返事をしなかった。

福音への作戦は一夏が負傷により失敗。そして、疾風はアンノウミイティアが接触した瞬間、アンノウミイティアと流星の反応が消えた。そして、次に現れた反応はその空域から離れるアンノウのみ。ミイティア流星、疾風の反応は現れなかった。

「シャルロット。なにか飲み物を買に行くが何か、飲むか？」

「……………」

シャルロットは何も言わず、首を一度横に軽く振っただけ。ラウはその答えを見て、悲しそうな表情のまま部屋を出て行った。

「……疾風……」

部屋に一人になったシャルロットは疾風の名前を呟きながら、腕に付けているチェインブレスレットを触った。その瞳からは今まで溜まっていた涙が溢れていた。

「あの時……僕も疾風に付いていけば」

「そんなことをしたら、あいつはお前を守りながら、戦うことになっただろうな」

「ッ……！？」

突然の声にシャルロットは顔を上げ、声をしたほうを見る。そこには腕を組んだ千冬が立っていた。

「おり……むら……先生」

「しかし、ボーデヴィツヒが言っていた通りになっているな」

「なにか……ありましたか……」

「いや。現状待機は変わらずだ……疾風の搜索も現在、教師部隊で行っているが……いまだに発見されていない」

「そう……ですか」

「福音が見つかり次第、再度出撃になるだろう。体を休めておけ」

「……はい」

小さく返事をする千冬は部屋を出ようとした時、ふと、足が止まった。

「ああ……そういうば、お前以外の専用機持ちがなにやら、動いていたぞ」

「みんなが、ですか……？」

「大方、福音を独自で探して再出撃をする気だろうな。馬鹿者どもめ」

「えっと……それをどうして、僕に……」

「さあな……だが、もしもこの場に疾風がいたら、どうしていただけるかな」

「……はい！分かりました」

シャルロットは千冬の意図に気づき、表情を変えて、すぐに立ち上がり、すぐに部屋を出て行った。そして、すぐに思い当たる場所、一夏の部屋に向かうとそこには箒、鈴、セシリア、ラウラが驚いた顔で急に入ってきたシャルロットを見ていた。

「シャルロット！？お前、どうしてここに……」

「みんな……僕もみんなと一緒に戦いたい！」

「……あんだ、大丈夫なの？」

「僕は大丈夫。だから、僕も戦う」

その場の全員は覚悟の灯ったシャルロットの瞳を見て、全員は何も言わず、縦に首を振った。

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に堕とすわよ」

「うん！」

鈴の言葉で専用機持ち全員で福音の作戦会議が始まった。

（疾風…疾風が帰ってくるまで僕がみんなを守るよ）

「ん……じっは……」

目を開けると俺は一面の草原の場所に立っていた。優しいかぜが頬を当たり、気持ち良い。

「俺は一体……たしか、あいつにやられて……」

「そうです」

ふと、後ろから声が聞こえ、振り向くとそこには長いブロンドの髪に純白のワンピースを着た少女がいた。

「君は……?」

「……私は貴方に作られて、貴方の剣です」

俺が作って、俺の剣?それって、もしかして……

「君は……流星ミーティアなのか」

「はい。そうです。主、申し訳ございません」

と、少女 流星ミーティアは急に深々と頭を下げた。

「な、なにがだよ。もしかして、俺が堕ちたことを言っているなら、それは俺の責任だ。流星ミーティアのせいじゃない」

「いいえ。私に着けてくれた新たな力の調整を大切な場面で完了できず……」

「新たな力？ああ、GNフルセイバーか……」

「はい……私が器と深く同調シンクロしたせいでマスターのお手を煩わせてしまいました」

「まあ……そこまで自分に悪く思うな。俺は今までお前のおかげで戦えたのだからな」

「ですけど……」

「俺、過去のことをグチグチ言うの嫌いなんだが」

「は、はい。すいません……」

なんか、さっきから謝られてばっかだな……

「さて、と。俺もそろそろ行かないとな」

「え？ど、どこにですか？」

「みんなの所にだよ。あいつらのことだ。俺の考え通りに事が進んでいるなら、あいつらは福音と戦っている。助けに行かないとな」

「……………どうして…」

「ん？」

「どうして、こんなボロボロになっているのにまた戦おうと思うんですか！？」

ミーティア

流星はもはや怒鳴るように言っていた。

「どうしてって…答えは簡単だ。俺は仲間や大切な人を守りたいだけだ」

古くからの大切な親友の一夏と箒。IS学園に入って出来た友達のセシリアと鈴、ラウラ。そして、一生を共に生きると誓ったシャル。俺はみんなを守りたい。誰一人に傷ついてほしくない。だからこそ、俺は戦うんだ。

「そうですね……なら、行かなきゃいけないですね」

ミーティア
流星は軽く頷いてから優しく微笑み、右手を差し出す。

「ああ」

俺はその手を取るとそこから優しい光が生まれ、俺と流星の体を包まれた。ミーティア

（
頼むぞ、流星）ミーティア

（
はい、主）

27話 互いの決意（後書き）

感想・ご意見お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0640s/>

IS<インフィニット・ストラトス> 流星の騎士

2011年8月23日16時15分発行